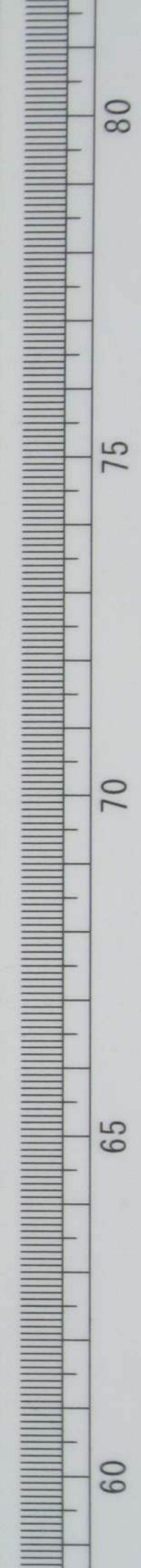
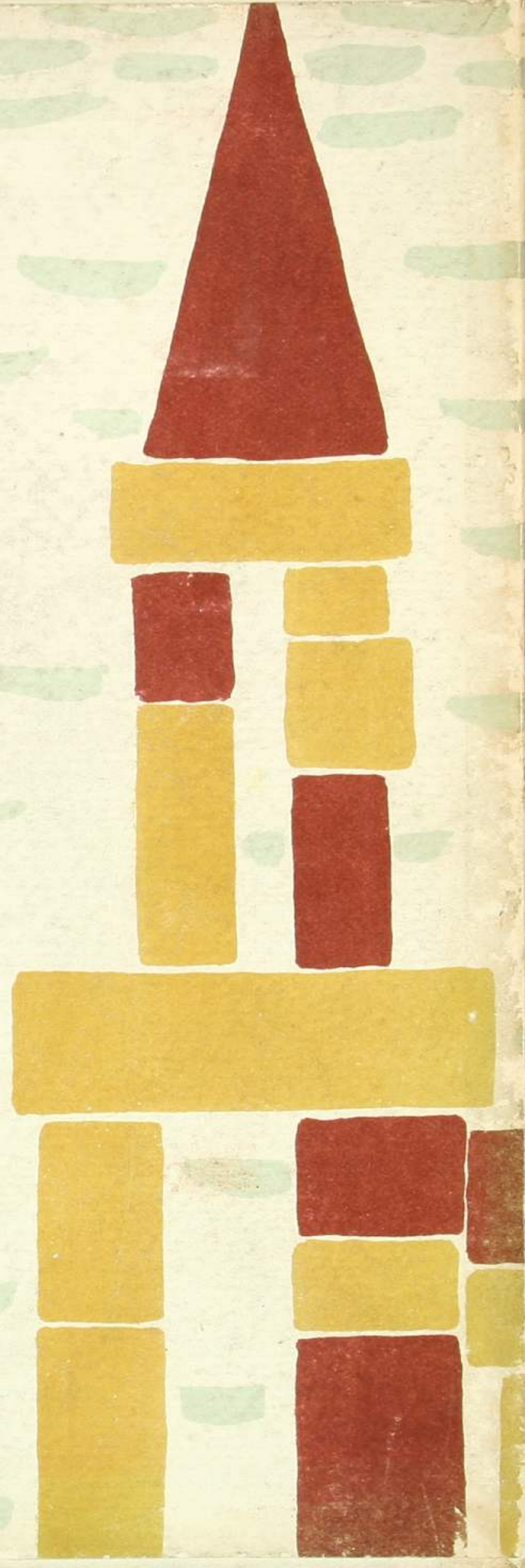


教師の家

中村春雨作



牧師の家

中村春雨作

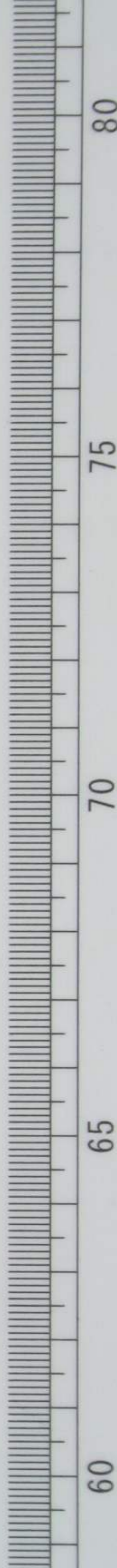
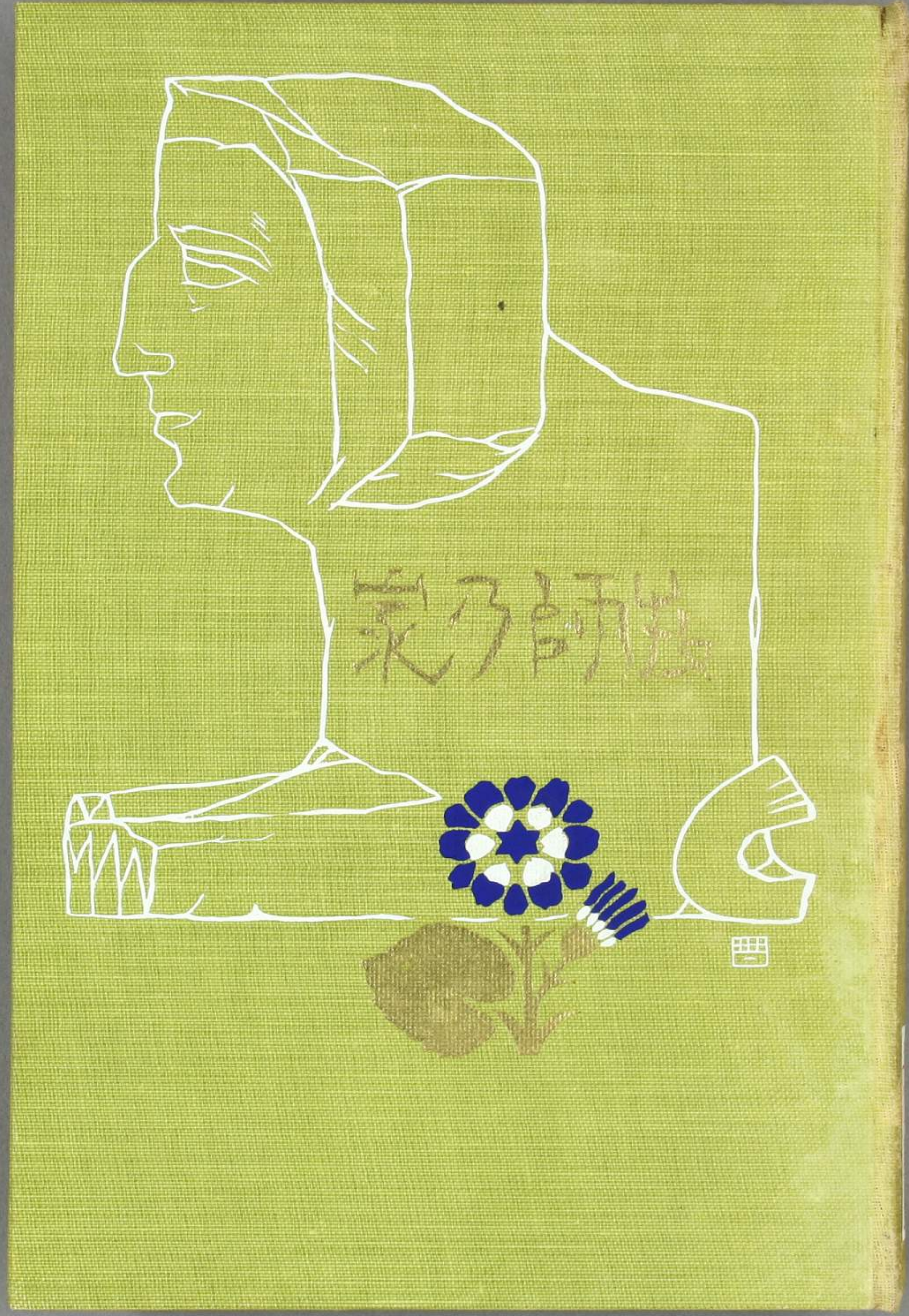
本間文庫

文庫 14

D 275

藤齋藏書

三十八

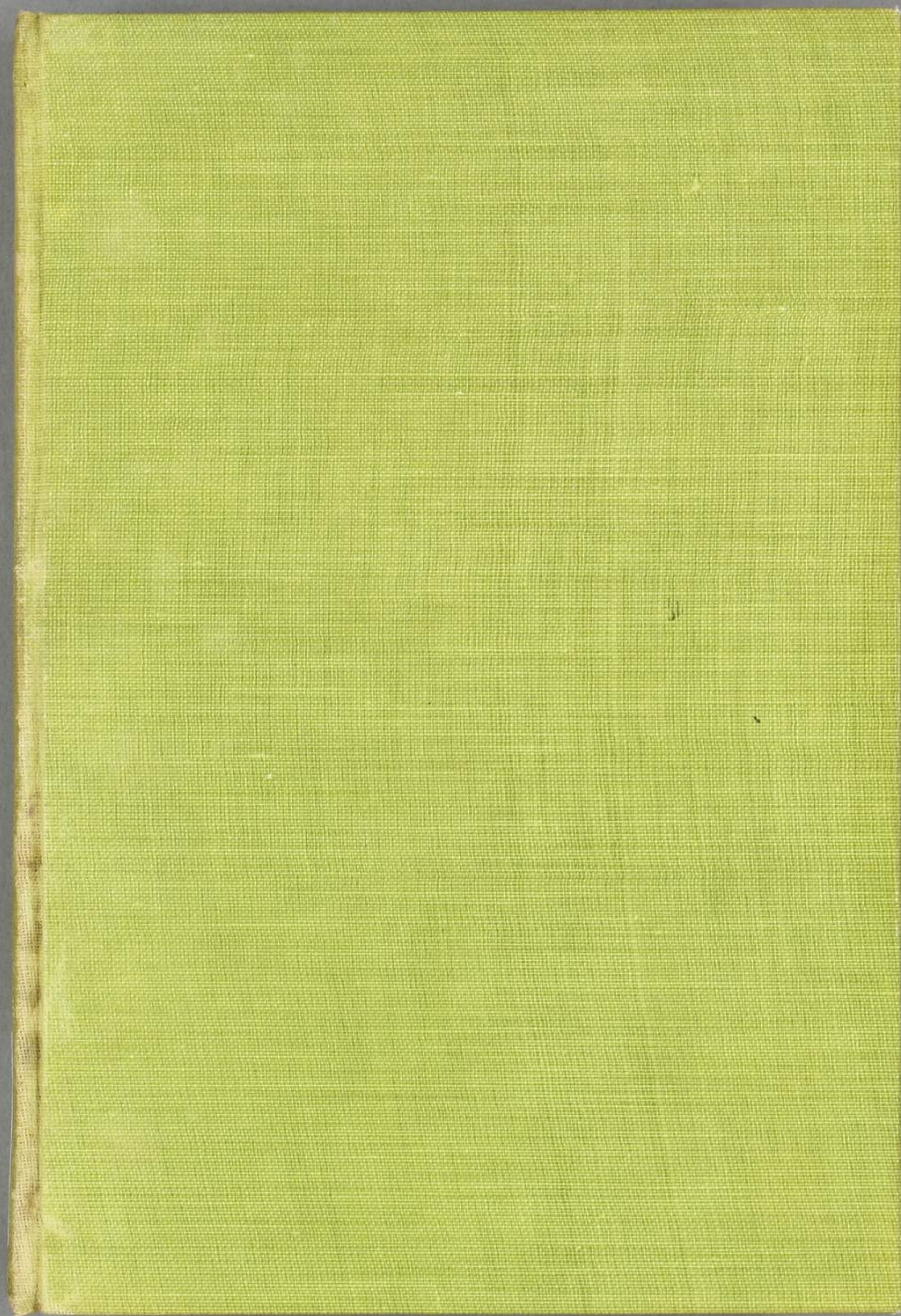


源氏物語

本間文庫

文庫 14

D 275





牧師の家

中村吉蔵作



新橋堂發行
春秋社

牧師の家

中村吉藏作



新橋堂 發行 春秋社

文庫14
D275



序に代へて

坪内博士が嘗て在來の歌舞伎劇を評して、(一)錦繪仕立(二)草双紙張
(三)茶番氣の三惡癖が靈怨靈の如く附いて廻つてると云はれた事がある、
誠に適評であるが蛇足かは知らぬが、此に一つ、例の宙乗や、立廻りなど
の輕業氣の祟もあると云はせて貰つたら、歌舞伎劇の怨靈の正體も略見透
かされた様に思はれる、自然科学勃興の今日、早くも其氣運に促されて小
説方面は兎も角長足の大進歩を遂げ、現代の社會人生の活きた脈膊に觸れ、
その心臓にまでも喰ひ入らんとする自然主義的の文學が榮え、やがては深
くその靈魂の祕密をも窺はんとする表象主義的の文學や新ロマンチズム文
學の提唱とまでなつて來てゐるのに、一方、演劇方面では約半世紀も遅れ

て未だに徳川時代の迷信の夢が醒めず、昔のまゝの怨靈に惱まされてゐるものがあるのが目下の現状である、無論演劇の方面は小説の方面と違つて、多大の營業的要素に附着されてゐるから然う早く時代と共に推移し得られる程身輕でないのは知れてあれど、日清、日露の兩大戦争を経て、明治も已に四十年代となつて今日、この有様であるとは奇蹟と云はうか、不可思議と云はふか、何とも以て名狀の仕様がないのである、尤もかゝる歌舞伎劇を一種の骨董品として見るのなら差障はない様なものであるが、而も前代に倫を絶する明治生れの活氣潑漑たる新國民が、假令娛樂としても骨董品いぢりに貴重な金と時とを浪費する丈の餘裕は無い筈である、骨董品一手賣で徳川時代の夢を見て喜んでゐる舊弊連や、俳優の顔をのぞいて氣晴らしにする婦女子連などを顧客に、今日まで漸く其命脈丈を繋いで

來た都下幾多の劇場が、昨今非常の悲境に沈淪して、興行師なる一種の策士連も頭を鳩めて善後策に餘念無き有様となつてゐると云ふのは、自然の痛快なる刑罰として彼等が甘受せなければならぬものである、偶歌舞伎座の四月興行の當つたなどいふのは例の必死の運動の結果で、羽左衛門に對する義理交際の見物連中が、その大部分を占めて居る事は云ふまでもない、此で乘氣になつて歌舞伎劇のリヴァイヴァルなどといふ迷信を起す程お人善しの彼等でもあるまいが、將に滅せんとする燈火の一度明かになるといふは、戒心して置く必要があらう

素より明治時代の新産物たる新派劇なる者も一方には存してゐる、そして所謂壯士芝居時代よりは、脚本に於ても、彼等俳優の技倆に於ても多少の進歩はしたであらう、併し其進歩なるものも今已に停滯期に入つて、小

説方面の「不如歸」時代以後からは一步も前に出てゐない、小説方面の自然主義文學の革命の波は毫も新派劇の區劃線を犯してゐないのである (1)

是れは新脚本が出ないといふよりは、寧ろ彼等所謂新俳優に、教育の素養なく、文藝上のカルチュアを缺いてゐる爲め時代の新精神を解する能力無く、従つて姑息偷安、自ら成立した一種の模型の中に早くも自己の技藝の避難所を作つて、以て足れりとする餘り、その模型に合ふやうな脚本の外には手を出さうともせぬ、偶手を出せば、改削、補綴、勝手千萬な眞似をやつて、新脚本をして舊脚本たらしめずんば止まないのである、今試みに彼等の用ひつゝある脚本を検査して見ると(一)寄席的(二)活動寫眞的(三)見世物的の三幽靈の影に付き纏はれてゐる事が分明する

第一の寄席的幽靈といふのは無論寄席に見る如く、落語家式の滑稽やく

すぐり、人情嘶的の安い涙や、淺果敢なる色戀の經緯、それから一寸した三味線に咽喉を聞かせるのやら、偶々勇壯な戦争談などが交つても、要するに新聞雜報で讀む以上に、心理的の深い解剖もなく、裏面の洞察も無く、高が上面丈を撫で、通るやうな者許り、その間合々々に支那人の踊りや、怪しいツアキオリン彈や、少年の劍舞や、一時の好奇心に訴へん事をのみ力めてゐるあの行き方を演劇的の形式に並べ換て見せてゐるのが、今日の所謂新派劇の一面であると云つて差障はない

第二の活動寫眞的幽靈といふのは、新橋停車場前の實景であるとか、向島の夜景とか、海岸の景色とか、活動寫眞で見たら多少の興味のあるものを、態々背景に仕立て、無用の行人、行客を舞臺上に入せしめをまげに、それを目まぐるしくくゞ變えて見せてそれで一時、觀客の眼先を眩ま

さうとする行方である、オペラは兎に角、劇には背景無用論さへ一方に唱導され、背景を單純にせんとする新運動さへ起りかけてゐるのが今日歐洲劇壇の一新氣運であるのに、斯る活動寫眞的の興味を借來つて、さらでだに淺薄なる劇の技藝の方の眞味を一層稀薄にせんとするが如きは、誠に以て濟度し難き幽靈に憑かれたものである

第三の見世物的幽靈といふのは、米國などで盛んに行はれる色電氣の作
用で眞の浪に似たるものを舞臺上に漲らせたり、曙の色夕日の色を思切つて濃く花やかに見せたり、けた、ましい暴風雨の音を聞せたりする傾向——無論、日本の舞臺に用ひる電氣仕掛その他は、この程度に迄進んで居ないから善いやうなもの、先頃、本郷座に現はれ、今回も又現はれてゐる幻影や、幽靈などは、正にこの同一傾向のものである、今は見えぬやうだ

が、夏向、舞臺一面大仕掛の瀑布を作るなどいふ、大道具、大仕掛の新派好みの趣向も正にこの見世物的幽靈の祟りである、兵隊の行列など、川上時代から今も尙その系統を引いてゐる婦女子欺しの趣向の如きも、この同一幽靈の所爲である

この他、家庭小説式の幽靈に憑れてゐるのは最も顯著な現象であらうが、この小説幽靈が如上の三幽靈に分裂して、新派劇の生命の根元にまでも喰ひ附いて、その生魂を一日々々と吸枯らして行くものと見るべきであらう斯の如くして、所課新派劇も最早成長發展の精根が盡き、氣力が抜け去つてゐる、歌舞伎劇の方は、さすが數百年來、鍛鍊の功を經來つてゐる丈に、一種の骨董品として踏める丈の價値は有してゐるが、この新派劇の方は、品質も外見も共に粗惡で、一日々々と目に附く丈、古る物になつて行

くので、美術品としては勿論、日用品としても、他の寄席や、活動小屋や、見世物小屋程度に需用があるか否かは疑はしくなつて来る、高い金を拂つて、長い時間を費してまで見に行くといふ篤志者が、將來に何れ程出て来るか、否か、一つの疑問となるのである

勿論、新時代は常に新藝術を要求する、演劇が藝術の花中の王であるか否かは、暫く異論があるとしても、少くとも人間最高の趣味心の要求の一を充たすものたる事は疑ひない、現に佛國に國立劇場があり、獨逸に王立劇場があり、スペインにも最近國立劇場が出来、英米に於てもこの種の設立運動の氣運が盛んになつて來てゐるのを見ても、歐米の文明諸國に於て、一國の上下を擧げて、如何に演劇に向つて多大の興味を有してゐるか、察せられる、日本に於ては國運大勃興の後を受けて、新時代の精神は、先づそ

の口片マウスピースを小説方面の新藝術に求めたが、一層具體的に、有形的に、その活動を演劇方面の新藝術に求むべきは必至の勢ひである、帝國座の建設の如きは藝術的氣運の所産でないのは勿論であるが、國運擴張の直接影響たる事は云ふを俟たない、この新國運の漲ぎり互れる強大なるエネルギーは、あらゆる方面を壓迫して、やがて新藝術の噴泉口を新に劇場場裏に求めしむるの氣運を促成する事は當然の理數であらう

然らば、かゝる新氣運に應ずべき新なる演劇とは果して如何なる傾向と内容と形式とを備へたものでなければなるまいか？これは一概に論じられる輕易な問題ではないが、オペラ式のものとは別として、現代の社會人心の急處々々に端的に觸れて行くのを目的とし、生命とすべき社會劇の方面のみ就て云へば、差當りイブセン式とか、ショウ式とか、ウヰード式と

か、下つてはピテロ式、ジョンズ式のものでなければなるまい、マートルリンク式や、ホフマンスタール式も無論結構には相違ない、一部にはその方面の試みも必要の事であるが、兎に角、棉火薬的に舊物の大破壊をやるといふのが現當直接の要務であるといふ點——殊にあらゆる意味に於て舊劇壇の大破壊作業をやるには、前に掲げたものゝ方、殊に十九紀より二十世紀初頭に互つて劇壇のナポレオンの地位にある、彼の北歐の偉人の用ひた方法と精神とは取つて以て學ぶべきものであらうと自信する、無論イブセンの弟子で終つてはなるまいが、眞の自己を發揮する階梯としては、手近くても低い小山に上るよりか、少しは足が疲れても先づ高い山から攀ちてかゝつた方が、遙に眼界を廣くするの好方便ではあるまいかと自分一箇はまア然らう愚考してゐる

兎に角、此等の新式の脚本が先づ出来たとしても、此を演ずる俳優の方で、善く新脚本の精神を會得して、舊模型を離れ、全く新しい氣持と態度とを持って、人物を仕活かすといふ眞摯な覺悟と、熱誠な研究心のあるものが出来なくてはならぬ、元來、日本劇壇に於ては舊俳優は素より、所謂新俳優なる者も前に云ふ如く教育がない、文藝上のカルチュアが足らぬ、獨逸の如きは、藝術家と云ふよりか、學者臭いと云ふ批難さへある程、一部にはカルチュアの進んだ俳優もある、露國の女優の如き、自己の好んで扮するマートルリンクに關し、イブセンに關しては、日本の専門研究家などより遙に進んだ、獨創的の意見を有してゐるものもある

米國の、死んだマンسفールドにしる、今のサザリンにしる、文藝上の見識はナカ／＼高い、日本の下手な學者などは足許にも及ばぬ程である、

此等は皆代表的の俳優であるが、一般に西洋の俳優は脚本の精神を解し、人物の性格を會得する丈のカルチュアは持つてゐる、そこになると、日本に新脚本が出来ても俳優の方面から多少心細くなつて来るが、このカルチュア問題は兎に角、今一つ熱心と眞摯の研究的精神——此れ丈でもあつてくれればまだ人意を強うするに足るのである

今の新舊通じて俳優にこの研究的精神が足らぬ、瑣末な苦心談は持つてゐやうが、舞臺稽古などは二日か三日か、イヤ僅に一日丈して早く蓋を開けてゐるといふではないか？高い見料を拂つて苟且にも技藝を見んとして来る御客（俳優を見る爲めの客が多いかも知れぬが）を前に、まだ成つてゐない舞臺稽古の、おさらひに立合はせるといふに至つては實に怪しからん心得違である、佛國の國立座、例のコメデキエ、フランスでは舞臺に行列

させる兵隊にしてからが、少くとも一週間の舞臺稽古を積ませた後でなくてはやらせぬといふ事になつてゐる、そして、その稽古中、全體の調和を破る様な、不熟練な者は片つ端から解僱して了ふといふ、一兵卒の稽古が之である、他の重大の役を演ずるものは少くも一二ヶ月以上の舞臺稽古はやる、米國に於ては、故名優マンسفールドの如きさへ、先づ田舎から興行を始め、半ヶ年もその以上も、熟練を積んだ揚句、漸く紐育の大劇場に現れて来る、これでこそ藝術尊重の意義もあり、理由も存するのであるかゝる次第であるから、新脚本を演ぜんとする新時代の新俳優はこの確固不屈の研究的精神を飽くまで持續して、藝術に對する尊重心を常に忘却してはならぬ、最少限一ヶ月以上の稽古を積むといふ事を憲法第一條として夢寐にも遵奉せなければならぬのである

然らば、新脚本と此の新俳優とあつて新演劇が成立した場合に、果して見物客が蝟集するか否かといふに、これは又問題である、無論新時代は新なる演劇を要求してゐる事は確實である。併し從來の所謂新舊演劇に飽き果てた彼等も、其更に新なる演劇の如何なる形式と色彩とを持つて、彼等の眼前に現れて來るべきものなるかは、彼等自身にも見當が附いてゐない、少數識者や専門家は別として、多數者には新に發見さるべき大陸の山川風土は一向想像が附いてない、想像は多少附いてゐても、新様式、新精神の藝術を自己の趣味性と化合せしむるまでには、多少の努力と時日とを要する、所謂從來の舊新演劇の、専ら眼に訴へてゐる習慣に慣らされて來た者は、更に新なる演劇の必然、耳と頭とに訴へて、外形よりは裏面、動作よりは心理——一種のシンミリとした、親や兄弟や友人の、作り飾りのない打

ち明け話を聞かされて、自分もその相談役の一人となつて話に引入られて行くといふやうな調子の置つた、從來の演劇とは全く行き方の變つた者の前に立つては、同感する前につい欠伸をするといふ、異調を感ぜぬとも限らない、即ち見物の方にも新藝術に對するカルチュアを缺いてゐると、これを感じする力がない事になる、換言すれば、新藝術はやがて、一般批評家や、一般觀賞者の能力を試験するものとも云へるのである

今回、新に土肥春曙君の技藝監督の下に組織されたる「新社會劇」團の東京座に於る第一回興行が、拙い物ながらもイブセン式乃至ショウ式を覗つたつもの自作「牧師の家」を上場する事となつたのは兎に角この新時代に於ける新演劇運動の最初の戦聲である、以前にも、自由劇場其他一二試演的のものはあつたが、興行的といふ點に於て此が嚆矢である、兎角新

氣運に對して臆見を抱ける世間の一部には此を以て唯興行師の野心的策略に出でたるものと輕視してゐる向もあるらしい、興行師が金を儲けるといふ野心のあるのは、名目は何でも官吏が月給を取り代議士が歳費を頂戴せんとするのと均しく、當然な野心(?)である、併し、その野心が、かゝる冒險的新藝術の建設といふ事に依つて若し遂げられたなら、新藝術隆興のために甚だ以て祝すべき吉兆である、若しそれが唯興行的といふ方面で失敗したのなら^{プラスマイナス}、一で、新藝術のためには消極的に悲しむべき事ではあるが、別に積極的に損失する處があつたとは云へまい、一體、小説と違つて、前に云つた如く營業的要素の深く重く附着してゐる爲めに、演劇改良の聲許り徒らに高くて其實行が遷延今日に及んでゐるのは、大きく云へば國家聖代の耻辱で、小さく云つても、日本藝術上の一汚辱である、我等新

藝術のために努力せんとする者に取つては手段の如何は抑も末で、藝術的目的さへ幾分達したら—乃至、達する方面に一步でも近づき得たら、其願は足るのである、志士の口吻で云へばこれ一箇一身の私事にあらず、天下藝術のための公事である、余は自然の關係上、今回の「新社會劇」一團の諸員が、日々の舞臺稽古を見、其眞摯熱誠なる研究的精神に同感し、此の多難なる劇界革新軍の前途に、世間の識者の奨励と鞭撻とを深く希望するものである事を附言し置く

明治四十三年四月二十四日

東京座開演前匆々の際

著 者 誌

晩春の五月頃

時

東京市中央の高臺に新築せられたる牧師藤原覺一の家の一室

藤原 一人物
同 兼子
同 兼子
潮 兼子
吉岡 兼子
植田 兼子
お 兼子

(牧師)
(牧師の第二夫人)
(兼子の連れ子)
(南洋丸船長)
(建築技師工學士)
(牧師第一夫人の父——老牧師)
(下婢)

新社會劇 牧師の家

中村吉藏作

第一幕

新しく、質素に出来てゐる西洋風の應接室、奥、右手に大なる明取の玻璃窓がある、
 窓越しには、少し高手に新築された赤煉瓦の、ゴシック式の高い塔の聳えた會堂が間近
 く見えてゐる、左手には、奥へ出入する廊下の扉がある、その中間に、壁に切込んだ
 つめたてつていストロブ、冷たい鐵製の暖爐が見え、爐棚の上には石膏細工の、十字架上の基督や、ゲートル像、セラ
 ン像など列べ、早咲の山吹花など交へた花瓶も飾られ、置時計がチクタクと時を刻んでゐ

る、その前の方に、版掛椅子一脚、窓の方へ寄つて、ロッキング椅子一脚、その外の壁らにあしらつた普通の革張椅子二三脚に取圍まれた大きな圓卓がある、右側の壁の左手へ喰着けては、書棚を据ゑ、棚の上段には黒い脊皮の、金文字の光る、一見神學書と分るブックが規則正しく詰つてゐて、下段になるに従ひ、いろんな色合の、又いろんな大小の、文學や哲學に關した洋書が稍亂雜に入れてある、書棚と並んで奥の方には一間の磨玻璃の二枚障子が入つてゐる、反對の左側の壁の中段には玄關口へ通ずる扉が見え、その奥の方の壁際へ寄せて、オルガンが一臺置かれてある、壁上には銅版刷のキリストや、聖母マリアを題材とした四五の西洋の名畫に交へて、日本の新派の洋畫家の描いた風景畫や、靜物畫が二三面掲げてある、敷物は疊の上に、半ば、青いダンツ

！が敷いてある、

(左手の入口の扉が開いて、夫人兼子が先に、藤原牧師は後から、兩人共安心疲れが

出たといふ様子で入つて来る、兼子はハイカラな束髪に結つて、四十近いのを、三十四五に見せた若造り、眼の少し険しい處に昔の美しい儂も残つてゐるが、顔立は一體に淋しく、そして疲れ切つてゐる所以か何となく沈鬱の様子に見える、白襟紋附の禮服が充分着こなされてゐない、十有餘年のアメリカ生活の習慣を元の日本風に消化せんとして、まだ半消化しかれてゐるのである、藤原牧師は嘗てミッション、ボードから選ばれて屢々朝鮮、支那へ海外傳道に派遣された宗教界の外交官的經歷もあり、従つて外國宣教師社會との交際も多かつたので、自然服裝杯の上にも、米國風が現れて居り、フロックコートもよく照合つて、殊にチクメイの結び方などは、毎度兼子夫人の手を勞するので、純ハイカラ式である、數年の後、四十五歳に達したら世界漫遊の途に上るといふ事を自己の生涯のプログラムの一に加へてゐる、彼の沈着な眼付は思想家風であり、整つた鼻と口とは敬虔な宗教家風である、彼は日本の舊キリスト教社會

からは「バリサイの徒」として排斥され、所謂社會主義者からは「机上の社會改良論者」として嘲笑され、所謂自然主義の青年輩には「空想家」としてよく引例にされてゐる一種の非基督教的基督教徒の代表者である、此夫婦は今、回新築落成して、今日午後、獻堂式を執行したる彼等の新會堂より歸り來つたのである

入つて來ると、兼子はクツタリと左手の脇掛椅子へ投げるやうに體を凭せかけて、ホツと肩で息を吐く、藤原牧師は右手のロツクキンク椅子へ腰を卸て、軽く揺りながら暫らく休憩して後、卓子へ片腕凭せかけ)

藤原牧師「まあ、これで私も一先づ安心した、新しい教會が建つて私等にも新しい生涯が始まつたのだ、これでこそ何だか生甲斐があるやうな氣がする、今日からは一番死身になつて、神と人類との爲に働かなけりやならんのだ』

兼子『眞實に私もまあホツとしましたよ、ア、して 滞り無く、獻堂式が濟みましたので、何んだか肩の重荷が取れたやうに思ひますわ』

藤原牧師『イヤ、肩の荷はこれから一層重くなるんだよハ、』と快活に笑ひ

『併し、難有い……難有い……これも皆大部分は汝のお庇蔭だ、汝の助力が無かつたら、何うして斯う早く歩んぢやアない』云ひく、起き上つて窓越しに眺め

『まあ、あの塔を見て御覽、ゴシック式で、天を刺す様に高く聳えてゐる形が、崇厳ぢやアないか、會堂の規模は小さいが、堅く引締つた建築で、様式が如何にも善い、ア、會堂の影法師がこの疊の上までさし込んで來てゐる、新しい教會、新しい仕事……ア、新生涯が始まるのだと思ふと、いかにも愉快でならんよ』

(兼子の傍に歩み寄つて來てゐる)

兼子『貴方がそんなに喜んで下さると、私もこれまでの心配や苦勞が一時』

に晴れましたやうで、嬉しくてなりませんわ、これも神様の御恵ですね』

藤原牧師『神様の御恵と、そして汝の内助の力だ、イヤ、神と人類との協力

だ……併し私が汝と邂逅せなかつたら、斯う都合よくは運ばなんだから、

不思議な大能力が矢張此新しい會堂を建たんだな』云つて、又、窓の方へ動い

て行きつゝ、『あの高い塔……まア、見て御覽、いかにも人間の靈魂の憧憬

心が神に向つて立昇つて行てるやうでサブライムだ、ア、多年の夢が

現實になつたかと思ふと、何だか一種異様の感がするよ』

(兼子も後から蹤いて行つて)

兼子『高い塔——眞實に威勢が善ですが、併し、あの先の尖つたのを見ま

すと、私は何だか胸を突かれるやうな氣がしますわ』と伏目になる

藤原牧師『フム……あの尖つた尖端が……』

兼子『信一(先妻の子)の事がつい思ひ出されてなりませんわ』

藤原牧師『信一……(考へつゝ)……今更そんな事を云つたつて仕方が無

い、あれはこの新會堂の犠牲になつたんだ……云はゞまア人柱見たやう

なもんだらう』云つて沈鬱の色を浮べてロッキンク椅子の上へ腰を卸す、

(兼子も椅子に坐し)

兼子『あの高い塔さへ無かつたら信一が墜落ちて死ぬやうな事も無かつたの

でせうにね……だから私は高い塔なんか止しなさいつて、始めに、貴

方に云つたのですけれどもね』

藤原牧師『あの時は汝は主に經費が餘計要るからと云つて止めたんだつた、

昨日、汝が横濱の銀行から歸つて、建築費支拂をしてくれた時も、吉岡

君の前で、塔の苦情が、ちよつと出たやうだつた、私は黙つてはゐたが苦
しかつたよ』と悄然する、

兼子、暫く黙して後

兼子『イヤ、私も信一の事が終始氣に懸つて居ますので、つい云はんでも善
い事を口へ出すやうなるのでせう、昨日の事は氣持を悪くならさないで
ね』

藤原牧師は氣を變へたやうに起き上つて

藤原牧師『多年の夢が實現したのだ——これ程の新しい事業だもの、何か高
い犠牲を拂はなければならん筈のものだろう……信一の靈魂が、この新
しい會堂の基礎となつてゐるのだから』と動き廻る

思案顔で窓外を見つめ

兼子『何だか死んだ信一の紀念の會堂の様にも思はれますわ』

藤原牧師、焦々しく動き廻り、又しても窓越しに見上げて

藤原牧師『死んだ者の紀念ぢやない、生きてる者の——人類の爲の新しい會
堂だ、もう過去つた事なんか考へないで、新しい前途の事を思はなけれ
やならん』云ひく、憂鬱の色で、此度は眩掛椅子に凭りかゝる

兼子『過去つた事なんか、眞實に考へないやうにしなければなりませんね』
と、ロツクキンケ椅子へ凭つて、軽く揺りながら、獨り思案に沈んでゐたが『肉に死して
靈に生きる……蘇生するつて事がなかつたら、人間は永へに罪惡で滅ぶべ
きものでせうね』

藤原牧師、半分聞いたやうな風で

藤原牧師『勿論、然うさ』と早口に云つて『併し、此世の罪人は蘇生する事は出来
(9)

ても、ラザロの様に一旦墓の下に入つた者の呼吸を吹返すといふのは古
譚になつて了つた、もう肉體的に死んだ者は再び逢ふ事は出来ないんだ』
と歎息する、

兼子は氣遣はしきうに、牧師の顔を見て

兼子『神様は一旦悔改めたら如何なる罪惡でも御許しなさるのでせうねえ
…親の罰を子に酬ゆるなんて、そんな事はなさりはしないんでせうねえ』

藤原牧師、顔を上げて

藤原牧師『親の罰？ウム、然う云へば、私がこの新しい會堂を建てたいとい
ふ一種の野心…それも自分では深い敬虔の念と、人類に對する熱い愛情
からだと思つてるんだが、それを若しや神様が罰しなすつたのか、否、然
ういふ譯はない』と起上つて又室内を焦々しく歩き廻り『もう、神を試みる

やうな事を云つてはならん、決して口に出してくるな、あの幼い年齢
にも似合す、信仰心の深かつた信一だもの、神様の會堂の、高い塔の上
から落ちて死んだのなら、決して残念とは思つてないだらう、あの時の
死顔にも存外、苦痛の色は無かつた、もう云ふまい、こんな事で愚痴を
こぼすやうでは、牧師なんか勤まらんよ、耻づべき事だ』

兼子『否、貴方の事を云つてるのではありません。私は婦人で、罪が深い
んですもの、新しい會堂を建ててる事で貴方をお助けしましたのも、悔改
めて新しい生涯に入る爲めなんです、それを神様が若しや御聽納なさら
んのではないかと知らると、疑ぐる氣が出て來るもんですからね』

藤原牧師『そんな事なら何んにも心にかけるには及ばないよ、誰だつて多少
誤ちのない人間は居ない、殊に婦人は罪障が深いなんて云ふのは、あり

や東洋的の佛教の思想なんだ、婦人は皆性來の迷信家だとは云へ米國邊りで永年生活して來た汝にも似合はん考へを持つてるもんだ、何んにも汝と、信一が死んだといふ事と關係はありやしない、イヤ、眞實にもうお互に愚痴つばい事は止して、これから前の事業の相談をせう』

(兼子も氣を變へて)

兼子『然うですね、もうこんな事は止しませう、事業と云へば、婦人救濟會を第一にうまく成立せて行かねばなりませんね』

藤原牧師『然うさ、汝の希望でもあるし、私も疾から考へてた事なので、第一着に社會的事業として婦人救濟會の經營に全力を盡すとせう、世人の所謂醜業婦を救濟して、正業を興へるといふのは人道の上からも實に大切な仕事だからな』

兼子『然うですとも、貴方がよく仰やるやうに、醜業婦だなんて、男子が勝手な名を着けて置いて、その癖、自分等が醜業を營ませるやうに仕向けてるんですものね、こんな不條理な事はありません、私はあの婦人等に一番同情を表しますわ』と、聲色共に激する、

藤原牧師『一概に醜業婦といふのは矢張習慣的の世間が悪い、彼等は男子の生理慾を満足させてる一種の犠牲的婦人なんだ、私は何時もこの事を思ふと、所謂善といひ惡といふ世間の道德的標準が笑ひ度なつて來る、併し、然ういふ自分が性來の道德家だから、考へがこんがらかつて、頭の中に蜘蛛の網が懸つたやうな氣がしてならん』

兼子はしげくと夫を見ながら

兼子『私も折々妙な事だと思ふ時があります、一人の男の生理慾を満足さ

せて生きてゐるのも、大勢の人の生理慾の犠牲になつて生きてゐるのも、矢張生活の方便といふ點は一つですわ、一方が夫人で、一方が醜業婦といふのも何んだか可笑なもんですね』

藤原牧師『唯、一人の男子を守つてゐる方が生活が安全で、男子の方でも安心する、要するに婦人の貞操といふものも大部分は生活問題に歸着するものだらう、兎に角、婦人救濟會は、この生活問題を解決してやるのが、第一着の事業だ』

兼子『然うですとも、世間から醜業婦と云はれる丈でも辛いに定つてますからね、何しろ私は姉妹の心持で皆と一緒に居りませう、而して自分でもミシン器械や縫箔や、編物やいろんな事が習つて見度いんですよ』

藤原牧師『ウム、汝が姉となり、母となつて導いてやらなけりや、この事業

の成効は期し難い、それが汝の新しい事業の一つだ』

兼子『第一に蘇生つた人は第二、第三と次々、他の人を蘇生らせてやらなけりやならん義務がありますわ』

(外から戸を叩く)

夫婦口を揃へて『お入んなさい!』

植木老牧師、白髯顔を蔽ひ、鼻の上と眉の間に深い皺が寄つて、顔全體に一種のオルソドックス的の威嚴を與へてゐる、フロックコートの背は少し曲つて折々ゴホン、ゴホンと咳が出るのは喘息氣もあるらしく、肉體的に老衰の氣勢が見えるが、動作は、活潑で、精神的に青年の元氣を失つてゐないのをプライドにしてゐる、殊に昔の殉教者の意氣は、青年的老年の、自分等のみの獨得であるといふ自覺を持つてゐる、後からは同じくフロックコートの吉岡工學士、彼は新會堂の建築技師で、又會の執事であ

る、三十歳前後の好紳士、世俗的にも、非世俗的にも、着々、自己の立脚地を建築して行きつゝある近代的乃至當世的基督教徒のタイプである。

(兩人入来る)

植田老教師「式も目出度濟んで、まづ一安心だね、これといふも神様の深い

御恵ちや」

(藤原教師は、座を立ち席を譲つて)

藤原教師「何うもいろく御心配かけまして難有うございます、あまりお話
が、ばづんでたやうですから、一足お先へ失禮しました」

(兼子がロッキンク椅子を立かゝるのを、吉岡工學士は制して、傍の椅子に倚り凭りながら)

吉岡工學士「例の植田先生の聖書中心論が出ましたので、居残つた青年の委

員連が盛んに議論をしかけて、何うも果しがありませぬので、私がお預りして、漸つと切上げて來ましたのです、植田先生の相不變御元氣の盛んなものには皆も驚いてゐます」

(植田は白い髭を撫つて嘲けるやうに)

植田老教師「若い者等が、ヤレ科學的知識だの、ヤレ高等批評だのと、淺果敢な人間の小智慧から割り出した的にもならん者を的にして、神の御言を書いた聖書の事を彼は云はうなんて、實に怪しからん心得違ちや、ア、いふ事を口にする連中は、基督信者といふのは名許りで、其實宗教の假面を被つた社會主義者なんぢや……此といふも先生が先生ぢやからな」

(藤原教師椅子に掛つたまゝ向き直つて、微笑をもらし)

藤原教師「義父さんとはもう議論はせん事にしてあつたのですけね、兎に角、

神を信ずる——人間の良心の中に宇宙萬有の精髓たる神様の像を認め、かう云ふ點で一致さへして居れば、それ以上は各自の信仰に任せて了つた方が善いですが、實際議論して見た處が際限の無い事ですから」

植田老教師「覺一君は何時にも然うした定文句を云ふんだが、聖書の中の事を信ぜない、例へば處女マリヤが聖靈に感じて基督を孕んだといふ事が、今日の科學的知識に合はないから信ずるに足らないの、奇蹟を行つたいふ事は、今日の實驗と衝突するから嘘であるの、十字架に懸つた基督が三日の後蘇生り給うたといふのは、理論上、あり得べからざる事だのとそんな亂暴な小理窟を云つて、聖書の中の記事を一々片ツ端から取消して行つた日には後に何が残る、基督を唯一個の偉人英雄にして了つて、それで基督教の權威が何處にある？、基督の救濟といふ事に何の意味が

あるか？かうした連中は基督教的非基督教徒ぢや、そんな中途半端な僞信者よりは、寧ろ眞正な不信者の方がまだしも救濟はれる希望がある』と卓を叩いて古の豫言者の慷慨の口調が元まつて来る、云ひ了つては暖き込む

兼子「お苦しうですね……お丸やお茶を早く」

(呼び立てられて、下婢お丸は、夫人の好みの、紅茶を載せた盆を運んで来て、卓上に置いて、會釋して下る、兼子は、植田老教師の脊を叩き、暖の止むのを見て、茶碗を口邊へ持つて行き、勞はつてやる、老教師は手眞似で、もう快復した事を示し、兼子を席に復らす)

吉岡工學士、老教師の顔をのぞき見ながら

吉岡工學士「先生はあまり御熱心なので、何時もつい御體に障つて來ます、それでも、先生が教會で、委員連中に向つて、今のお言葉で叱り付けな

すつた時は、一時、皆は度膽を抜かれてシンとして了つたのです、議論は違つても、植田先生の宗教的感情に、一種の權威のあるのには、皆も深く動かされてたやうです」

藤原牧師「義父さんの信仰には、勿論、一箇の生命がある、その點は、誰も尊敬を拂はんけりやならんのです」

(植田老牧師、此度は平靜な調子で)

植田老牧師「覺一君、君等の云つてゐる事は、成程理窟には合つてゐるかも知れんが、權威と生命とが無い、今日の汝の説教は結構だつたには相違ないが、社會的救濟だの、道德的進歩だのと、そんな事許し云つて、神様がその愛する獨子の基督を此世に遣はして、人間を罪惡から救ひ給うた、その深い御惠の事は些とも話さない、何んだか話すのさへ恥づるといふ

風に見えた、それで私が立つて、繰返してその事を述べたのぢや、私は老人で、科學的知識の方は善く研究もして居らんが、その代り、神様と基督とに就ては、今の若い人等より、ずつと深い實驗もあり、知識もあると信じて疑はない、それは敢て自ら誇つてゐる」得意げに白い髭を撫す

藤原牧師「勿論、義父さんは、義父さん自身の基督教をお誇りなさるが善いです、私は私自身の基督教を誇ります」

植田老牧師、顔を曇めて

植田老牧師「基督教は基督御自身の基督教ぢや、私のも無い、又汝のでも無い、私は今回の新しい會堂が、出来上ると同時に、汝が従前、邪路に踏み迷うてゐるのを神様の御手で導き給うて、眞に基督の福音を傳へる人となるやうに、それ許り、日夜祈つてたんだよ」

藤原牧師『新しき酒は古き革袋に盛るべからずではありませんか、新會堂が滞り無く出来上つたのにも、深い意味があるんでせう——云はゞ一種の攝理でせう』

植田老牧師『サア、その深い意味——神様の御攝理をよく考へて見たが善からう、何故に神がこの會堂建築に就て大なる犠牲を要求し給うたか、それを疎忽に思つてはならんぞ』と聲激し、又コホコホと嘆く

(吉岡工學士と兼子とは不思議を見合す)

藤原牧師『神が大なる犠牲を要求したと仰やるんですか……(沈思して後)……信一の事ですか?』

(植田老牧師言葉も改まつて)

植田老牧師『信一があゝの塔から墜ちて死んだのを、貴方は何う思つてる?』

(藤原牧師額に手を當てて)

藤原牧師『それを一言云はれる丈でも、私は悲みに堪へません』とぐたりとなつて、卓へ腕を突いて、頭を垂れてゐる、

(植田老牧師、卓の端を叩いて)

植田老牧師『天からの啓示です、……あの七八才の齡にも似合はず、性來信仰心が深くて、聖書を始めから終りまで、殆んど暗記して居ない頁は無い、他人に對する同情心にも富んだ、珍らしい神童と云はれてた子が、職人等の居らぬ隙に半落成の塔へ駆上つて行くなんて事のあらう道理が無い、それでなくつてさへ元來あの病身者の足弱なんだから足架にかけた荒階子を上つて、高い塔の頂上から神様の眞似をして下界を覗いて見るやうな大膽ないたづらをする筈が無い、……全く神祕ぢや、全く奇蹟

ぢや、(咳しつ) 私は何うしても、この攝理が解らなかつたが、偶と思ひ附いた事があつた』

藤原牧師、顔を上げて

藤原牧師『思ひ附いたと仰るのは?』

植田老牧師『イヤ、私はあの可愛い孫に、再び逢はれるといふ確信と希望どが、胸の中にあつくと湧いて來たのぢや(軽く咳きつ)決して失望する事は無い、信一には天國で必ず逢へる、此の世の仕事をして、神様の御膝元に引取られて行つたら、あの可愛い信一に必ず逢へると、然う思ふと一種の嬉しいやうな、悲しいやうな涙がハラ／＼こぼれて止度になかつたんだ』と老人的の感激の涙を拭いてゐる

(藤原牧師は、唯、深い溜息を吐く、兼子も、吉岡工學士も堅くなつてゐる)

植田老牧師『何うぢや、覺一、汝には此の天國が無い、地上の天國、地上の天國とばかり云つて、未來の天國の事が分らないといふのは汝の説ぢやらう、汝はもう信一に、未來永劫逢ふ事は出來ないと思つてゐるか?』

藤原牧師『私には、未來の天國はありまん』

(植田老牧師、聲を喘ませて)

植田老牧師『さア其處ぢや、神様が此大なる犠牲——神の子のやうな信一を此度の新會堂建築に就て活ける犠牲として要求し給うたのは、汝が見失つた未來の天國を、信一の靈魂の手を通して再び汝の胸の上に建直さうといふ、深い思召に相違無い、然う思つて、私には諦めが着いた、イヤ新しい希望さへ生じて來た、(咳しつ)あの、亡くなつた一人娘の、唯一粒種の孫を慈愛に富み給ふ天父が召し出されたのは、然ういふ深い意義

があるんぢや、子の生命で父の生命を救はうといふのぢやと、斯う私は
解釋して、深く感謝してゐる、汝は信一を犬死に了らせちやならんぞ』

藤原牧師『信一に再び逢へるなら、私は逢ひ度いです、併し私にはもう白日
の夢は見られなくなりました』と沈思する

植田老牧師『夢ぢやア無い、私には現在よりもこの未來の事實の方が確ちや、
それを疑ふ餘地は無いんぢや(と又軽く咳く)……神様のされる事に一つと
して意義の無いものはない、假令汝が何んと云つても私は信一の靈と力
を協せて、汝を眞の信仰に立返らせると堅く神様に誓つてゐる』

藤原牧師『義父さんのやうに信じて安心される人は幸福です』

(植田老牧師、軽く咳きつゝ)

植田老牧師『無論自分でも幸福だと思つてゐる、汝の様に始終信仰がぐらつ

いてゐて、それで社會を救はうの、新會堂を建てやうのといふのは嘘ぢ
や』

藤原牧師『イヤ、無論、私には私自身の信仰があります、併し舊い信仰とは
違ひます、義父さんの様に、自分の信仰でなければ信仰でないやうに思
つてはいけません、新しい信仰には懷疑的の分子が伴つてゐるので
す、信じられる事は信ずる、信ぜられぬ事は信ぜぬ、従つて動搖もある
が、進歩もする、これが新しい人の信仰でせう』

(植田牧師は咳き込んで)

植田老牧師『信ずる事は信ずる、信ぜぬ事は信ぜぬ、そりやア基督教ぢやア
無いよ、惡魔もそんな事は云つてゐる(咳きつゝ)信仰とは望む處を疑は
ず、未だ見ざる處も眞とするもの也ぢや、これ以外に信仰はない、馬鹿

馬鹿しい、眞實に今回の獻堂式を機會として、信一が全き肉體を神に捧げたやうに、汝は全き靈魂を天父に捧げてくれ、私は切に祈るよ」と手を額に當て、黙禱の態度

(吉岡工學士、深い歎息して)

吉岡工學士「信一さんの事は眞實に何うもお氣の毒千萬でした、私が建築の監督をして居ながら、全く注意が行届かなかつたのでして、私にも責任がある様な氣がします」

兼子「イヤ、然う仰しやれば私こそ彼子の母親ですもの、始終目を離してはならないんですが、つい何うかした際に、彼様事になりましてねえ」

吉岡工學士「繰返しても詮のない事ですが、職人が恰度午飯を食てた時で、塔の方で讚美歌の聲か何か聞えたといふ者もありますが、上つてらつし

やるのには一人も氣が附かなかつたといふんでせう」

兼子「あの子の墜落ちたのを最初に見たのは鞠子です、鞠子も少し前に、氣が附いたら、あんな事にはならなかつたのでせうにねえ」

吉岡工學士「何んでも最初は鞠子さんと一緒に、工場をのぞき廻つていらつしたといふ事でしたかね」

兼子「あの子は鞠子とは仲善でよく一緒に遊び歩いてゐたのですが、塔に上る時に限つて、鞠子が氣を附てゐなかつたといふのは、餘程運の悪いんですねえ」

吉岡工學士「眞實に何うも、災難とはいへ、何と申してよいか云ひやうのない事でした……併しまア植田先生の仰るやうに、此も神の攝理には相違ないです」

植田老牧師は黙り込んで、沈み切つてゐる、藤原牧師は嘆息して

藤原牧師『もう云ひますまい、もうあの事は眞實に云は無い事にしませう、それよりか兼子、夕御飯の用意はしてあるか？、七時半から又夜の説教だよ』

兼子『下女に云附けてはありますが、肉が來たら私、アメリカ仕込の洋食を少し調理へて見やうと思ひますの……オ、もう徐々支度にかゝりませう、一寸失禮しますよ』と立宛る

(植田老牧師は呼留めて)

植田老牧師『私は歸る、これで失禮することにせう』と椅子から起上る

兼子『アラ、また何うしてそんな事を……又、夜の御説教をして下さらんければなりませんのに』

藤原牧師も席を立つて

藤原牧師『義父さん、何うしてそんな事を仰しやるんです』

植田老牧師は、藤原牧師の顔を見て

植田老牧師『イヤ、少し考へて見る事がある、私が折角説教したからと云つて、汝が私の云ふ事と全で反對の事を云つては、一向神様を喜ばす事は出来ん、今夜は不快でもあるしするから、私は説教を斷るよ、之から歸る』と二三歩、歩みかける

(藤原牧師は、前手を遮つて)

藤原牧師『義父さん、それはいけません、ア、してプログラムにも出てるのですから、今更變更しては會衆にも氣の毒です』

兼子『眞實に、何にもありませんが、夕御飯の支度もさせてあるのですか

ら』

吉岡工學士「是非とも願ひせんければ、委員たる僕等が第一、申譯の無い事になりませうから」と一種意味ありげな眼配する

藤原牧師「義父さん、あゝして定めて置いて、俄にそんな事を仰しやつては、皆が困ります」

(植田老牧師、暫く考へてゐたが)

植田老牧師「然うですか——」と俄に悔むやうに「イヤこれは私が我儘でした、何事も神様の御用を勤めるのですから……(ゴホンと咳いて)……自分の我意を出しては濟みません、私が悪かつた」と席に復し手を額に當て、黙然する態度

藤原牧師「ア、居て下さいませうか、それで安心しました」

兼子「それは是非然うなすつて下さらんとはいけません、では私は一寸失禮しますよ、吉岡さんも何卒御ゆつくり」

吉岡工學士「難有うございますが、私は一寸用事を済まして、又、七時頃から参ります」

兼子「それはいけません、今日は日曜日ですもの、別に御用はございませんでせう?」

吉岡工學士、一寸頭を押へて

吉岡工學士「一寸その約束事がありました……直ぐに又参りますから」

兼子「然うですか、御遠慮なんかなすつちやいけませんよ、私のアメリカ仕込のビーフステキを食べて下さると善いんですが」

吉岡工學士「眞實に難有うございますが、實は六時に他から請負工事の金を

持参する筈になつてますので……』

兼子『金儲けの御話でございませうか、それは結構です事ねえ、併しあんな事を仰しやつて、お逃げなさるんでは忌でございませうよ』

藤原牧師『我々には神も財寶も共に大切な者だ、然ういふ御用事ならお留め申さないがよからう』

植田老牧師『イヤ、吉岡さんの事だから、神と財に兼ね使ふるといふやうな卑しい根性は持つてゐなさらん、吉岡さんの金儲けは皆神様の御用を勤める爲なんぢや、御遠慮なくお歸り下さい、その方が善からう』と吉岡工學士の顔を見る

(吉岡工學士はホツと吐息し、懐中時計を取り出して見て會釋しながら)

吉岡工學士『ぢやア藤原先生、失禮します』

藤原牧師『サア、何卒御遠慮無く』

吉岡工學士『植田先生、一寸失禮します(何んだか又眼配せして)夜は直と参りますから……奥さん、左様なら』挨拶匆々にして出て行く、藤原牧師が送りに立つと

兼子『イヤ、私がお送りします』

藤原牧師『ぢやア、これで失敬』

と吉岡工學士の後に蹤いて、兼子、屏の口に消える

(藤原牧師、ロッキンク椅子にぐつたりと身を落す、植田老牧師、物屋らぬやうな顔色で四邊を見廻し、椅子の縁を叩いて、軽く咳きながら)

植田老牧師『ウム……今日は鞠子さんの影が見えないやうぢやが、一體何うしたんだね』

藤原牧師『サア、何うしましたか、是非、出席するやうに云つて置いたので

すが、例の通り、何處かへ遊びに出かけたんでせう』

植田老牧師、顔を曇めて

植田牧師『この大切な獻堂式に牧師の娘で居ながら、余他外へ遊びに行くなんて怪しからん（嘆きつ）同じ日曜日でも普通のとは違つてるんぢやアないか、汝、よく云つて聞かせなけりやいけな』

藤原牧師『云つて聞かせないでもないですが、彼女はあの通りの變物ですから、何んとも仕様がなないんです……流行語の自由だの、解放だのといふ事を箴言にして生活してゐるんですからね、併しまアあれも善いですが、束縛する譯には行きませんよ』

(植田老牧師、酷く白髭を引張りつ)

植田老牧師『そんな事を云つても、自分で飯を食つて行ける身分でもなか

らうし、一體女の癖に生意氣千萬だよ、そんな太平樂を云つて今日を過ごされるのも、畢竟神様のパンを頂戴してゐる庇蔭ぢやアないか？』と嘆く藤原牧師『彼女は無論神者ですから、然ういふ説教をしても耳なんかに入れません、まア善いでせう、人間は自己自身の爲めに生存してゐる、人類の爲にも、又神の爲にも生存してゐるのでは無いといふ過激な考へが根本的に間違つてゐるといふ確かな證據も立たないんですから、まア然ういふ人は然ういふ考へ通にさせて置くんです』

植田老牧師、激しく首を揮つて

植田老牧師『そりやアいかん、汝そんな事を云つては、全で無主義無方針ぢや、無神論者なら悔改めさせて、神を信するやうにするのが汝の天職を盡すといふもんぢやアないか、それも他人なら兎に角（嘆いて）今日……』

牧師の家に連れ子となつて來てる以上(咳きつ)……汝の實の娘も同様ぢや、その娘が、そんな不埒な事を云つてるのを、善いわけで、平氣で打捨つて置くといふのは、汝は實に、意氣地無しだとしか思へんぞ」と咳く

藤原牧師「私は何うも、誰にも信仰を強ひ得るものではなからうと思ひます、選ばれたる人と、選ばれざる人と、白い羊と黒い山羊と、世間は始めから然らなつてるやうに考へられます」

植田老牧師頷いて

植田老牧師「そりやア 聖書にも云つてある通り、神は世の智者と學者を辱しめ、赤兒の心に榮光を顯はし給ふに相違ない(咳いて)現に信一の様な幼兒が、此家でも一番尊い信仰を持つてゐた、併し人間は誰でも神の像に似せて造られたのぢや、パウロが産の劬勞をなすと云うた、それ程の熱

心があれば、女子の一人や二人、救ひの道に入れられぬといふ法は無い(咳きつ)畢竟は汝がまだ、眞に救ひの道に入つて居らんから、他を感化する事が出来ないぢや」

藤原牧師「併し今の若い女は、昔の婆さんなんかとは違ひますから」

植田老牧師「そりやア、今時の若い者等は一番先に理窟を捏ねる、男の子でも女の子でも皆然らぢや、(咳いて)殊に、鞠子さんと來たら、アメリカ邊りで育つて、向の女學校で長年教育を受けて來たんだから人一倍生意氣ぢや、それをあのまゝ打捨つて置いたら、猶更、何うも手が附かん事になる、今の中に(咳きつ)……何うかせんといけないよ」

藤原牧師「何うかすると云つても、七八歳の小娘では無し、別に仕方が無いぢやアありませんか?」

植田老牧師「イヤ、仕方のない事はない、それに就いて、汝にチと相談があるんぢや」と顔を見る

(40)

藤原牧師「私に……鞠子の事に就いてはどうか？」

植田老牧師「然うぢや、あの子の事に就いて、汝に話したい事があるんぢや」

藤原牧師眼色を動かして

藤原牧師「何ういふ事ですか？」

植田老牧師「他でも無いが、あれを嫁にやつては何うぢやらう」

藤原牧師「嫁にですか？……」と不安の色で二の句を繼がないでゐる

植田老牧師「もうあれで十九といふのぢやから（咳きつゝ）年紀もよし、向で望んでゐる人は汝もよく知つてゐる、此會堂の柱ともいふべき堅い人物ぢやから、此上も無い良縁ぢやと私は思つてゐるよ」

藤原牧師「ヘエ……此の會堂の人……誰ですか？」

植田老牧師「心當りが附かんか……汝の手足になつて働いてる人ぢや」と笑顔になる

藤原牧師「ヘエ……!?」と考へ込んでゐる

植田老牧師「嫁にやるといふ事は、異存無いぢやらう」

藤原牧師「別に異存といふ事はありませんが、従前も度々縁談があつたのを私が一存で断つて來ましたのですし……（植田老牧師の顔を見ながら）信一が

亡くなつてからは、火の消えたやうに急に寂しくもなりましたし、それに第一、肝腎の本人が結婚なんかいふ事に頓着しないんですからね」

植田老牧師「だつて一生、此家に飼ひ殺しにする人でもあるまいし、若い中は、娘は兎角人前を恥づかしがつて、獨身で過ごすの、獨でやるだの

(41)

と、よくいふもんだが、そんな事が出来る譯のものでは無い、(咳きて)年
紀といひ、先方の望み手といひ、今が嫁入らすに恰度善い時分ぢやと思
ふよ……それ許ぢやアない、あの人の様な處へやつて置けば、屹度鞠子
さんも善い信者になる、悔改めて、洗禮を受けて立派な信者になると思
ふから、私も口を利く譯ぢや(咳きつ)幸ひ今日は目出度い日ぢやから、
序に斯ういふ目出度い話を持ち出すんぢや』

藤原牧師沈思の顔色で

藤原牧師『一體誰でせう、その希望者といふのは?』

植田老牧師『分らんかい……吉岡さんよ』と微笑する

藤原牧師『へ……吉岡さんが……鞠子を望んでるといふんですか?!』

植田老牧師『實は、吉岡さんはあゝいふ善い信者だし、鞠子は不信者で、無

神論者(咳きつ)苟にもそんな不埒な事を口にする女子ぢやから、私はあ
止しなさいつて、始めは反對したんぢやが、吉岡さんの云ふ處を段々聽
て見ると、自分は必ず、あの子を信者にする(咳いて)約婚さへして置け
ば、交際する中に屹度立派な信者にして見せると、大熱心な様子ぢやか
ら、私も動かされて賛成し、今も云ふ通り、幸ひ今日は善い機會でもあ
るし、汝に話さうといふ事にした譯だよ』

藤原牧師手を額に押當て、起上り

藤原牧師『吉岡さんが、何うして鞠子なんか……』と、足重たげに動き廻る

(植田老牧師も起上つて、一緒に歩き廻り)

植田老牧師『何んでも本人は眞面目に鞠子を愛してゐる様子ぢや……あの
なら善いぢやらう……屹度鞠子を感化するぢやらう(咳きつ)此度の新會

堂建築に就いても、あの人が工事萬端引受けて、餘程善く働いてくれたといふんぢないか？」

(44)

藤原牧師「然うです、それは吉岡さんの骨折は一通りではなかつたです」

植田老牧師「寄附も現金で一千圓とかいふのぢやアなかつたか？」

藤原牧師「然うです……兼子の一萬五千圓が筆頭で、その次は吉岡さんでし
た」

植田老牧師「總體で建築費が二萬三千圓といふのも、實はそれ許りで上るのぢやアない(咳つ)他の請負師にやらせたら何うしても三萬五千圓や四萬圓はかゝるのぢやが、吉岡さんが大奮發で、汝が注文通の高い塔まで附けて、あれ位の金高で上げてくれたといふぢやらう(咳いて)何しろ神様の爲には何事も犠牲にする、今時、珍らしい信仰の堅い青年ぢやアないか」

藤原牧師、俯目で、猶も歩き〜

藤原牧師「吉岡さんは無論感心な人です、自分で然ういふ事を吹聴しなかつたら猶更善い人でせうが……併し……併し鞠子が承諾しますか、何うか？……」

(植田老牧師は自信の色で)

植田老牧師「それは私からもよく本人へ説いて見る」

藤原牧師「第一に、基督信者にするといふのからが不可能ですよ」と頭を振る

植田老牧師「何アに……汝の考へてる様なものではない(咳きつ)女子といふものは、男子の云ふ事なら何んでも聴く様になるもんだよ、殊に相手が若い者同士ぢやからな」とニヤリと笑ふ

(兼子、エプロン掛けたまゝ出て來り)

(45)

兼子「まだ時間はございますか知ら？」云ひく置時計を見て、又入りかける

植田老教師「兼子さん、一寸……」と呼留る

兼子「何んでございますの？」

植田老教師「貴方はあの、鞠子さんを吉岡君の妻に、くれてやる氣はありますか？向ふでは大さう希望してるんぢやが」

(兼子、眼を睜つて)

兼子「鞠子を……まア突然なお話ですことね？」

植田老教師「藤原に云つても、一向煮え切らん(咳きつ)貴方が産んだ母親ぢやから母親さへ承知すりや、彼にも別に文句は無いでせう、これは鞠子さんの爲めにもなりませんぞ」

兼子「それは結構なお話ですけども、あんな我儘者が、とても、吉岡さ

んの様な堅いお方の處へ行つて見ても、辛棒は出来やしませんよ」

植田老教師「貴方までそんな事を云つて……(咳いて)貴方等は一體鞠子さんを何うする氣です、一生此家に置くんですか？」

兼子「然うでもありませんが、彼娘は仲々親のいふ事なんか聞きやしません、自分の思ふ通りにするより外に仕方がありません、自分では詩でも作つて、一生経過す心算でせうからね、もう私なんかの手にかゝりやしませんよ」

植田老教師「そんな若い者のたわいもない夢は醒してやらなけりやいかん(咳きつ)……兎に角本人が承知すれば善いんでせうな？」

兼子「それはもう本人次第ですとも……吉岡さんなら私の方では願つても嫁りたいんですが、今申します通り、親のいふ事なんか耳にもかかけやし

ないんですから』

植田老牧師『ぢやア、私から鞠子さんに話して見ませう、今日は何處へ行く
たんですか？』

兼子『何處へですか……オ、何んでも今朝程、今日は信一の命日だから、
會堂なんかへ行くより、墓へ行つて遊んで來るとか云つてましたつけ……
でも、もう歸つて來るでせうよ』

植田老牧師『然うですか、信一の墓へ（咳きつ）……よくちよいと墓參して
くれるやうですね……イヤ、あれで矢張、信切な心がある、人間は神の
子ぢや……』と獨感心する體

お丸『夫人さま……』と呼び立つる

兼子『料理をしかけたまへますから、一寸と失禮しますよ』と入る

あと、藤原牧師はロッキンガ椅子へ倚懸つて沈思の體、植田老牧師は、書物棚を覗き込
んで、一冊宛引張り出して見、顔をしかめて

植田老牧師『ウキリヤム、ゼームス……ステキルナ……オ、ニイチエ？』

……』と毒蟲でも搦まへたやうに、抛り出す

(處へ鞠子入來る)

鞠子は、西洋流に云へば十八年と何ヶ月の、今が處女盛りである、マーガレットに
結つた頭髮は伊太利流の軟らかさと、日本風の艶とを持つた純黒色である、雜種兒的
の美は顔の輪廓の隈々より、皮膚の色に迄も溢れ、夢見るやうなロマンチックな眼眸の
中に女詩人的の天才の閃きがある、草色模様の改良服がよく似合ひ、薄桃色のス
トッキングスも一種の調和美をなしてゐる、日本語は在米時代から學んで來たので、殊に、
この一年間、日本での練習は、彼女の詩人的天才以外、語學的の天才の一端をも示す

ものである、手には葦の花束を持つてゐる、男性の如く活潑に駆け入つて、

鞠子『お父さん、只今……』と飛び附くやうにする

(藤原牧師、起つて迎へ、微笑しつゝ)

藤原牧師『オオ、お歸り!』

(鞠子は、白い額を突き出して待つてゐる、藤原牧師は腕をその首に懸けながら躊躇してゐる)

鞠子『お父さん……何うしたの!、常時の様に接吻して頂戴』

(藤原牧師、額に接吻する、植田老牧師は、それを見ると、眉を擡めて、顔を反けて了ふ)

ふ)

藤原牧師『植田の祖父様が来て入らつしやるんだよ』

鞠子『アラ……今日は!……』

(植田老牧師、振り向いて見て)

植田老牧師『何うですか?今日は何處へ行つたんです?(咳いて)會堂に影が見えなかつたやうぢやが……』

鞠子『私、あんな陰氣臭い會堂なんか嫌ひだもの、信一さんの命日には當るし、青山に行つて一日中遊んで来てよ』

植田老牧師、眉を擡めて

植田老牧師、眉を擡めて

植田老牧師『信一の墓参りをして来てくれたといふのは御深切で難有いが、會堂なんか嫌ひとはいけない事です、殊に今日は、あの信仰の厚かつた信一が、一身を神様に獻げて出来上つた會堂の、大切な獻堂式です、新しい會堂の中に、信一の靈が來てるんです(咳いて)墓なんか朽ち果る肉體を埋めた場處ぢや、獻堂式に列した方が、信一も遙に喜ぶんですぞ』

鞠子、半笑ひかけ

鞠子「信一さんの靈が、あんな會堂なんかへ来て堪るもんぢやアなくつてよ、信一さんも恵に富み給ふ神様だなんて、いゝ加減な嘘を吐いて、よく人を欺したもんだと、今頃は嘸悔んでゐるでせう、可愛さうに」惘然として、筆を鼻の下で嗅いでゐる

(植田老牧師、喫驚した體で)

植田老牧師「鞠子さん、コレ、大概になさい……神を瀆すやうな事をいふのは罪惡ですぞッ」

鞠子「人の生命を奪つたりする神様こそ、眞實に存るのなら、一番先頭に、罪惡を犯してるのよ、私は御宗旨違ひだから獻堂式なんかへ出度ないんです」

植田老牧師「罪人だ！」と嘆息して「貴方は最少し、自分の罪惡といふ事を考

へんけりやいけな、(咳きつ)早く悔改めて信者にならないと、貴方の前途には墮落の深い淵が恐ろしい眞黒な口を明けて待つてゐる、今に、その深底へ陥り込んで、後で氣が附いても、もう助かりつこはありませんぞッ」

(鞠子は耳にもかけず)

鞠子「お父さん、この花綺麗でせう、これが信一さんの小さい墓の廻りに咲いてたの、私一生懸命摘んで、こんなに澤山持つて歸つてよ、信一さんの清淨な、白い體から滋養分を吸取つて、こんなに美しく咲いたのでせうね、お父さんに上げますわ」

藤原牧師「有難う！」と受取つて、花に接吻する

鞠子『でも日本の董は香がないから、何だか物足りなくつてよ、信一さんの身體から咲いたのなら、香位しても善いのでせうが、もう神様の奇蹟も利かなくなつたんだわね』

(植田老牧師、苦り切つた顔をして)

植田老牧師『神様は手品師ぢやアない、一々試みるやうな事を云つてはいけな』

鞠子『ぢやア、昔は手品師でしたのね、十字架の上に架つた人を蘇生させたり、水を葡萄酒に變へて見せたり、天一のするやうな事をやつて、屹度人の目を眩ましてたのよ』

植田老牧師『理窟一偏で、そんな天地間の祕密が分るもんぢやアない、鞠子さん(咳いて)……一番大切なのは信仰ぢや、これが無けりや人間も禽獸と

違つた事はないんぢや』

鞠子『そりやア眼も鼻も口もありますし、人間と禽獸と格段に異つてる様に思ふのが間違ひよ、元來人間も猿も同一先祖から出たのでせうから』

植田老牧師『ダーヴンなんかいふ信仰のない、唯の學者の云つた事が、真理か嘘か分らんとしても、少くとも鞠子さんが禽獸の様な眞似をしてるのは事實ぢやらうハ、』と苦笑する。

鞠子『エ、私が……?』

植田老牧師『お父さんに紙めて貰つたりするのは、ありやア犬の子なんかのしさうな事だね』

(藤原牧師、眼を睨つて)

藤原牧師『エッ!、お義父さん、何を戯談仰るんです』

鞠子「西洋では皆然うしますわ、私から云へば犬の子の真似ぢやアない、犬の子が人間の真似をするんでせう」

(55)

植田老牧師「西洋人と日本人とは、風俗習慣が違つてゐる(咳きつゝ) 鞠子さんは西洋から来た人でも、一旦日本の家庭の子となつてゐる以上、あんな見づともない真似はせん方が善いのぢや」

鞠子「私は當前だと思つてよ——愛情のある者が、それを表面に現はすのは、些とも構つた事ぢやアなくつてよ」

植田老牧師「假にも父子の間には禮儀といふものがなけりやならん、加之、人前を謹むといふ心懸も大切ぢや」

鞠子「私等のは、あれが禮儀ですもの、人前を謹むなんて、偽善者のする事ぢやアなくつて？」

(植田老牧師、苦い顔して)

植田老牧師「接吻が禮儀!? 世間も變つて来たもんぢや、若い女子が何うもそんな亂暴な議論をしてはいかん」と藤原牧師の方に向ひ、「藤原があまり自由主義——イヤ寧ろ放任主義ぢやからこんな始末になる」と不機嫌の體。

藤原牧師「汝、植田の祖父さんに向つて不作法な口答なんかしちやアいかんよ、私はこの花束を食卓の上に飾つて來やうから、暫く祖父さんのお相手になつて、仲よく、信一のお墓の話でもして、くれ」(退場する)

(後で二人は暫時無言、鞠子はやがて父の後のロッキング椅子へ寄りかゝる)

鞠子「お父さんの體は、暖い事ね、斯うして手を當てて見るとまだ熱つてゐるわ」

(植田老牧師は脇掛椅子に倚つたまゝ、暫し鞠子の顔を見て、まだ無言でゐる)

(57)

(鞠子は老人を勞はるやうな調子で)

鞠子『この頃は咳は前程酷くはありませんか、喘息氣は何うですか?』

(植田老教師機嫌を直して)

植田老教師『ア、お庇で喘息氣も一時とは大さう快うなつた、喘が出ても

あまり苦しい程ではない、これも神様の御恵みぢや』

(鞠子、シヨックを感じ、噴飯しそうに笑ひかけて、漸つと口を嚙み、顔を反けて)

鞠子『それはよろしうございますねえ』

(植田老教師、體を椅子から乗出し)

植田老教師『信一の墓へ鞠子さんは善くちよいちよい行つてくれるさうぢやが、信一の話し聲でも聞えやしなかつたかね?』と少し笑ひ顔になる

鞠子『私は始終、信一さんと話をして來てよ』と眞面目になる

植田老教師『エ、話をする!……何ういふ話をして來たんだね?』

鞠子『エ、もう、いろんな事を……私は私の心を打明けて、何も彼も信一さんに話しますわ、信一さんは一々領づいて聞いてくれますわ、私の友人は信一さん一人限りなの』

植田老教師『フム、死んだ者が話をする、……それこそ奇蹟ぢやアないか?』

鞠子『否、私の詩なの!信一さんは死んでから始めて私の友人になつてくれました、人間には死人しか、眞の友人は無いと思ひますわ』

植田老教師『活さてる友人でなけりや、死んだ友人は些とも自分の爲めになつてくれやうが無い』

鞠子『人間は息の通つてる間は皆敵ですわ、死んでから始めて味方になるんでせう』

植田老牧師『信一も活だてる中は、鞠子さんの敵でしたか?』とザロリと見る、

(鞠子、少し顔色を動かしたが、深い嘆息して)

鞠子『信一さんは私を味方と思ひました、儘に敵とは思つてなかつたんです、お姉さんくつて、始終馴いて、私の爲めに、あの人が朝夕祈禱までしてくれましたわ』と涙ぐんで俯向く

(植田老牧師も、少し鼻聲になつて、)

植田老牧師『貴方はそれでも、とうく信一の味方になつてくれなかつた、彼が死んでから、墓参り丈は熱心にしてゐても、あの子の祈禱に答へちやくれないんだね』

鞠子『信一さんが墜落ちて死ななかつたら——あの高い塔の上から墜落ちて死ななかつたら私は少くとも神の慈悲を疑やアしなかつたでせう、併

し今はもう無駄になつて了つたんです』起ち上つて、窓越に高塔の影を睨みながら、そこらを徘徊する

(植田老牧師も起ち上つて、背後から寄つて行き、親しげに肩頭を押へて)

植田老牧師『鞠子さん、然ら失望するもんぢやアない(咳いて)信一の死んだのは、神様の深い思召がある事と思つて、今ぢや私は感謝してゐます』

(鞠子、刎れ反けるやうにして、肩頭の手を振り落し)

鞠子『貴方は偽善者なのよ、イヤ、基督教徒は皆偽善者なのよ、信一さんの死んだのを感謝するなんて、そんな事が眞面目で云へる事つてすか!?、自分を欺き、他を欺くつて、その事でせう』

(植田老牧師は笑つて)

植田老牧師『鞠子さんはまだ若いから一圖に然ら思つてるのも無理はない、

信一の事をそれ程までに氣にかけてくれるのは、私は嬉しく思つてゐる（咳きつゝ）併し死んだ人の事許り氣にかけてゝは仕方が無い、鞠子さん、貴方は新生活を始めたら何うぢやらう……結婚しませんかな？」

（鞠子、嘲笑の氣味で）

鞠子「結婚ですつて？……結婚ですつて？ホ、ホ、ホ」と聲高に笑ひ出し、室内を走り行いて

鞠子「私は籠の中に入るのは忌よ、何時迄も野の鳥で、自由な歌を歌つてゐるわ」

植田老牧師「ハ、ハ、ハ、例の詩かね！……二十前の娘は皆、然う云つて家庭のことを籠か何ぞのやうに窮屈がる、併し三十近くなつて、雄を慕はぬ牝鳥は居ないやうぢや、ハ、ハ、ハ、ハ」と笑ふ

鞠子「世間の女は然うでせう、併し私は毛色の變つた鳥よ、翼一つで飛べる丈飛び廻つて、白髪の見えぬ内に、若死して了ふわ」

植田老牧師「それは心得違ひぢや、成る程アメリカ邊では、老嬢でも通るか知れんが、日本は又國柄が違ふから、女の獨身者は世間から除け者扱ひにされるんぢやて」

鞠子「除け者扱ひにされたつて、私は些とも苦痛を感じなくつてよ、苦痛を感じる頃には、もう死んで了つてるわ、生きてるのが忌になつたら、自殺したら善いぢやアありませんか？」

（植田老牧師、眼を睨つて）

植田老牧師「神様の與へ給うた生命を人間が勝手に絶つ事は出来ません」

鞠子「ぢあア世間の自殺者が自殺しかける時に、神様は何故雲の中からで

も、壁の中からも、手を出して留めないんでせう、産れやうと思つたつて、人間に産れて来る自由は無いなだが、死なうと思つて死ぬるの許りは、人間の自由なのよ」

植田老牧師「そんな空論を云つて、はいけない、腹を切るのは痛いもんぢや、それよりかお産をする方がまだ堪へよからう」

鞠子「女に許りお産をさせて、男子にお産をさせない様にした貴方の神様は不公平よ、忌……忌……忌……お産なんて、聞く丈でも身慄が出るわ、女の獨身者が日本に居て邪魔になるなら、寧ろアメリカへでも歸りませう……あのカリホルニヤの廣い、大きな野原、シーラチバタ山脈の外に、何一つ見えない大陸の風景が、私にはインスピレーションよ、こんなコセコセした、山や河やが、鼻先に突立つてる、玩具のバナラマ見たいな島國は

私の本性に合ひませんわ……ア、大洋もいゝわ、大陸にはあれで人間といふ忌敵があるし、大洋の方が人の匂がしない丈でもまだ優だらうね」と恍平、空想するやうな眼色になる

植田老牧師「鞠子さん、そんな夢を見てるやうな事許り云つてないで、少しは眞面目に考へて見るが善いです、(咳いて)貴方は今の中は、獨身で立てるとか、詩を作つて暮すだとか云つても居られやうが、生活するといふ問題は、誰しもの頭に落ちかゝつて来る事です、貴方も一生父母の世話になつてる氣ぢやないでせう?」

鞠子「勿論の事なものと、何時迄も親のパンを奪つて生きてやうとも思ひませんわ、併し……父が、何かそんな事を云つて貴方に頼みましたか?」と懸念がつてしげしげと顔を見入る

植田老牧師白髯を撫しつゝ、

植田老牧師「然ういふ譯ではありません、親等は別に何にも云はないです、
(咳きつゝ)藤原は殊に義理ある中ぢやから、一言もしませんが、貴方も其
處を考へんといけません、幸ひに良い婿さんの候補者があつて、先方で
大さう熱心に望んでゐるのぢやから……」

鞠子、少し思案しながら

鞠子「一體誰でせう？その候補者つていふのは？」

植田老牧師、極めて眞面目に

植田老牧師「立派な紳士です！」

鞠子、少し笑ひかけて

鞠子「一寸名丈云つて聽かせて頂戴な」

植田老牧師「人に依ては考へて見ますか？」

鞠子、猶も笑顔になつて

鞠子「一寸まア……名丈け！……」

植田老牧師「あの會堂を建築した工學士吉岡寛介君です、あの人が——」

鞠子は聲高に、笑ひ出し

鞠子「ホ、あの吉岡さん……アンナ迷信家の偽善者の……ホ、」

と、腹を抱へるやうにして、室内を横切る、植田老牧師は後から追つて行き

植田老牧師「何うしてそんなに笑ふんです？(咳いて)迷信家でも、偽善者でも
なら、吉岡さんは立派な人です、地位もあり、財産もあり、信仰も堅い
し、これ程立派な婿さんは一寸外に見附からんですぞ」

鞠子は、両手を顔に當て、

鞠子『あの人の偽善者といふ事は、チャンと顔に書いてありますわ、それで

ゐて、私はあの人が口先で計り旨い祈禱をしてるのを折々聞いてた事が

ありますわ……黒い手を額にあて……天の父様つて……泣聲を出して

ホ、ハ、ハ』と思ひ出しては堪らぬやうに笑ふ

植田老牧師、呆れて立つてゐる

藤原牧師、入来る

藤原牧師『サア卓の準備が出来ました、義父さん……鞠子も一緒に来てお上

んなさい、お母さんが、米國仕込のビーフステッキの腕前を見てくれと

いふ御自慢なんだ』と微笑する

植田老牧師『ア、それは御馳走さまぢや……』

藤原牧師『鞠子、そんなに顔を隠して何うしてるの？』

鞠子漸く笑止んで

鞠子『一寸可笑かつたから』

藤原牧師『何がそんなに可笑かつたのか？』

鞠子、植田老牧師を見て

鞠子『私の婿さんの候補者が！……』

植田老牧師、不機嫌の體で

植田老牧師『鞠子さんは一寸も眞面目でない、老人を馬鹿にしてる』

藤原牧師『戯談ぢやアない、祖父さんを怒らすやうな事を云つたりしたりし

てはいかんよ』

(鞠子笑を含んで)

鞠子『否、些とも……』

藤原牧師「さア来て一緒に食べたら善い」

鞠子「私少し……後から行きますから」

藤原牧師「皆揃つて食べたら善いぢやアないか」

鞠子「直行さしますよ、皆さんの御祈禱が濟んでからね……祖父さん、何卒入らして下さい」

藤原牧師「サアお父さん、参りませう、鞠子是我儘者ですから」……二人入る、

鞠子はつと窓際に立寄つて塔の影を眺めて、深く沈黙して立つてゐる、室内は薄暗くなる。戸口に鈴の音、下婢お丸、一方の扉より駈け出で、玄関口の扉に入る、暫時して、名刺を手にして讀みながら歸り來る

鞠子「一寸お丸、誰なの？」と近寄る

お丸「あの、見知らぬ方でございます、奥様に直手渡してくれといふ事で

した」

鞠子「一寸まアお見せよ」と奪ふやうに取上げて「何……南洋丸船長、潮

金平……ヘエー何んな方なの？」とお丸を見入る

お丸「色の眞黒な、眼の怖い、何んだか人附の悪さうな方です」

鞠子「お母さんを知つてる人なんだらうねえ」と思案する

お丸「何うでございませうか、必ず奥様に手渡してくれといふ事でござい

ました」

鞠子「然らば……何うした人だらうねえ」としきりと小首を傾けてゐる

お丸「私、一寸奥様にさし上げて参ります、戸口に待たせてありますから」と

名刺を受取つて驅入る

(鞠子、後を見送つて後、好奇心らしく忍び足で、一方の扉の方へ行きかける)

兼子、周章しく、出て来る、顔色も變つて尋常ならぬ眼色、鞆子を見るより、怯とした

やうに

兼子「汝、何をしてるの？ 私の代りに、食堂の方へ行つて、おくれ」

鞆子、振返つて

鞆子「お母さん、誰なの？……」

兼子、威壓する如き調子で

兼子「誰でもない……一寸食堂の方へ行つて、おくれ……私の代りに……」

後から話します」と息も喘んでゐる

鞆子「云つて聞かせたつて善いでせう」

兼子「後から云ふよ、早く……サア、行つて、おくれ」と手をかけて押し遣るやうにする、鞆子澁々入つて行く

(兼子は、その後の扉を閉め切つて、名刺を眺めて慄へながら、思索にくれてゐる)

(ぬつと、一方の扉から潮金平入来る、海軍式の古鞆子を手にし、蓬々と延びた儘の亂髪潮風に染み、日光に燦けたる蒼色の顔には、際立つて白く縁を取つた黒瞳が鋭く輝き、鼻下には海松色の荒髯が濃く輪廓を附けてゐる、白い航海服の大部分汗垢に汚れたのが、精力に充ちた、強健な體を包んで、海の匂ひと、波濤の響きとが、彼の身邊に搖曳してゐる)

皺枯れ聲で

潮金平「奥さん、何うも暫くでした」と眼をギロリと光らす

兼子は、胸を押へて、眼を睜つたまゝ、返答をしないでゐる

潮金平「お在宅だと聞きましたから、何うせ玄關先ではお話が出来ませんし、斯うして上つて來ました、別にお差支はないでせう」とニコク笑ふ

(兼子四邊を見廻し、息もつまつたやうな調子で)

兼子『マア、貴方は……何うして尋ねて来ました?』と傍の椅子へよろけかゝる
潮金平『實は昨日の朝でした、横濱の海岸通で若い雜種兒のお嬢さんと一緒に歩いてるのが何うも貴方によく似た人だと思ひましたので、後を蹤けてとうとう新橋まで着き、それから此家が御住所だと突留めて置いたのです、新橋で電車へ乗られたのを見届けて、次の電車へ入つて、他所ながら始終眼を離さないでゐたんです、マア此の椅子へかけさせて貰ひませう』とロッキンゲ椅子に倚りかゝる

(兼子、胸を押へて)

兼子『サア何卒……今は夫もゐますし、又何か御話があれば、あの、次にも聞かせて戴きたいのですが』

潮金平『處が大さう急な話で、私は明日の朝八時迄に、濱へ出て船を發さなければならん事になつてますから、何の彼のと云つてゐられないんです、打明けた話をしますがお兼さん……イヤ兼子さんでしたッけね』

兼子『シツ、何卒小聲に……』と扉の方を氣にする

潮金平『ようござんす——實は持船の南洋丸が底を破つて、今房州海岸の砂に埋れてるんです、航海が出来なくなつては、皆の者も乾干になるんですから、早速新しい船を買つて、手付け丈は打つたんですが、明日、愈々引渡しといふ段になつて、金が二千圓許り不足してゐます、他に金策がないので、貴方を見附けたのを幸ひ、世間體に一時融通してとは云ひますまい、頂戴に上つたのです、何も云はないから是非、承知したと云つて下す』

(兼子邊を憚りながら)

兼子『然ういふ纏まつた金は即座には出来かねます、會堂新築に、貯金も大方、出して下さるんですから』

(潮金平、嘲るやうに)

潮金平『會堂新築?!……貴方があの不浄な金を出して、會堂新築なんて、随分鐵面皮しい真似をするんですね、イヤ、御信仰は結構だが、無益な會堂なんか捨てる金がありや、私に二千圓やそこら御義捐なすつたからつて、神様の罰は當りますよ』

兼子『何卒小聲に願ひます……皆が居るんですから』とハラ／＼する

潮金平『海の者は聲の高いのが性質です……兼子さん、貴方もよく／＼小心な根性になつたもんだね、カリホルニヤの奥のシーラチパタ山で逢つた

時とは、全で人が變つてゐるやうだ、併しまア、然うして濟してられる處は、誰の目にも牧師さんの夫人と丈は見えますよ』

兼子『何卒、小聲に願ひます、そんな事を人に聞かれては困ります』

潮金平『ぢやアもう何にも云ひますまいから唯二千圓丈、此の急場を救うて下さい、潮も世間並のゆすりかたりぢやアありません、六ツかしく云へば自己の生存に關する大切の場合なんで、止むを得ず、ノコ／＼面を曝らしに出て來たんですからね、もう二度と再びお目に蒐りはしませんよ』

兼子『今、即座にといふ譯には行きかねます』ともぢ／＼する

潮金平『ぢやア、手形を書いて下さい、それで結構です』

兼子『今は夫も居ますし……ぢやア今夜……あの、八時頃、教會へ皆が出てかけて行きましてから、此處へ來て下さい、今はゆつくりお話も出来ま

せんから』

潮金平領いて

潮金平『よろしうございます、ぢやア然うしませう、八時には屹度來ますから』と一體して、ノコノコと出掛て行く

鞠子『お母さん……お母さん……』と、扉を押開けて、鞠子駈け出る、金平振返つて一寸瞳を見合せ、瞬時立止まつてゐたが、直と小足早に一方の扉に消える

(鞠子は、卓上に腕を突いて、思案に暮れてゐる)

鞠子近寄つて

鞠子『お母さん、今のは何うした人なの？……お母さん、貴方、何うなすつたの？』

鞠子、漸く顔を上げて冷淡に

兼子『何うもしやしないの、一寸アメリカにゐた時、知つてた人なの……お父さんに何も云つてはいけなよ』

鞠子、ニヤリと笑つて

鞠子『何んだか變な人ですね……眼が怖い、海のやうな色をしてたわ……誰なの、あの人？』

兼子『一寸見知つてる人だつて云ふんぢやアないか、そんな事を聞かなくつても善いよ……お父さんは何うして在らつしやるの？』

鞠子『お母さんを早く呼んで來いつて仰しやるの！』

兼子懸念さうに

兼子『客が來てるなんて、汝云やアしまいね？』

鞠子『云つてよ、何んだか知ら、人が來たつて』

兼子「エッ」と顔色を變じ「汝、何うしてそんな事を喋舌つて了ふんだね……
汝はお母さんが、苦勞して折角作つた幸福を破滅させて了ふんだ、母不
孝なッ」

兼子冷やかに

鞠子「作つたといふより買つた幸福とお云ひなさいよ、それを何が破滅さ
せるの……あの人が何かそんな關係があるんですか？」

兼子「汝なんかの知つた事ぢやアないよ、要ぬ口をおたゝきでないといふ
のわ」

鞠子「要らぬ口をたゝきやしないわ、事實を事實と云つた丈なんだもの」

兼子「お父さんがお疑ぐりなすつたら困るぢやアないか、何でもない事が
原因になつて、いろんな大變な事になるんだから……」

鞠子「そんなに神經過敏では仕方がないわ、何うせ成るやうにしか成らんの
だから……」

兼子、思索し

兼子「然う云つて了へば人間もそれまでの者サ」

奥より「兼子く」と呼ぶ聲す

兼子、奥驚したやうに起上り

兼子「ハイ、只今……」云ひく髪を撫て付けながら入つて行く

(鞠子、後を見送つて、思索し)

鞠子「お母さんは何うしてあんなに周章て了つたんだらう……あの、海の
やうな眼色をした男子……南洋丸の船長だつて……大洋の上で、自由な
生活をしてるんだらうね」

下婢お丸出て来り

お丸「お嬢様、あのお客は誰方でございますの？」

鞠子「あれは海洋の、自由の精霊なのよー」

お丸不解

お丸「自由の精霊つて、何んでせう？」

鞠子「白い、大きな翼を張つて波濤の上を自由自在に翔けてゐる、海の神

祕な鳥なのよ」と、両手を上げ、夢見るやうな眼色に空を見上げる（カーテン）

第二幕

前と同室

室内卓上に据洋燈點せらる、窓越に、燈火輝く會堂の窓々見え、オルガンの響、讚美歌の聲す

（鞠子、ロッキンク椅子に寄り、卓上、小冊子を取り擧げて讀んでゐる、處へ病めるやうな顔色の兼子、手で喉顔の邊を押へながら、出て来り、咎めるやうに）

兼子「オヤ、汝、まだ行かないの？、もう説教が始まるんぢやアないか」
と置時計を見に行き「もう時間よ、お母さんの代りなんだから早く行つてくれなければりや困るぢやアないかね？」

(鞠子、漸く顔を上げて)

鞠子『お母さんは眞實に齒が痛み出したの？、あんまり急ね』と嘲笑の氣味

(兼子、勃として)

兼子『汝のやうに親を何とも思はないものはありやアしないよ、私がこんなに苦んでるのを虚病でも遣つてると思つてるの？、今日は大切な儀式のあつた日の夜の集會だから、こんなでさへなけりやお母さんが是非行くんだけれども、それが出来ないから汝が代理して、お母さんの掛ける場處へ腰を掛けて呉れないと皆さんに濟まないんだもの、早く行つておくれよ』

兼子『行くには行つてよ、儀式の日だなんて私には何んでもありやアしないけども、お母さんのと定つた場處へ私が腰を掛けて、皆の前でお父さん

んと一緒に並んで見るのが面白いからね、併しまだ祈禱が濟まないんでせう』

(兼子焦々しく)

兼子『皆さんの手前もあるぢやアないかね、祈禱が濟んでからノツソリ出かけて行くより、今の中に早く行つて、おくれ』

鞠子『私は祈禱を聞いてると、つい噴飯して了つてよ、皆が中心から信じても居ない癖に、習慣的に頭を下げて、神様でも眼前に見えるやうな顔色をしているのが、可笑しくて堪らないんだもの』

兼子、不斷、頬邊を押へながら

兼子『だつて今夜はお母さんの代理だから、そんな事を云はないで、我慢して早く行つておくれ』

鞠子『然う急ぎ立てなくつても善いわ、お母さんもそんなに口が利けるのなら、齒痛も大した事ぢやアないんでせう、先刻、お父さんの前で、涙をポロ／＼出しなすつた時は餘つ程苦しうだつたわ』

(兼子、頬邊を兩手で押へながら、腕掛椅子へ倚り)

兼子『私は氣が揉めて仕様がなから、こんなにして汝に頼んでるんだよ、齒の痛いのも堪へて起きて來たんだよ』

鞠子『然うですか？……でも、私が出て行つた頃にはお母さんの齒痛はスツカリ癒るんぢやなくつて？』

兼子『汝、何うしてそんなに母親を馬鹿にするんだらう……私はこれまで汝の爲めに、何んなに苦勞して來たか知れないのに、汝は些つとも親の事なんか思つちやア居ないんだ』

鞠子『だつて、私はアメリカでも學校に許り住つてゐて、親の眞實の愛情なんてもの知らないんだもの……伊太利の貴族つていふ私の父の寫眞さへ、私は見た事がないぢやアありませんか？』

(兼子一寸躊躇して後)

兼子『汝のお父さんはお母さんを捨て、伊太利へ歸つた切り、音信も何もしてくれなかつた、後で死んだといふ通知と遺言狀丈け來たやうな事なんだから、その間お母さんが汝を育てるのに何れ丈苦勞したか？學校へ月々經費を仕送りするのでも、女の腕一つぢや容易な事ぢやアなかつたんだよ、些しは察してくれてもよい』と涙含む

鞠子『だつて、父の遺産があつたから、お母さんは彼して、今のお父さんの處へ嫁入つたり、會堂を建てたりする事が出來たんでせう、苦勞した

くつて云つても、私には些とも合點が行かないわ、眞實の親子ならも少し何も彼も打明けて話したが善いでせう』

兼子『お母さんは何んにも別に隠立なんかしやしないよ、汝を始終、學校へ預けて置いたのは、その方が汝の身の爲だからと思つての事なんだよ、遺産が手に入つたのは、アメリカを出發するついで少し前なんだもの、それまではお母さんは人の處で働いたり、男子のするやうな荒い仕事をしたり、始終、心配やら、氣苦勢やらし通して來たもんだから、汝にそんな處を見せては悪いと思つて、年に唯一度、クリスマスの際に、私が學校の寄宿舎へ訪ねて行く事にしてたんだ、了には、それさへ汝がうるさがつてゐたぢやアないか？』

兼子『私はお父さんの寫眞も持つてないやうなお母さんは眞實のお母さん

ぢやアないといふ氣が度々起つてよ、今でも然ら思つてゐるわ、私を捨てて行つた父も父よ——（考へて）けれども又考へて見ると親子なんて云ふものは、高が情慾の結果に名を附けたものに過ぎないんだから、何も然ら、勿體を附けて見るのが嘘なんでせう』と小冊子を隠して見てゐる

（兼子、ぐたりとして考へ込む）

兼子、母を見上げて

兼子『お母さん……この醜業婦——イヤ婦人救濟會つていふのは何時頃から始まるの？』

兼子『それはもう明朝からでも取かゝるのでせうよ』と力のない聲

兼子、笑を含んで

兼子『醜業婦を救うて、職業を授けてやつたつて、それが何になるの？人

間に情慾がある間は、醜業婦つていふものは社會の需用品ぢやアなくつて、金をかけてこんな事業をするよりか、寧ろ流行の懸賞募集で、情慾の殺菌劑でも發見させた方が氣が利いてやしませんか知ら、お父さんは餘つ程人が善過ざるわ?!』

兼子、他人らしい口調で

兼子『誰も好き好んであんな稼業をやつてるものはありません、それを五人でも十人でも正當の人間の道に引戻してやるのは何よりの功德です』と、頬を押へつゝいふ

鞠子『だつて、情慾を満足させるのも、矢つ張人間の道ぢやアなくつて?、職業といへばつまりは皆、生活の爲めなんだから、音樂の教師になるのも、娼妓になるのも、各自の自由だわ』

兼子、少し勃として

兼子『ぢやア、汝は生活の爲めには娼妓にもなるんだね、娼妓つていふものは、氣樂な職業だと思つてるんだらうね』と頬邊を押へる

鞠子、冷笑して

鞠子『私は何んな事があつても娼妓なんかにはならなくつてよ、他人に満足と足と與へる方便になつて、生活して行くものは弱者よ、私は自分の満足を目的として生活して行く強者になる考へだわ』

兼子『ぢやア自分勝手な眞似許して、他人も親も、神様さへも何んとも思はないつていふのだらうね』と聲懐へる

鞠子『自分の爲めに生きて行く事が出来なかつたら、生きてる價値はなくつてよ——他人も、親も、皆自分の爲に在るんだと私は思つてよ、神様

なんか無い方が自分の爲だわ』

兼子『汝はそんな事を云つて、今に神様の罰や親の罰が當つて来るよ、その時になつて思ひ知るでせうよ』云ひく、起ち上つて、又置時計を眺め『オヤ、もう直に入時よ、議論は後からで善いから、汝早く行つておくれ、お願いだから』

兼子、勝利者の如く笑つて

鞠子『ホ、ホ、サア行つてよ、神様が眞實に、罰を當てしてくれると面白いと思つてよ、私がお母さんの坐る處へ坐つて、いろんな事を考へてる時に、基督が出て、私を呪つたりすると、面白いんだけどね、ホ、ホ、』と漸く起ち上る

兼子、促き立てるやうに

兼子『もうオルガンの響が止んだ、説教が始まつてるんだよ、仕様のない人ね、早くおしよ』

鞠子『お母さんの齒痛ももう快くなつた頃ねホ、ホ、ホ、オヤ、今夜は私はお母さんの代理で藤原夫人よ、それが面白いから行くんだわ、グード、イヴニング！』と衝と走り入る、

後で兼子は、ホツと吐息を洩らし、

兼子『仕様のない女になつたもんだ』

神経的に室内を見廻し、椅子の位置など直し、窓のカーテンを引き仰るす

(兼子、奥を覗いて)

兼子『お丸や……お丸や……?』

(お丸出來り)

お丸「ハイ……奥様、御用でございますか？」

兼子「汝、もう御飯は済んだのかい？」

お丸「ハイ、戴いて了みました……奥様の御歯痛は如何でございますか？」

兼子「もう大さう快くなつたよ、跡片附はその儘にして置いて、汝も早く

會堂へ行く事におしよ」

お丸「ハイ……でも奥様の御病氣なのに、私家が家を明けましては?!」

兼子「否え、私の事なら些とも構はないから、今夜は獻堂式の日でもある

しね、汝私の代りに……あの、鞠子も行つたんだから、汝も行つてお

くれ」

お丸「ハイ……参つてもよろしうございますか知ら？」

兼子「直行く事におしよ、御説教がもう始まつてやうから」

お丸「ハイ、ぢやア行つてお説教を聴いて参りませう、まだ一度も聴いた
事はありませんが、旦那様はお聲が善くつて、お話が大さう面白いとい
ふ、信者の方の評判なんでございますものね」

兼子、苦しげに笑つて

兼子「然うかねえ、世間ではそんな事を云つてるのかね？ 説教を浪花節の
やうに思つてるのね」

お丸「へー……然ういふ譯ぢやアありませんけれど」と照れる

兼子「何でも善いから、まア聴いて来るが善いよ、木戸錢は要らないから
ね」

お丸「ハイ……」と報くたつて駆け込む

○後、暫時森とする

(兼子はやがて預金の通帳と小さい十露盤とを懐中より取出して、卓の上で計算を
始め、思案しては吐息を吐き、又十露盤をくづし、手を額に當て、考へ込む、會堂の
方に當つてはオルガンの響が聞え、讚美歌の聲が起る)

兼子、ホツと長い息して、十露盤でガチャリと卓の端を叩き

兼子「二千圓なんて、そんな金を貸したり、與つたりしたら、私はもう破
産も同様だ、何うしたらいいか分りやしない」と卓上に打伏る

(八時の時計鳴る、戸口で鈴の音がする、兼子は弾じかれたやうに起上る、衣紋を直して

扉の口で消え、暫時して、金平と二人入つて来る)

兼子「まあ、その椅子へ腰をお下しなさい」と扉を二箇處と鎖す

(金平ロッキンア椅子へ倚りかゝり、室内をザロ〜見廻し)

金「先刻は突然お訪ねして何うも失禮しました、斯うして御見受するとナ

カ〜結構なお住居ですな』 ロックする

(兼子は躊しやかに)

兼子「否、宅のは、別に傳道會社から月給を貰つてゐる譯ではありませんし、
ナカ〜生活向が困難なのでござりますすよ』

金平「それぢやア皆、貴方の財産で生活を立てゝ行つてゐるんですか?』と穿
つやうな眼で兼子の顔を眺め「此處の先生は、貴方の素性を百も承知で夫人に
した譯なんですか?』

(兼子、暫らく躊躇して)

兼子「ハイ……素は何をしてゐましても、悔改めたら罪は消えるのですか
ら……基督は、人の罪を赦すには、七度を七十倍せよと仰しやつてゐるん
ですからね』

(金平聲高に笑ひ出し)

潮平「ハ、ハ、ハ、ちやア罪を犯しちや悔改め、又罪を犯しちや悔改めると、結局、天國へ行かれる譯ですな、御重寶な教へです、アメリカ邊にも、然うした信者が澤山ありますよ、六日の間は罪惡といふあらゆる罪惡を仕盡して、七日目の安息日に平氣な顔で會堂へ行つて、ダラ札を盆の上（盆を盆の上）に投げ出すと、それで神様の方でも罪惡が一切帳消になつて、善人の仲間入をする、翌日から又新しく罪惡をやり直す、それが次の七日日には又速成の善人になれる、基督信者なんていふ者は、世間を恐れて偽善の假面を被つてる卑怯な惡漢です、遣り口は小利巧だが、高が詐欺師か、掏摸の眞似位しかやれない、ケチ臭い根性の野郎許だ、それから見ると私等は白晝公然に、辻強盜を働かうていふ連中で、惡漢らしい惡漢でせ

(98)

う』とポケットからシガーを取り出し、マッチを擦つてスパクと煙を吹かし始める

(兼子、脇掛椅子に倚かり)

兼子「そりやアメリカ邊りには然うした偽善者も居るか知りませんが、私（わたし）はもう心から悔改めて、神様に此身も魂も捧げてるんですから……ア、して新しい會堂まで建て、世間の人を救濟の道に入れやうとして、一生懸命になつてるんですから、假令昔が何うあらうと、些とも構ひません、それは夫も然う申してゐるんですよ」

(金平、噴飯すやうに笑ひ、シガーの煙に咽返りながら)

潮金平「……世間の人を救ふもよく云へたもんだね、身も魂も神に捧げてつて、そんな讚美歌の文句がありましたけ、兼子さんはさすがに諳誦が上手ですハ、ハ、ハ、」

(99)

(漸く眞面目になつて)

潮金平「世の中の事を然う甘く見てるのは僧侶さん等と婦人仲間位なもん
でせう、お兼さん——イヤ兼子さんは随分苦勞して來た人間だが、矢ッ
張、毛髪の長い種族の本性は争はれんもんだね、新しい會堂を建てたと
いふのが、御自慢らしいが、その金は兼子さんが身體を切賣して、ソッ
プに煎じて世界の色餓鬼共に喫らせた不淨な肉の代價ぢやアないか、藤
原先生がそれを承知でゐるのなら餘ッ程の生臭僧侶だ、兼子さんで埒が
明かないのなら、私はこれから會堂へ行つて、皆の前で直接談判を開く
としてもよゝ』と起ちかゝる

兼子は周章て、

兼子「金平さん、まア、そんな短氣な事をしてくればは困りますよ、貴方

が私等を苦しめたからと云つて、それで御用事の足りる譯でもないんで
せう』

(金平、尻を落付け)

潮金平「イヤ、私は何んにも貴方等に恩も怨みもありやしませんが、人を苦
しめて面白がつてられる程の閑人ぢやアないんです、二千圓の金さへ頂
戴出來れば、私は陸に用事はないんだから、サツサと歸りますよ』

兼子「サア、その二千圓といふのが、口で云へば僅のやうですけども、
日本ではナカ／＼大金ですからね、正直の處、計算して見ますと、今私
の手許には二千弗餘しか残つてないんですよ』

金平、意外の面色して、暫時は煙を吹かしてゐたが

潮金平「二千弗ありやア、その半分丈け、出したら濟む事です、何も他人

の財産を算へに來たんぢやアない、自分の用さへ足りたら私は満足して歸つて行くんですよ……併しお兼さん……イヤ、兼さんは四五萬は持つてるといふ噂だつたが、何うしてそんなに遣ひ減らしたんだね？」

兼子「何も駈引は云やアしないんだから、兎に角この通帳を見ておくれよ」と、擴げて見せる

兼平、覗いて見て

潮金平「フム……成る程……一萬五千圓といふのが、あの會堂の建築費だな……千圓……五百圓……ちよいと小口が引出してあるのが、牧師さんの生活費か、藤原牧師なんて威張つても、まア、嬪夫見たやうなものだねハ、ハ、」と煙を吹く

(兼子、勃として通帳を懐に隠し)

兼子「そんな餘計な口を叩かなくつても善いでせう」

(兼平、つくつく兼子を見て)

潮金平「お兼さんも……イヤ兼子さんも夫人になつて安心したものか、それとも氣拔がしたのか、随分年を老つて了つたんだね、シーラ子バタ山脈の奥で始めて逢つた時は、何うしてナカ／＼私等はウツカリ傍へも寄附けないやうな豪い元氣で、鑛山人夫の伊太利人や希臘人を指先でゴム球のやうにあしらつて居たツけな、第一婦人の身で、日本人が一人も入込んでゐない、あんな偏鄙へ單身で入つて行くなんて、尋常の婦人には出來ない真似なんだからね」

兼子、冷淡に

兼子「イヤ、別に感心して貰ひたくもないんです」

潮金平「處が私は感心して了つたんだ、これでも昔は藤原君のお仲間で、
アーメンを口にしてた男子だから、面の知れた桑港邊にぶらついても居
られず、日本人の居ない處へと思つて、彼處へ只一人、隠者のつもりで
入つて行くと、お兼さんがもう先驅して、商賣してらんぢやアないか、
お兼さんも日本人を見て驚いたとらうが、私も全く喫驚しちやつたん
だ」

兼子「もう、あの時の事なんか云出されると身慄が出るやうだから止して
戴きます」

潮金平「ア少しは昔譚も善いぢやアないか、あの頃お兼さんは何でも
四五萬弗貯め込んでるといふ噂だつたから、話半分に聞いて見ても大し
たもんだと羨ましかつた、私があればアラスカ人夫頭になつて、生命

懸で荒稼をやり、とう／＼今日ぢやアポロ船ながら帆前船の一艘も持つ
事になつたのは、一つはお兼さんの身上を聞いてからの惡奮發なんだ
よ」烟を吹く。

兼子「貴方がアラスカへ鮭漁に行くと云つて告別に來た限、サツバリ様子
が分らなくなつたから、何うしたのか知ら、人氣の荒い處だから若しや
殺されたんぢやないかと思つた事もありました」

潮金平、笑つて

潮金平「殺されちやつたらお兼さんも今頃は夢見が善かつたかも知れない
が、善事をしてる中は始終運が弱く、惡事をやり出してからは何彼につ
けて運が強くつて、とう／＼惡錢を作つて船を買ひ込み、南は濠洲の果
から西はスモタラ、ボルネオ島くんだり迄、太平洋の上を荒ばれ廻り、

天草邊へ活物を仕入れにも度々来て、ドカ儲けもやつて来たんだが、今度は椰子の實やら鳥の羽根やら積込で横濱への歸り途に風向が悪くて房州海岸へ吹き付けられたかと思ふと、船底を叩き破つて了つたんだ、悪魔にも見放されたかと思ふがの私も一時途方に暮たんだが、横濱へ渡つてウロツキ廻つてる中に、又お兼さん——兼子さんを見附たのも不思議な運命サ、悪魔の方が矢ッ張神様よりはよく守つて呉るやうだよ、シラチバダでは、ちよい／＼煙草錢の無心を云ひよつたが、今度は一度限、船代の御無心に上つた譯なんだから、何んにも云はないで奇麗に出して貰ひませうか？」

兼子「今もいふ通り、二千圓といふ纏まつた金を出しては、これから先、私等が生活して行くにも困りますからね、少しは察して貰ひ度いんです

よ」

潮金平「生活して行くと云つても、藤原君もまさか無報酬で働いてるんぢやアあるまいし、今後も永くお兼さんの肉を喰つて、生きてやうと思ふ程の意氣地無しぢやアないだらう、然うした心配は要らなさうだ」

兼子「ですけれども、私は事に依つたら獨立して……獨身で暮すやうな事が起らんとも限りません……その時の準備をして置かなけりやなりませんからね」

潮金平「お兼さんが獨身で暮らす？……」と考へて「フンこりやア可笑しいぢやアないか、藤原牧師が細君を離縁するといふ事もあるまいし……、ハ、ア、ぢやア藤原君は、まだお兼さんの素性を知らないんだ……藤原に黙つてるんだな、然うだらう？」とちつと見る

兼子「……然ういふ譯でもありませんけれども……人の身上には何日何時、何ういふ事が起つて来るか知れませんかね」

(潮金平、冷やかに笑つて)

潮金平「隠したつて分りますよ……然うだらう、それで合點が行つた、藤原なんかには、そんな悪人になれる丈の度胸はあるまい、今時の牧師なんかには、そんな膽力のある奴はなからうと思つたが、成る程それで讀めた、お兼さんは一體、藤原牧師とは何うして夫婦になつたんだね？」

兼子「何うしてつて……唯愛し合つたのです」と空嘯ぶく

(潮金平、新しくシガーを吹かしながら)

潮金平「唯愛し合つてか？」と鼻で笑ひ「アア、忘れてた、お兼さん、一服やつちや何うだね、シガレットもあるよ」とポケットから取出してさし附ける

(兼子ツンとして)

兼子「私は煙草なんか喫みません」

(潮金平、笑つて)

潮金平「牧師夫人だから、煙草は止したのかね、それ丈は慥に基督信者だ」

兼子「何んとでも仰しやいよ、神様が御存じですから」とソツと涙を拭く

潮金平「フン、その神様もお兼さんに會堂を建て、貫ふやうになつたんだから、餘程毫碌遊ばしたんだ」と笑つて、相手の顔を眺め「まあ、サ、そのやうな怒つた顔を見せるやうでは、牧師夫人の鍍金が剥けて了ひますよ、」

兼子、猶も勃として

兼子「剥けたつて構ひません」

(潮金平、煙を吹きながら)

潮金平『然う濟ました事を云ふもんぢやアないよ、それよりか今のその、藤原と愛し合つたつていふのは、御尤のやうでもあるが、藤原の方では汝さんの金に惚れたんぢやアないかな、近隣で聞けば何んでも先妻があつたつていふんだらう、雙方とも、もう色の戀のといふ年配でも無いし、會堂を建てる爲めに、汝さんは貰はれて來たんだらう』

(兼子、俯目になり)

兼子『そんな事は知りません、兎に角、私は神様を求めてゐました、心の底から眞面目に救濟の道に入りたと思つてたんです、藤原は私の話を聞いて、大さう同情して、度々往來してゐる中に、結婚する事になつたんですから、神様の許し給うた夫婦ですわ』

潮金平『汝さんの話を聞いたと云つても、例のシーラチバダ山の奥の商賣

は抜にしたんだらう、牧師なんていふものは一體馬鹿正直だから、不幸な婦人に泣き付かれたら直同情するし、神様が許したと云つては愛の無い結婚でも平氣でやる、藤原は金に惚れて結婚を申込んだに相違ないが、その金の素性は些とも御存じないで、これも神様の榮光を現すんだ、何んだと思つて、獻堂式なんかやつたんだろ：ア、今もしきりに難有さうな讚美歌の聲が聞えてゐる、人間つて馬鹿なものだハ、』と冷笑する

兼子『あんまり大きな聲を出して下さらんやうに：』と起つて、扉口の方を氣にし、時計を眺めたりして『兎に角、私、二百圓丈、小切手を書きますから、それで何卒我慢して歸つて下さる』

(潮金平、眼をギョロリと光らせ)

潮金平『二百圓！ハ、ハ、馬鹿な事を云つちやいけない、そんな端金なら

乞食にでもくれてやるが善いよ、二千圓無けりや、自己の生存問題に關するんだから斯うしてワザ／＼出掛けて來たと云つてゐるんぢやアないかね、申談は止して貰ひ度い』

兼子『でも貴方の云ふ通りの大金を出して了つたら、私は明日の日の事が氣にかゝる、此處を出されたら何うして生活して行けます？私が苦勞して儲けた金を會堂にしたり、船にしたりしては、私には無意味です』

潮金平『會堂にしたのは無意味だつたかも知れないが、船にするのは汝さんの身上に保險を掛けるやうなもんだ、保險を掛けなけりや會堂も汝さんも焼けて了ふぢやアないか？』

兼子、考へ〜

兼子『生活費が無くなる程なら、私はもう何うしたつて構ひません、藤原

に包まず、自分で云つて了ひます……藤原はア、した人ですから、悔改めたら許してくれん事はなからうと思ひますわ』と俯目になる

(潮金平 嘲笑つて)

潮金平『藤原先生が幾何善人でも、嬪夫だと氣が附いたら、このまゝ、牧師をしても居られまい、それを云つたらお兼さんは私の持船の南洋丸のやうな難破船と同一運命に陥るんだ』

兼子、自棄氣味で

兼子『貴方のいふやうな金を出す程なら何うなつたつて構ひませんよ』

潮金平『構はんつて？……構はんつていふんだね……よろしい、それぢやア此から會堂へ行つて談判する、皆の前で牧師を相手に談判する事とせう』顔色凄まじく起上る

兼子、遮ぎるやうに

兼子「まア待て下さう」

潮金平「汝さんぢやア話が分らなう」

兼子「さう一刻に怒らなくつても善いでせう」

潮金平「この上、愚圖々々しては居られない、海の者は卒直者ですよ」

兼子「だつて、そんなに短氣を出さなくつても善いちやアないかね」

潮金平「もう、この上、押問答は無益だからね」と行かゝる、扉明て、兼子歸入る

(兼子、喫驚して)

兼子「オヤ、汝、何うして歸つて來たのツ？まだ集會は濟まないんだらう」

と時計を眺める

(兼子、笑つて)

鞠子「お父さんの順番が來て私の傍に居なくなつたから……説教なんか聞いたつてつまらないし、歸つて來たの、植田の祖父さんの説教してる間は、私、耳を閉いでよ」

(潮金平ギョロ／＼と見てゐる)

兼子「私の代理に行つて、あまり我儘な事をするんぢやアないか？」

鞠子、笑つて

鞠子「だつてお母さんは斯うして起きてるんだもの……お客様があるのね？」と金平を見る

兼子「私がアメリカで知つてる方なの、折角訪ねて來て下さつたもんだからね」

(潮金平、兼子を見て)

潮金平『このお嬢さんは何うした方ですか？』

兼子『私の娘ですよ』

潮金平『へエー：アメリカぢやア些とも見かけなかつたやうだが、美しいお嬢さんだ、實は海岸通りでは、この嬢さんの顔が眞先眼に附いて、それから何んだか引づられるやうになつて、とうとう東京まで躓いて來たんだが、一體誰どの仲に出來た嬢さんかね？』

兼子『この子の父は伊太利の貴族です、それが國へ歸つた限、消息もしてくれなくなつたので、私は早くから女學校へ預けて、一人の腕で教育して來たんですが、我儘者で、親の手に了へないんです』

(潮金平、恍乎と見入つて)

潮金平『今時の教育のある若い女はナカ／＼母親の權利なんかで抑へ付け

られぢやア居ないんです、ねえ、お嬢さん……お名は何んていふんですか？』と母子を見る

鞠子『アメリカではミス、メリー、日本に來てからは鞠子よ、貴方は何うしてお母さんと知合なんですか？』

(兼子、遮るようになつて)

兼子『唯、アメリカで、お目に蒐つてから御知己になつたの……そんな事を聞かなくつても善いよ』

鞠子、笑つて

鞠子『だつてお母さんの齒痛が急に快くなつたんでせう、餘つ程善く御存じなんですか？』と金平を見る

(金平も笑つて)

潮金平『そりやア日本人同士ですからアメリカ邊で落合ふと特別に親密にもなりますよ、顔を見た丈でも齒痛位快くなりませうハ、』と、又椅子に腰を卸して、煙草を吹かし始める

(兼子、思出したやうに頬を押へ)

兼子『イヤ、それ處ぢやアない、痛くない齒まで陣痛さ出さなけりや善いがと、心配でならんのよ』

(兼子、脇掛椅子へ倚り、金平を見て)

兼子『貴方は今、船長さんですつてね、波の上で暮すのは、土の上で暮すのより面白くつて?』

(金平、笑ひながら)

潮金平『そりやア會堂では説教せめに逢つて、家では好きな煙草や酒も飲め

ないで、小さくなつて暮してるよりか、何んな勝手な眞似をしても巡査や兵隊が咎めない海の方が、面白いに極つてますよ』と煙を吹く

兼子『私は禁酒禁煙ぢやアなくつてよ、シガレットを頂戴ね』

潮金平『嬢さんは話せるね、サア、何卒ツ』と、さし出すのを一本取る、金平、マツチを擦り附ける、兼子、煙を吹かし始めながら

兼子『道徳も法律も無い、家庭も會堂も要らない、皆が皆、自分の爲めに活きて行くんだから、海の上の生活は、眞實の自由のバラダイスだらうと思つてよ』

(金平、笑つて)

潮金平『兼子さんは、ナカ／＼面白い事を云ふんですね、そりやア海の上の人間は、無政府、無道徳の國に生活してゐるんですから、虚飾もなけ

りや、偽善も要らないし、思ふ存分に自由と満足の生涯が送れて行くんですが、唯、慾には、女神の居ないバラダイスで、それが一つ寂寞を感じて居るんです、女の神様が一體あると、私は一生涯、海で送つて、海で朽ちる覺悟で居るんですが」

(鞠子、金平を見て)

鞠子「ぢやア海の上の生活にも宗教が要るんですか？」

(金平、笑つて)

潮金平「戀の宗教とでも云ふんでせうか？イヤそれから他にも、慾の宗教、力の宗教なんていふものを信仰しなけりや、あの浪の荒い大洋の上で生活しては行けないんです、併し讚美歌は船唄で、祈禱は風向と日和見です、お嬢さん何うですか、女神になつてくれる氣はありませんかな？」

鞠子、遮るやうに

鞠子「他の大切な娘を連れ出さうなんて、そりやア酷いよ、婦人氣は何時
も甲板の下で、ウヨウヨ蠢めく程積込んでるんだものね」

潮金平「何アに、そりやア女神ぢやアない、奴隷だ、鞠子さんのやうに美しい婦人が、女神になつて乗込んでくれると、船は福運が倍増になつてくるんだがね」

鞠子「この子は金平さんの慰藉物にする爲めに、永年の間、金をかけて教育したんぢやアないよ、もう許婚の口がちやんと定つてる』と卓上のシレットを取出す

潮金平「ホウ、もう婿さんが定つてるんか、そりやアお嬢さん失禮を申しましたッけ」

鞠子、笑つて

鞠子「嘘よ、婿さんなんて、そんな者はありやしないの、私は人の妻になつたり、家庭の奴隷なんかになりやアしないのよ……然うねえ、女神にならなつて見ても悪くはないけども……」

兼子「そんな夢のやうな事許云つてないで、少しは、眞面目に自分の身の前途を考へて見るもんだよ、何時迄も十八や十九でゐられるもんぢやアな」

鞠子、他見をして

鞠子「植田の祖父さんの声色よ、ホ、ホ、」

潮金平「ヤアお兼さん、とう／＼木地を出しましたな……汝の子にしては、

鞠子さんは大分異つてるよ、氏より育ちだ」

兼子「煙草を吸つたつて、夫の人は喧しくなんか云やアしないよ 鞠子、

もういろんな口を利かないで、吉岡さんの事を考へ直して御覽よ」

鞠子、嘲笑の氣味にて

鞠子「お母さんは、植田の祖父さんと夫婦にしたら恰度善いわ、うるさくつてよ、吉岡さんなんて考へ直すかものはありやアしないわ、吉岡さんの處へ行つて、奥さんなんて云はれるより、この方に願つて、船に乗るわ、女神になるわ」

潮金平「女神になつて貰ふと、この上ない幸福だが、お嬢さん、眞實に、戯談にしてしまはないで、一つ、元氣を出しちや見せせんか？」

鞠子「戯談ぢやアないの、氣が向いたら私は行くかも知れなくつてよ」

潮金平「何日になつたら、氣が向くんですか？」

鞠子『百年経つても向かないかも知れなくつてよ、併し明日の朝でも氣が向いたら行きますわ』

兼子『汝が船に乗つたら眩暈がして、大病人になりますよ、現にアメリカから歸つて来る時だつて、然うだつたぢやアないか？』

(鞠子、反抗的に)

鞠子『あれは最初の二三日なのよ、後は慣れてピン／＼して、甲板の上を飛び歩いてたんだもの、櫓の階子にも上つて見たわ、朝の日出や、夕日の入際が、何んなに美しかつたか！太平洋の董色の波が、見る間にアチモ子の花のやうに真赤な猩々緋になつて、風に吹かれて、うね／＼して、空の雲は一面日向葵の花——イヤ、カリホルニヤボヒーでも咲き揃つたやうに照輝いて……サブライム？……サブライム？……サブライム？眞實に大洋の景色は

エデンの花園よりもいゝわ』と空想的の眼色

(潮金平、和するやうに)

潮金平『それに、南洋へ行くと又島々の景色が善いです、椰子の樹の畑や、バナナの畑や、珍らしい草木が、熱い日光を吸うて思ふ存分に茂つてゐて、大きな不思議な蟹などが海岸の砂の上を匍匐ひ歩く、異つた魚が、岩の間にウヨ／＼する程、泳いでゐる、赤裸々に鯨をした土人等が、長い槍を提げてそこらを駆け歩いてゐる、人間世界とは思はれぬ程變つた景色ですよ』

鞠子『其處邊の土人は、結婚なんかしないんでせう？、屹度、皆が自由戀愛で生きてるのよ』

潮金平『そりやアもう勝手放題で、力の強い奴は二人も三人も婦人を持つ

てるんでせうよ』

(鞠子焦つたげに)

鞠子『而して女の方でも、四人も五人も、男子を奴隷にしてゐるのがあつたらうと思つてよ』

潮金平『サア、そんな女の會長も居るか知りませんが、乳房の垂れた者は何處でも弱者なんですからね』

(鞠子、反抗するやうに)

鞠子『然う定つてもゐなくつてよ、屹度、強い女會長がゐるに違ひないわ、然ういふ者に逢つて見ると、私、氣持が善いんだけどね』

潮金平『女神の御神託とあれば、島々を巡つて、そんなのを探して見る事にしませう、人間の肉を食ふ土人も居るんだから、命がけの仕事ですか』

(鞠子、好奇心らしく)

鞠子『人間の肉つて？何んな味がするんでせう、旨いのか知ら』

(潮金平、苦笑して)

潮金平『サア：神様は人間の肉を食つて生きてるんぢやアないでせうか？、そしてその腹消化に、會堂を建てたり高い塔を作つたりして見るんです』

(兼子、煙をフーッと吹いて)

兼子『人間の肉を食ふつて、金平さん、貴方の事よ、悪魔のする仕業だ』

(潮金平、鼻で笑つて)

潮金平『へ、そりやアお兼さん、自分の事を云つてるんだ、そしてその、お兼さんの肉を藤原君が食ふ、藤原君の肉を神様が食ふ、世の中は廻り持だ、私は此の場合、眞の、その、骨附を舐ぶらうていふ、極、意地の

汚い方サ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

鞠子「エ、お母さんが……」とちつと見る

兼子「金平さん、めつたな事を云ひでないよ、人間が悪い、鞠子なんか眞實にするよ」

鞠子「お母さん、眞實に何うしたの？、些とも私には話して聞かせないんだもの、」と金平に向ひ「貴方、知つてるんですか？」

潮金平「貴方は些つとも聞いてないんですね、然うだらう、お兼さん、話は愈六ツかしくなつて來たよ、保険金を掛増しなけりやア義理にも黙つては受附けられなくなつた」

兼子「汝さんだつて自分の事を考へたら、他の身の上を彼此云はれた身分ぢやなからうよ」

潮金平「私は海の上の悪魔王だと、誰様の前でも名乗つてるんだ……お嬢さんは別に怖くも思ひなさらんでせう、人間の肉の味を聞いているやうなお方だからね」

鞠子「悪魔王ですつて？」とテロク見ながら「私は神様より悪魔王が好きよ、イヤ、全智全能、至仁至愛の神様なんていふのは、ありやア弱い人間の空想から造り出したもので、眞實は、天地間の主宰は大悪魔だらうと、私思つてよ」

(潮金平膝を打つて)

潮金平「イヤ、お嬢さんのお考へは間違ひのない處です、私も昔は神様の奴隷だつたが、今は改宗して悪魔の使徒になつちやつてるんです、お嬢さんも悪魔の娘だ、何卒、私の船の女神になつて貰ひたいもんですな」

鞠子「私は何んだか、夢の中で見た悪魔に逢つたやうな気がしてよ、お昵
近に乾杯をしませうねえ……お母さん、貴方は貴方の知人に、葡萄酒か
何かお出しなさないの?!」

潮金平「お兼さん、酒氣がありやア、出して貰ひ度いな、氣が利かないぢ
やアないか?」

鞠子、起つて時計を見い見いしながら

兼子「圖々しい人だね、今日の聖餐式の残りの葡萄酒がまだあつたか知ら
と心残りしながら扉へ入る

(鞠子、後を見送つて)

鞠子「貴方、お母さんを何うして知つてゝ? 眞正の事を云つて聞かせて下
さすよ」

潮金平「お母さんは、カリホルニヤでへ、へ、へ、」と笑ふ

鞠子「カリホルニヤで、貴方と何うして知つてるんです?」

潮金平「お母さんが、商賣してられる時、逢つたんですよ」

(鞠子、金平の顔を覗き込んで)

鞠子「何商賣してたんですか?」

(潮金平、ニヤリと笑つて)

潮金平「商賣つて云へば知れませう」

鞠子「だつて私、分りませんもの」

潮金平「其……」

兼子、周章しく走りかへる、葡萄酒の罎と、二つのコップとを卓上に据ふる

鞠子「コップが一つ足りなくつてよ」

兼子「私は善いよ、禁酒だから」

潮金平「ハ、煙草を吸つて、酒はいけないのか？」

鞠子「私が一つ、持つて来てよ」と、扉の口に消える

(兼子、後を見送り)

兼子「あの子に、何んにも云つてはいけませんよ、金の事はもう少し……あの、明朝迄考へさせておくれ」

潮金平「然う、ずるくべつたりは御免だ」

兼子「然うなれば仕方が無い、私の口から藤原へ云つて了ふまでサ」とシガレットを吹かす

潮金平「あのお嬢さんを見て、實は何だか気が弱くなつた、汝が然う云へば、明日の朝迄待つ事にせうか、船主の方へ電話で斷を云つて置いて

……」

兼子「何卒も少し……明日の朝まで考へさせておくれよ」

(鞠子コップを持つて歸へる、酒をなみくと注いで)

鞠子「サア、貴方の健康を祝します……お母さんもお持ちなさいよ」

(兼子、躊躇して)

兼子「サア、私は何うも……」

潮金平「何うしてそんな偽善をするんだね、私の健康を祝して貰ひ度い」

鞠子「お母さん、お持ちなさいよ」

(兼子、手にする、三人、杯をカチリと合せ、「ブローシット」と言合つて呑み干す)

○會堂の方で一しきりオルガンの響、會衆の讚美歌の聲起る

(兼子、起つて時計を眺めて)

兼子「オヤ、もう九時過、集會が濟んでよ、金平さん、明朝！…明朝！…

もう歸つて来るんだから見られては悪いからね」と周章てる

潮金平「然うか、ぢやア然うしませう」と起ち上る

兼子「もうお歸りなの…ぢやア私が見送つて上げて、序にお父さんをお迎へするわ」

兼子「お父さんには黙つて、おくれよ、お母さんが一生の願ひだから」と葡萄酒とコップを袖の陰に隠して持つ

潮金平「お嬢さんがお送り下さるなら早速歸らなけりやアなりませぬ、

途々、私の女神に祈禱しませう」

兼子「私なら祈禱を聞いて上げてよ」

兼子「汝、今のはいゝかい、お父さんに黙つてるんだよ」

(兼子と金平は扉の口に消える、後から兼子は追うて行く、やがて一人歸り來り)

兼子「あんなに云つて置いたら、親子の仲なもの、お父さんに云やアしまいけれども…」暫く起つたまゝ思案してゐたが、やがて又周章しく卓の上を見廻

し、椅子の位置など神經的に直したり、變へたりして、暫く不安さうにそれを眺めて後、一方の扉に入る

○お丸、歸り來り、

お丸「奥様、只今歸りました…オヤ、お寝みなすつてるのか知ら…」と扉に入る

○藤原牧師、物思はしげな様子で入つて來る、卓邊の模様など眺め、腕を突いて、ホーツト吐息し、起ち上つて、窓のカーテンを上げる、月光、青く照し込む、暫く景色を眺め、「静な、平和な夜だ」と獨語きつゝ、胸を抑さへて少し歩き廻り、俄に決心せ

る如く「兼子ツ〜」と叫ぶ

(お丸、出て来り)

お丸「ハイ、……、あの、奥様でございますか、お寝つてゐらつしやいませが……」

藤原牧師「寝てゐる……鞆子に聞けば今迄起きて話してたといふ事だ、呼んで来い」と聲が荒い

お丸「ハイ……あの、お齒が痛むのでございませうか」

藤原牧師「呼んで来いと云へば、呼んで来るんだ」

お丸「ハツ……」と怯々して入つて行く

(藤原牧師、誰一人)

藤原牧師「怪しからん……人を欺くとは怪しからん」興奮して室内を歩き廻る、

(お丸、出来り)

お丸「あの、お齒が又痛みますさうで……」

藤原牧師「痛んでも構はんから起きて来いと、然う云ふんです」

(お丸、呆れ顔で)

お丸「ハツ……でもあの、お苦しさを」

藤原牧師「起きて来いつて私が云つたと然う云ふんです」

お丸「ハイ……」と駈入る

藤原牧師「怪しからん……教會へも出ないで、船乗の男子と談してるなんて、實に怪しからん」と歩き廻る

(兼子、悄然として入来る、藤原牧師、ナロリと見て)

藤原牧師「齒が痛んで教會へも出られないと云つてた人が、後へ客を引入れ

て、談してゐるなんて、一體、何事だ？」

(兼子頰を押へて)

兼子「誰が申しましたか、そんな事を？」

藤原牧師「鞠子が現に、その場に來合せて、男子と口を利いたといふんだから、汝が何を隠したつて駄目だ」

兼子「眞實に仕様のない事を喋舌るんですねえ、鞠子は何處にゐるんですか？」

藤原牧師「今、教會で、植田の祖父さんなんかと話してゐる、あれはあの通りの無邪氣な、祕密なんか持つてない娘だから、何んでも正直に、皆云つて了ふんだ、その男子は何うして汝と知合なんだ、夕方に來た時、唯一寸通りかゝりに寄つてくれたんだとか汝が云つたのは、嘘でその場を

胡魔化したんだね、私の留守に引入れて、何か談合ふなんて、一體、何うしたんだ？」

兼子「何んにも別にお疑ぐりになるやうな事はありはしませんのですから」

藤原牧師「それなら斯うくと譯を打明けて話して御覽、苟も夫婦間に祕密があつてはならん、結婚當時、それは堅く云つて聽かせた事ぢやアないか？」

兼子「何にも、祕密つて云ふやうな事ぢやアありません」

藤原牧師「それなら何も齒痛だなんて、教會へ出ないで、留守に會ふ必要はない筈だ、その男子が何をしに來たのか、隠さず、云つて御覽なさい」と、ロッキング椅子へ腰をかけ「汝もまア立つてゐないで、腰を下ろすが善い」

聲稍和かになる

(兼子も眩掛椅子に腰を掛る)

藤原牧師「アメリカで知合になつてたと云ふ事だつたさうだが、それが何うして今夜、皆の留守に、汝を尋ねて来たんです？その譯を云つて聽かせなはらう」

(兼子、顔を上げ)

兼子「貴方は悔改めたら罪は赦さるゝと、何時も然う仰やつたが、あれは眞實の事でございますか？」

藤原牧師「勿論……眞心から悔改めた人の罪は許さるゝんです、過去を責むるのは責むる者の方が愚です、併し汝は今まで汝の身上は私に懺悔してゐる筈だが、あの男子と何か……何か關係でもあつたといふのか？」

兼子「私は度々、貴方に申しました通り、罪の深い體ですから、何卒悔改

めて潔白な生涯を送り度いと思つて、神様を眞心から慕うてゐるので、基督に由つて新なる生涯に入らるゝと信じてゐるのですが、私の考へは間違つてゐるのでせうか？」

藤原牧師「汝の心はよく分つてゐる、この度の新會堂を建てるに就いて、汝が多大の犠牲を拂つてくれた、その篤い信仰にも私は感服してゐる、汝の考へは善いが、併し人間は欺く事は出来ても、神は欺き得られない、良心の前——イヤ、宇宙の神の前に立つた時には赤裸々でなければならん、汝はまだ何か私に隠してゐる事があるなら、皆スツカリ打明けて云つてくれ、それでなければ今夜のやうな事があると互の間に何んだか深い陥穽でも穿たれてあるやうな氣がするんだ」

兼子「皆打明けて云ひましたら、何んな罪惡でも赦して下さるんでせうね

え？ 貴方、眞實でせうねえ？」

藤原牧師「ぢやア矢張まだ打明けないで居る事があるんだね？」

兼子「そんな事を仰しやると氣隠れがして口へ出せなくなりますから、唯、許すと仰しやつて下さい」

藤原牧師「眞心から悔改めるのなら、何んな罪惡があつても許します、云つて下さい」

(兼子、ホッと胸撫て下ろし)

兼子「ぢやア安心しました、申しませう」と口ごもりながら、「眞實に過去の事ですから、何卒許して下さいませよ、貴方さへ許して下さいやア、私はもう誰も怖くはなす」

(藤原牧師、慄へた調子)

藤原牧師「一體、何うした事です！」

兼子「私はこれまで悪い事とは思ひながら隠してゐました、貴方と結婚する時、私は元、高等女學校を出て、結婚する約束になつてゐた男子が他の婦人を妻にした爲め、失戀の結果單身でアメリカへ飛び出して、いろんな事をやつて苦學してる中に、伊太利の貴族と知合になつて結婚したと申しました、そして間もなくその夫が私に不實な仕向けをする様になりましたので、私の方でも随分、我儘な眞似許やり出して、最後には離縁談になり、夫は伊太利へ歸つて了ひましたが、それが本國で死んで、遺言狀を残して置いた爲めに、遺産の幾部が私の手へ入つたんだと申しました」

藤原牧師「それに何か、間違つた事でもあつたんですか？」

兼子「遺産と云つたのは、善い様にその場を糲ろつて貴方の嫌疑を避る爲
めで、實はあれは、私が稼いだ金なんです」

藤原牧師「貴方が稼いだ金？……何うしてそんな金を得られたんでせう？」

(兼子、俯向いて、顔を押しへて)

兼子「私は他に生活の途がありませんでした……力が弱くて、男子のやう
に荒い労働は出来ませず、白人の庖厨に働いて、あさんどん扱ひにされ
るのにも、つくづく厭氣がさしましたし、さればと云つて、資本が無い
から普通の商賣もやれませんが、餓死するか何うかといふ苦しい場合にな
りましたので、生存の爲めには罪悪も何もないと信じて、婦人の唯一の
資本の、肉を鬻いでゐたのです」と始めて正面に藤原牧師の顔を見る

(藤原牧師、喫驚した體)

藤原牧師「エ……肉を粥ぐ……あの、汝が……!？」

兼子「それも始めは、給金の善い酌婦だと欺されて、白人鳥の醜窟へ入つ
たのですが、三四年の間、檻禁同様の目に逢つてゐたのです、然うして
る中に自分でも他人の爲めに金儲けをされて、自分許りが苦しい目を見
てるのは損だと思ひまして、とう／＼隙を見て脱走して、後日
の障害にならぬやう、日本人の入つて居ない山奥へ入り込んで、獨立し
て、商賣を始めました」

藤原牧師「汝、本氣で云つてるんか？……そんな事を……氣が狂つてるんぢや
ないか？」と怯々する

兼子「今迄は隠してゐました、幾何何んでも愛相を盡かされやうかと思つ
て、黙つてゐましたが、その當時、唯つた一人、逢つた日本人の潮とい

ふ男子が、今日といふ今日、ふいと尋ねて来て、私に金をくれる、くれなけりやア貴方に談判すると脅迫しますので、あんな男子に金を奪られる筈はないから、何うせあつた事なら、云つて了はうと決心して、貴方に云ふのです』

(藤原牧師唇を嚙はせ)

藤原牧師『ぢやアあの金は……あの、會堂を建てた金は、汝が醜業を營んで?』と、頭を抑へ、『私は信じられぬ……信じられぬ、汝狂氣したんぢやないか?、私は信じられぬ』と、起上つて、カーテンを上げて、月光の中に、會堂の影を透かし見てゐる

(兼子も起つて近寄り)

兼子『狂氣でも何んでもありません、私はもう心から悔改めて新しい生涯

に入つたのですから、神様も許して下さるでせう』

(藤原牧師、振返つて見て)

藤原牧師『ぢやア汝は本氣でそんな事を云つてるんか?』と太息をもらし『神様が許す……肉體を賣つた金で、神様の……』とむしゃくしやるやうに額を抑へ、苦悶に堪へざる體で頭髪を撚つて『オ、恐ろしい……恐ろしい……汝は恐ろしい事をさせてくれた……ア、神様……神様……何うしたら善いか……神様……神様』と狂氣の如く室内を走り廻る

兼子『だつて私は聖書の中に、基督が姦淫の罪を犯した娼婦を石にて打たうとした者に、地上に字を書いてお示しなすつた言葉のあるのを記憶してゐます、神様は私の心を酌んで下さるでせう』

(藤原牧師、耳にも掛けず)

藤原牧師「何ていふ事だ…恐ろしい、まア何ていふ事だらう…自分は恐ろしい…恐ろしい…神罰が當つたんだ…當つたんだ、神罰が…」

兼子「神罰が當るつて仰やるんですか？」

(藤原牧師、悶々の胸を抑えて)

藤原牧師「信一があの高塔から落たのも、神罰だ…神罰だつたのだ。ア、私は偽善者だ、新しい會堂が建てたい許に…」と、又窓越しに見て「ア、罪惡と汚とで築いた會堂…白く塗つた墓…ア、自分は何うすれば善いか…何うすれば善いか分らん」と椅子に倒れて、ガバと卓上に打伏す

(兼子は、蒼青な顔色になつて、寄り添ひて)

兼子「ぢやア私は矢張悪い事をしたんですか？救はれないんですか？」

(藤原牧師、漸く頭を上げ)

藤原牧師「自分の肉を賣つた金で、神様の家を建てられると思ふんか？神を瀆すんだ、…神を侮るんだ、イヤこんな事をしたものは生きながら地獄に墮つるんだ」と眼を瞑り、腕を又んで悶える

兼子「ぢやア私は何うしても地獄へ墮ちるんですか？罪人は救はれないんですか？」

(藤原牧師、起上つて沈思の色で)

藤原牧師「罪人は救はれない？…ア、汝も救はれない…私も救はれない、誰も救はれないのか？」と涙を拳で拭うて、歩き出す

(兼子、窓際に近寄り、會堂の影を覗んで)

兼子「誰も救はれないのですか？…誰も救つてくれないんですか？あんな立派な會堂を建てても…ぢやア神様つて、慈悲も恵も無いんでせ

う？」と藤原牧師を見る

(藤原牧師、首を掉つて)

藤原牧師「今、私には分らない……神の慈悲も恵も……天地の大愛の力も何も私には分らない、あの新しい會堂が人間の罪惡と汚れとを組み立てたんだと思ふと……私には分らない、分らない』茫然獨語の體、窓越しに會堂を見て立つてゐる

兼子「あんなにしても神様が救つてくれないのなら、私はもうこんな世界に生きてゐる希望も何もありません、これから一思案して來ますわ』と
駈入る

(藤原牧師は暫らく氣援けしたやうに、會堂を覗んでゐたが、慄へた聲で)

藤原牧師「あの窓の燈火は人間の血の色だ……あの、高い塔は惡魔の巢だつ

たか？、欺かれた？欺かれた』と、猶そのまゝ見入つてゐる、

兼子と、植田老牧師と入來る

(兼子、極めて快活に)

兼子「お父さん、何うして入らしやるの？月でも見てゝ？」

(植田老牧師も近づき來り)

植田老牧師「何うしたんだね、然う會堂の方許り見つめて？」

兼子「アラ、窓の火が一時に消えて了つてよ、會堂が盲目になつた』

(植田老牧師、肩頭に手をかけて)

植田老牧師「藤原、何うしたんだね、頭痛でもするの？」

兼子「眞實に、茫然して何うなすつたの？」

(藤原牧師、漸く振向き、頭を押へて、アタリと椅子に寄りかゝり、黙つて、うるさ

げに首を掉る)

植田老牧師『気分でも悪いのか?……鞠子さん、冷水を一杯……お丸を呼んで

下ろす』

鞠子『私が酌んで来てよ』と行きかゝる

(藤原牧師、手を振り、)

藤原牧師『要らん……要りません』

植田老牧師『では気分が悪いんだらう? 逆上たんぢやアないかな?』

鞠子『眞實に何うなすつて?……お母さんは何處かへ行つたんですか?』

植田老牧師『ウム、彼も齒痛は何うしたか知らん? (咳きつ) この上、藤原

まで病人になつては大變ぢや、式が済んで氣が弛んだのぢやらう』

(藤原牧師、額を押へて、神経的の聲で)

藤原牧師『獻堂式がよく無事に済んだものです』

植田老牧師『無事に済んで結構ぢや、神様の御恩を疎忽に思つちやならん

(咳いて)、汝も随分氣を張詰めてゐたのが、がっかりしちやつたんだら

う、オアゆつくり休んだが善い』

(藤原牧師、一層神経的な聲で)

藤原牧師『私は何んだか夢を見てる様です、怖い……恐ろしい……苦しい夢で壓

されてるんぢやアないか知ら?』

植田老牧師『汝、何を云つてるんぢや、あんまり心配し通しなので、頭の調

子が變になつたんぢやらう、チと心を落着けないといかん、(咳きつ) 兎

に角、早く寝んだが善い、一眠入したら明日の朝は氣分がサツパリする

よ、鞠子さんも今夜は早く寝んで、今の話……(咳いて) 會堂で談した事を今

一度考へ直して見なさい、吉岡君の處へ嫁く事になつたら、貴方は眞實に幸福ぢや、お母さんも藤原も安心するし、この家に新しい生涯が開けて来るんです、然うなつたら信一も天國で喜んで、ダンスでもやり出すでせう、イヤ今頃はもう氣早に、徐々ダンスをやり出してゐるか知らん、私も歸つて、翼の生えた信一の夢でも見ませう』(咳く)

鞠子『私は何度、寝ても起ても、同じ考へなのよ、貴方に御返答するのは、同じ調子でNo.1といふ外ありませんわ、貴方のお説教は、私には些も功德がなくなつてよ』

植田老牧師『サア、それが年の若い、未熟者の證據です、人間は決して自分の我意を立てゝはなりません、何事も神様の御旨に従うて生て行かなければ、眞に幸福といふものは來はしないです、(咳きつゝ)白髪頭は浮世

の鹽を餘計に嘗めて來た徴ぢやから、貴方の身の爲めにならん事を致へて聞かせはしませんよ』

(鞠子、笑つて)

鞠子『私は人よりも誰よりも、一番先きに自分に聽いて見るんですものね』
植田老牧師『人よりも誰よりも、一番先に神様に聽かなげりや嘘です、眞實に今一度考へ直して御覽なさい、(咳いて)吉岡君程中心から貴方を愛してゐるものは、この世界に居ないんです』

(鞠子、笑つて)

鞠子『他にもあるだらうと思つてよ』

(植田老牧師、考へて)

植田老牧師『それは誰です、云つて御覽なさい』

鞠子「今、云へなくつてよ」

植田老牧師「然う……吉岡君より他に、熱心に貴方を愛する人といへば……
まア、矢つ張神様の外にはありませんまいね」

(鞠子フ、と笑つて)

鞠子「お生憎さまよ、神様なんか此方から御免蒙つてるんだもの、吉岡さん
んも有難迷惑よ」

植田老牧師「そんな愛相氣の無い事を云つちやアいけません(咳いて)婦人は愛
が生命です、愛が無けりや活きた死體も同前です、神様がアダムの胸の
肋骨を取つて、イヅをお造りになつたのは、男女一體となるべき者ぢや
といふ深い訓示からです」

(鞠子フ、と笑つて)

鞠子「もう、そのお説教は先刻も聞かされてよ、よく記憶してゐますから」

(植田老牧師、咳きつと)

植田老牧師「眞面目に考へて見るべき事です」

鞠子「私は眞面目に考へてゐるから、こんな事を云つてゐるんですよ」

(藤原牧師、突然起つて)

藤原牧師「考へると分らなくなる……死んで了ひ度い……死んで了つたらこ
の苦痛が消えやう」と小刻みに走り廻り始める

植田老牧師「何うしたんぢや? 覺一、汝は餘つ程何うかしてる? 先刻、會堂
を出る時は然うでもなかつた様ぢやが、非常に神経が充奮して來たらし
い、何うしたんぢや、一體何事が起つたんぢや?」

鞠子「お父さん、眞實に何うなすつたんです?」と、二人、左右より肩を扶持す

藤原牧師『分らない……信ぜられない……嘘ぢやアないか知ら……夢ぢやアないか知ら……』と體語の如くいふ

(植田老牧師、首を傾け)

植田老牧師『獻堂式が済んで、氣の弛緩が出て、こんなになつたに相違ない、兎に角寢むが善い……鞠子さん、連れて行つて、寢ませておやんなさう』

鞠子は、思慮ありげな顔色で、藤原を見て

鞠子『お父さん、お寢みなさい、私が連れて行つて上げますから』と、腕を肩先に投げかけて、扉の方へ連れて入る、

(植田老牧師、後見送り)

植田老牧師『何うも餘つ程變な調子になつてるやうぢや……何か、リヴィヴァルの前兆かも知れん』

○吉岡工學士入來る

吉岡工學士『失禮しました、恰度、求道者の、煉瓦屋の主人が集合に來てゐたのを見附まして、街角迄送りながら、又新しい請負工事の事を談話して行いてる中に、ついお約束の時間が五分許り過ぎましたので、大急ぎで會堂の方へ歸つて見ますと、もう閉つてゐるもんですから、此方へだらうと思ひまして……夫人さんは如何ですか？』

植田老牧師『夫人さんも夫人さんですが、藤原が又病人になりかけて』

吉岡工學士『エ、何うなすつたんです？何處にいらしゃいます？』

○お丸、お茶を運び來りて、直に驅入る

(植田老牧師、咳きつゝ、お茶を取上げて)

植田老牧師『今、漸つと寢せ附けさせました、大そう氣分が興奮してるんで

すから、逢はないが善いです、鞠子ともいろく例の談をして見ました
が、不相變でしてね(咳いて)マ、歸り途にゆつくり話させう』

(吉岡工學士、頭を掻き)

吉岡工學士『矢つ張、獨身説ですか?』

植田老牧師『まアまア、歸りながら話させう』

(二人連立つて入る)

(藤原牧師、日本服の襖巻に着替へよろよろとして出て来る)

藤原牧師『あの婦人と同室へ寝るのも怖い……寝たつて寝られやアしないの
だ』

(鞠子、後より躓いて出て)

鞠子『お父さん、何うなすつて?お寝つてらつしやれば善いのに……』

(藤原牧師、振向いて)

藤原牧師『汝のお母さんは悪魔だ、己を殺した……信一を殺した……今に、あの
會堂も崩れる……大地震があつて一思ひに何も彼も崩れ、ば善んだ……そし
て人間が皆殺されて了つたら善いんだ』と次第に凄い聲になる

鞠子『エッ……母が悪魔ですつて?』

藤原牧師『人間が皆悪魔なんだ……神様は死んだのだらう、悪魔が己のする事
を壊しよる、片ツ端から壊しよる』と歩き廻る

鞠子『お母さんが何をしたんですか?……あの、潮金平つて人と、何んな
關係があるんですか?』

(藤原牧師、額を強く押へて)

藤原牧師『私は云へぬ……私の口からは云へぬ……お母さんに聞いて見るが善

鞠子「母に聞けつて仰しやつてるの？私のも何か云つてましたか？」

藤原牧師「行つて、聞いてお來なさい」と、足元危なげに、椅子に凭りかゝり、卓

上に打伏す

(鞠子、思案しながら入つて行く)

藤原牧師は身動きもせず眠れるが如く靜になる

(暫時の後、鞠子ツカ〜と驅け戻り、少し快活に)

鞠子「お父さん、お母さんはスツカリ申しました、……私もう驚いて了つてよ、併し私はお母さんがそんな者にならなかつた以前、伊太利の貴族と戀して、産んだ娘に相違無いさうですわ、私の血は潔いのですわ、私は汚れた母の子ぢやアなくつてよ、私は潔いのですよ、お父さん、私は前の

様に愛してくれるんでせう？」

藤原牧師、顔を上げて

藤原牧師「汝は愛してゐる、心から愛してゐるが、併し、私の生涯は破産だ、もう理想もない、希望も無い」

鞠子「そんなに失望なさるには及びませんわ、お母さんはお母さん、私は私よ、お父さん……イヤ、もうお父さんなんて云はなくつても善いわ、

貴方は私を愛してゐるつて仰しやつたのね、眞實でせう?!」

藤原牧師「何うしてそんな事を聞き直すのか？」

鞠子「私は貴方が以前から私を愛してゐて下さるんだと思ひました、私も貴方を心から……深く、深く思つてるのよ」

(藤原牧師、鞠子の顔を見て)

藤原牧師『鞠子さんも思つてくれる……私も汝は始めから他人とは思へなかつた』

(164)

鞠子『他人とは思はないんですつて？……ぢやア實の娘といふ氣でゐたつてんですか？』

藤原牧師『然う……實の娘?!……それよりももつと親しい氣がする』

鞠子『もつと親し……』と手を拍つて『ぢやア額丈け接吻してゐるのでは足りませんわ、Please kiss me on my lips!』

(藤原牧師、驚いて)

藤原牧師『エッ……何うしてそんな事を云ふんだ？』

鞠子『愛に偽は要りませんわ、If you love me so deeply; it is no matter whatever you do.』

藤原牧師『鞠子さん、何を云つてゐるの？汝と私とは親子の間ぢやアないか？』

世間の人が……』

鞠子『世間の人なんか、何を云つたつて恐れるには當らないうわ、From be-

fore I love you so deeply, and I am also beloved; then God and society have no more power against this holy love! 母親なんか……あんな汚れた

母親なんか、私は何とも思はなくつてよ』

(藤原牧師、驚いて起上り)

藤原牧師『鞠子さんは戯談云つてゐるの？』

(鞠子も驚いた色で)

鞠子『エッ、戯談ですつて？……貴方は卑怯者よ……臆病者よ、自分で自分の心の姿を善く見るのが恐いのですね、貴方が日常私の額を接吻して

(165)

下さる時、貴方の心臓の鼓動の高く打つのを私はよく聴いてゐました』

藤原牧師『エッ……私の心臓？……』と胸を押へる

鞠子『貴方の心臓の高く打つのも同じ調子に、私の心臓も高く打ちました、私は音楽の合奏を聴くやうな気がして、その刹那のバラダイスを想像しました』

藤原牧師『エッ……』と呆れて立つ

鞠子『それから、他から結婚の申込を貴方はよく辭りました、その時の聲の調子にも、貴方は私を深く愛してゐるんだと感じましたわ』

(藤原牧師、懐へた調子で)

藤原牧師『鞠子さんが、自分で、結婚はせぬと云つてたんぢやアないか』

鞠子『私は貴方がよく、私の意中を悟つて、下さるんだと思ひまして、私

は常時、結婚の話なんかには耳を傾けなかつたんですわ、イヤ、私は貴方の靈に、結婚してると思ひましたわ』

(一方の扉動いて、少し開きかゝり、人が窺つてゐる體、それには気が附かず、藤原は手を明けて、黙つて立てゐる)

鞠子『貴方は自分で気が附なかつたかも知れませんが、私のする事、なす事、一々、貴方の靈に感應して、私は、私の意志が貴方に通ずると思つてました、併し貴方は、所謂宗教家で、道徳家で、神や世間や、母を恐れて、戀の目を眠つてゐました、何時かそれを明けて上げやうと思つて、私は苦心してゐたんですわ』

(藤原牧師、苦悶の色で)

藤原牧師『併し……併し、汝は兼子の實子ぢやアないか？』

(扉の口より、青白い兼子の顔、半現れて又消える)

鞠子「お母さんは……お母さんといふも恥かしいが、あんな弱者は生存の権利がありませんわ、私等は強者となつて楽しい一生を送りませう、
Please kiss me!」

(藤原牧師、飛び退くやうに、逃げて)

藤原牧師「鞠子さんは、眞實に強者だ、私は併し、接吻が出来ぬ、身體が慄へる……靈魂が慄へる……私は貴方をそう思つたのか知ら?……親が子を……子を親が」と頭髮を捻ぢ拂つて、卓上に打伏す

(扉の影の、兼子の姿はフイと消える)

鞠子「貴方は男子の癖に、あんまり卑怯ぢやアありませんか? 社會を救ふの、教を傳へるのつていふ人が、あんまり意志が弱いぢやアありません

かゝ Kiss me! Kiss me!』と藤原牧師の肩を揺り動かす、

(藤原牧師は、勿れ上るやうに起き上り)

藤原牧師「鞠子さん……兼子の事を……母の事を少しは思つてやりませう、長年の苦勞をあの會堂に……」と、カーテンを引上げ、窓を明け放つて眺め入る、

鞠子は藤原牧師の肩先に手をかけて同じく眺めてゐる、

藤原牧師「オヤ、月影のさして一番上の高窓に、人の影が覗いてるぢやアないですか?」

鞠子「然うね何んだか黒い影法師が……」

藤原牧師「今時分……可怪しい事ですか?」

鞠子「オヤ、半分許窓の外へ體を出してゐるやうですよ」

藤原牧師「信一の靈ぢやアないか知ら」

(鞠子、俄に聲高く)

鞠子「お母さんぢやアないか知ら？」

藤原牧師「兼子ッ！……兼子ッ！」と叫ぶ

鞠子「お母さんがあの塔へ上つたのかも知れなくつてよ……何うしせう」と
周章しく、扉へ駈け入る、

藤原牧師「エッ……兼子が……若しも信一の跡を追うて？」と、此も周章しく
込む

○お丸、茶器を片附けに出来り

お丸「父子で何を巫山戯ていらつしやるんだらう、呑氣なお家だ」獨語きつ
つ、うる覚えの讚美歌を歌ひ〜入る、

○ガヤ〜と人聲、扉より兼子入來る、鞠子と藤原牧師、左右より肩を扶持す、

(兼子顔色青ざめ、髪も稍亂れながら)

兼子「もう大丈夫よ、死ねと云はれたつて死にはしません」と凄く笑ふ

鞠子「私はもう喫驚して駈上らうとするとお母さんが階子段の口から降り
て入らしやつたんだもの、二度喫驚してよ」

藤原牧師は黙つて睨いて來る、三人椅子に坐す

兼子「鞠子さんは、お母さんが死ねばよかつたと思つてるんだらうねえ」

鞠子「アラ……それ程なら何も周章て駈け出しはしなくつてよ」

兼子「だつて私は、先刻の談話を皆聞いたんだもの、母親なんか何うなつ
たつて構やアせんね」

鞠子眼色を動かして

鞠子「アラ立聞するなんてお母さんも卑劣よ……併し、矢つ張、親子は親

子なんでせう、お母さんが塔の上から落ちるのかと思ふと、我不知、夢中になつて駈出したんだもの』

兼子『私は他所ながら汝等に暇乞と思つて顔を出しかけると、あの話なんだから、實の娘にまであんな事を云はれるのかと、もう赫として一さんに塔の上へ駈け上つたの』

藤原牧師、沈んだ調子で

藤原牧師『そりやアあんまり無分別だ、信一人死んだのでも是程胸に深傷を負はされてゐるのに、此上、汝までが信一の後を追はうなんて、生残つた者は何うすれば善いと思ふんだね？』

兼子『鞠子の希望通り、貴方等二人は夫婦になつたらよかつたかも知せぬわ』と嘲笑する

藤原牧師『そんな人倫に外れた事をする私と思ふか？藤原をそんな人間と考へてゐるんか？』

兼子『だつて、鞠子は、そんな事は平氣でせう、私は今日迄、これ程理も非もない女だとは思つてなかつたが、眞實にもう呆れ果て了ひました』

(鞠子は伏目になつてゐる)

藤原牧師『鞠子はまだ子供ぢやアないか？何を云つたつて、然う本氣にするがものはない、逆上して死ぬ氣を出すなんて、あんまり大人氣ない』

兼子『ハイ、子供と云へば、随分油断のならん子供でせう、私も吝氣嫉妬なら、何も死ぬといふ程の馬鹿な氣も出しはしませんが、つく／＼考へると此世が恐ろしくなつて、神も佛もありはしない、一寸先はもう暗闇な氣持がしましたので、ふと信一の事を思ひ出し、跡を追うて死んで了は

うと、貴方様に餘所ながら暇乞の氣で扉を明けかけると、その時、あの話でせう』

藤原牧師と鞠子の視線は端なく合ふ

兼子「私は駆込んでサン、恥辱を搔せてやらうかとも思つたが、考へて見ると私は何だか貴方に愛せられちやア居なかつたやうだ、鞠子のいふ通り、貴方の愛は、娘の身上に濺がれてゐたかも知れんと思ふと、急にグツタリして一刻も早く死ぬ氣になり、夢中になつて塔の上に駆け上りました」

藤原牧師「私に愛せられなかつた？私の愛が足りないといふのか？」

兼子「ハイ、今から思ふと、何んだか眞實の夫婦ではなかつた様な氣がします、金平さんが云つた様に、新しい會堂を建てる爲めに、結婚をさせら

れたやうに思ひました、私は唯、會堂の犠牲だらうと、……然う思ふと、今迄欺かれてた氣がしましたので……私が身上を打明けました時も、貴方は喫驚なすつた限、些とも同情して下さいませんので……」

(藤原牧師、悔恨の色で)

藤原牧師「イヤ、私は何してよいか、譯が分らなくなつたのだ」

兼子「私はもう死ぬより外に、途がないと思ひました、それで何だか信一の幻が眼に見えて、塔の上へ連れて行つてくれるやうに思ひましたが、愈、塔の上に立つて、窓口から身を投げやうとしますと、下には人家の燈火が花やかに點いてゐます、何處かで賑かだな二味線の音が聞えます、鼻唄を歌うて通る者もあります、私は死ぬのが、急に忌になりました」

藤原牧師「フム……それでまア、よかつたのだ」

兼子「世間の人は皆、面白さうに、呑氣さうに暮してゐる、自分許今日迄苦み通して来て、今更身を投げて死ぬにも當るまい、離縁さへして貰へば、貴方の御名譽に係る筈も爲し、私は私で、好きな眞似をして生きて行けば善いのだ、牧師さんの夫人さんになつて、人に尊敬されて見度いといふ虚榮心を起したのが、斯うした不幸の原因になつたんだから、もうそんな氣はサラリと捨てて、残つてる金で、私は故郷へ歸つて安樂に暮さうといふ決心をしましたです」

藤原牧師「フム……離縁するといふのか？」

兼子「ハイ……その代り、會堂の建築費は御返却して戴かなけりやなりません、追々、返して下さつてもよござんす、今十年若ければ、金平さんと一緒に、海の上へ出て見ませうが、もう私は疲れました、此世に飽

きました、もう此上金儲けもしたくは思ひません」

藤原牧師「フム……」と考へてゐる

兼子「それから鞠子は私の自由にはなりません、本人の勝手にするが善ござんすが、同人の身上も、今迄は隠してゐました、可哀さうだと思つて……」

鞠子「エツ、お母さん、何んですつて？」と眼を睨る

兼子「汝に斯ういふ事を打明しては、一生の疵になると思つて、いろ／＼苦心して、今日まで隠して來ました、先刻、汝があんなに問ひ詰めた時、もこれ許りはと思つて云はなかつたが、今、云つて聞かせて上げやう」
鞠子「私の身上……隠してゐたんですつて？」と顔色を變へる

藤原牧師「一體何うした事なんだ？」

兼子「實は鞠子の父は、伊太利の貴族だと云つてゐました……そりやア伊太利の貴族に關係した事もあります、全く其人が父だといふ證據はありません、誰が父やら分らないのです、私がア、いふ商賣をし始めた當座に、父知れずに産んだ娘です、伊太利人か希臘人か、胤は分らないんです」

鞠子、喫驚して

鞠子「エツ、お母さん……私の父は分らないんですつて？」

兼子「然うです……墮胎せといふのを墮胎しないで、漸つと満足に産み落し、傳手を求めて育児院に預けてから、汝の爲に、お母さんは何れ丈苦んだか、知れなひんだよ、汝はいろんな高慢な口を利いてるが、矢つ張、汚れたお母さんの子だよ、お母さんが汚れてるなら、鞠子、汝も汚れて

るよ」

鞠子、母を見つめ、

鞠子「私の誇は無くなりました」ワツと泣いて、卓上に伏沈む

藤原牧師「でも伊太利の貴族の娘だといふのは、多少の心當はあるんぢやアないか？」

兼子「否え、唯、貴族の娘だといふのが、此の子の勵にもなりますし、後々の爲と思つて、始終、然う云ひ聞かせて、スツカリ信ずる様に仕込んだまでです」

藤原牧師「然う信ずるやうにしたのなら、今更本人にそんな事を云聞せんでも善かつたらう」

(兼子、男子らしい態度で)

兼子「私は此迄、卑怯でした、世間を怖れたり、外聞を憚つたり、恟々して此世を送つて來ました、これが私の不幸の原因でした、今日からは、私はもう昔のお兼で通します、私は私自身の木地を出して此世を送ります、人の肩に縋らうと思へばこそ、いろんな嘘偽が出る、自分の足で立つ日には、そんな心配は要りません」

(兼子、顔を振り上げ)

鞠子「お母さん、貴方は今強者よ、何も彼も自分しました、始め私の眼に貴方は小さく見えましたが、今貴方の目に、私はそんなに小さく映りませう、私は今、自分の弱者といふ事に気が付きました、斯うしては居られませんか、私も貴方の子です！」

藤原牧師「父不知といふ事は決して恥づるには及ばない、我は常に我だ、

Unique Ego——他に類の無き、獨特の存在たる事を誇れば善いんだ」

鞠子「ハイ、……もう親不知といふ事は恥とは思ひませぬ、私はコスモポリタン、スピリット——世界魂の子ですわ、基督の父は大工のヨセフでせうが、私の父は世界の靈——然う思つて誇りますわ」

藤原牧師「世界の靈！然うだ、自由と獨立との産んだ、唯一の娘だと信じたら善いんだ」

(鞠子、凄く笑つて)

鞠子「ハイ、然う信じます、併しそれを信ずる前に、私は自己秘密を白します」

(藤原牧師、驚き顔で)

藤原牧師「エッ、大秘密？」

(お衆も意外の顔色)

衆子「汝にも何か隠してゐる事があるといふのか？」

鞠子「ハイ、あります……驚きなさるでせうが、信一さんを殺したのは私です」

(藤原牧師、眼色を變へ)

藤原牧師「エッ、汝が信一を殺した？」

衆子「エ、汝、何うしてそんな事を云ふんだね？」

(鞠子、藤原牧師の前へ、ハタと跪づいて)

鞠子「申します、私は卑怯者でした……今迄、隠してゐました、貴方に愛相を盡されやうかと思つて、秘密にしてゐました」と聲涙に盈る

藤原牧師「ぢやア信一を、一體何うしたつてんですか？」と屹となる

鞠子「今迄は貴方に愛され度いと思つて、黙つてゐましたが、母よりも清くない私は今、貴方に憎まれ度になりました、隠さず申しますが、私は日常、信一さんが貴方に深く愛されてゐるのを嫉んでゐたのです、それでも信一さんは私に懐いて、姉さんくつて付き纏ふし、加之、聖書の中の記事を善く話して聞かせて、何うしても信仰の途に入れと云つて、少年に似ず、熱心に説き勧めてくれました」

藤原牧師「フム……」と頷く

鞠子「私は善く、信一さんに戯談つて、ミラクルだの、蘇生だの、いろんな難問題を懸けちやア苦しめました、或時ふと私と貴方と……私の思が適ふものか知ら、神様の不思議力があつて、自分の希望を適へてくれるなら、神様を信仰しやうかと思ひました」

衆子「汝は何時も自分の事許り思つてたんだ」

鞠子「ハイ、私は何時も然うですわ……神様を信仰しやうかと思つたのも、利己的動機ですわ、それで信一さんが、神様は目の前に在るやうに云ふのが、不思議に眞實のやうに思はれました、ぢやア一つ、信一さんで、神様を試して見やうといふ氣に、ふとなりました」

(藤原牧師、鞠子の顔を見て)

藤原牧師「フーム……」と嘆息する

鞠子「基督が高い殿堂の頂に立つて、悪魔が飛べと云つたのを拒んだといふ事が、聖書の中に書いてあります、信一さんが其章を読んで聴かせた時、偶と眼を上げて見ると半落成の高い塔が見えました」

藤原牧師「フーン……」と腕又する

鞠子「で、信一さんに、あの上に乗つて御覽なさい、足弱で、二階に上るのさへ人手を藉りてるやうな貴方が、あの、一番高い處へ上る事が出来たら……神を信じて、怖れないで上り得たら、私は神を信じやうと云ひました」

藤原牧師「それで、あの子があんな處へ上つたのか？」と起上つて、歩き出す

鞠子「始めは神を試みるんだと云つて、聴きませんでしたでしたが、ぢやア信一さんは信仰が足りないんだ、神様を疑ふんだと云ひました」

(藤原牧師、胸を打つて)

藤原牧師「オ、神様！……オ、信一！」

鞠子「信一さんは、ぢやア私は上る、神様は屹度守つて下さる……屹度、奇蹟を見せて下さる、私は姉さんを基督信者にするんだから、神様は屹

度守つて下さると云つて、とう／＼足架の階子を上り始めました』

藤原牧師『ア、……』胸を打つて『ア、……』と太息する

兼子『まア、可愛さうに』とハンカチーフを取出す

鞠子『始めは恐る／＼上りました、……併し次第に勇氣づいて、忘れもしません、いつくしみ深き主の手にひかれて、この世のたびちをあゆむぞうれしき』といふ讚美歌を小さい透明つた聲で唄ひながら、高く／＼上つて行きましました』

兼子『神様は守つて下さらなかつたんだ、神様は盲目……聲におなりなすつた』

藤原牧師『ア、そんなに純なる信仰に満ちたあの子を……神の子を神は殺した』

鞠子『ゆきなやむ坂も、おつべき谷間も、主の手にすがりて、やすけくすぎまし』と歌ひ切つて、一番絶頂へ上つて、莞爾笑つて一度私を見下してから、祈禱するやうに小さい手を上げたかと思ふと……俄にひどい物音がしました』とハンカチーフを顔に當てる

藤原牧師、凄い聲で

藤原牧師『ア、神様は残酷だ……基督を昔十字架に釘付けた……今度は信一をあの高い塔の上から……神は死んだ……慈愛の神は死んだ』と狂はしく駆け廻る

鞠子『私は信一さんを殺しました、私はもう此家には居られません、併しお母さんは何卒此處に置いて上げて下さる』

(兼子、詔氣鋭く)

兼子「イヤ、私はもう虚偽の生活はしません、私は私の思ひ通にするまでです」

藤原牧師、頭髪を振りく

藤原牧師「虚偽の生活……虚偽の生活……皆嘘だ、皆偽だ、他の一切を疑つても、今日まで天地の大愛を疑はなかつた、疑ふを欲せなかつたが……ア、基督も欺かれた、私も欺かれた、汝等も欺かれた、信一も欺かれた……欺かれた、欺かれた、あの高い塔……あの新しい會堂』と窓を明けて、屹と睨み、『悪魔!……神の假面を被つた悪魔!今日、唯今から、もう汝の支配は受けぬ、己は己だ……藤原覺一の神は藤原覺一自身だ……悪魔!』と罵り、又よろ／＼として窓に倒れかかり、絶叫的に『アラ……會堂の黒い屋根に女の顔が見える、……アラ女の顔が此方を見てゐる、スフキング

ス!……スフキングス!』

兼子と兼子近寄つて、肩を扶け

兼子「お父さんく〜!」

兼子「貴方、確りなさいませ!」

(幕)

第三幕

前と同室

窓のカーテンの間より、朝日の光洩れ入る、据ランプ、卓上に煤ぶる、

(藤原覺一、卓上に片足かけ、肘掛椅子に倚掛つて、洋書を擴げて見てゐる)

藤原牧師 『Whatever the creator may be, it is certain that he is no gentleman... 天地の創造者は紳士ぢやアないんだ、新しい會堂の創造者が、卑劣なビュリタんと、敬虔な女郎との結婚した不思議な夫婦だつたのも、自然の反語だらう、ウキリヤム、ゼームスは我を欺かない』と、ト
ンと卓を打つて瞑目、沈思してゐる

兼子、頭髮を撫で附けながら入来る

兼子 『オヤ、貴方どうくあ、あの儘お寝みなさらなかつたんですか？』

(藤原、凄く笑つて)

藤原牧師 『夜通し、神と角力を取つてゐた、而してヤコブの様に、己は神を投げ附けたんだ』

(兼子と凄く笑つて)

兼子 『貴方は男子だから、そんな強い力がおありなさるが、私は女ですもの、何んだか怖くてランプを點けて寝てゝも、一寸先は闇の様な氣がして、一寸も寝付かれませんが、曉方とろくとするかと思ふと、深い地獄の底へズン／＼落ちて行くので、アツと聲を立てると眼が醒めました、もう冷汗でびつしよりでした』

藤原牧師「鞠子はまだ眠てるのか？」

兼子「もう死んだやうになつて、善ツく眠込んでゐます、彼も餘つ程疲れたと見えます、貴方もあんまり頭を使つてはいけません、少しお寝みなすつちやア何うです？」

藤原牧師「別に眠くも無い、それに潮君がもう来る頃だらう、私が逢ふから」

兼子「然うですね」と置時計を見て「ランプを消しませう、ホヤがこんな黒くなつて……」吹き消して「戸外はもう明るくなつてるのですよ」と窓のカーテンを揚げかける

藤原手を振つて

藤原牧師「ア、其處はその儘にして置いてくれ」

兼子「何うしてとす？薄暗いぢやアありませんか？」

藤原牧師「そこを明けると、悪魔の影が翳すから！」

兼子「エ、悪魔の影ですつて……會堂の影法師が怖いんですか？」

(藤原、頷いて)

藤原牧師「何だか謎をかけられるやうだ、六づかしい、難問題を出して己に解け〜と迫られるやうな氣がするから、頭が痛くなる、そこはまアその儘にして置いてくれ」

(兼子、不平顔で)

兼子「ヤコブの様に、神様を投げ附けたつて云つてる人が、矢つ張會堂の影法師を怖がるんですか？随分氣が弱いんですねえ」

(藤原、苦悶の色で)

藤原牧師「私は一夜の中に、舊い理想は皆破壊した、大破壊をやつた、それ

で體の筋がもう萎え切つてゐる、私の神經は頭の先から、足の指先まで、云はゞまア樂器の糸の様に慄へてるんだ、この身體のアトムの一つ一つが、恐ろしい響を出して鳴てゐるやうだ、革命が起つてゐるんだ』と兩手で額を押へる

(兼子は、藤原の面前に椅子を寄せて、腰かけ)

兼子『もう、この上、そんなに何も心配する事はないでせう、私は昨夜も申しましたやうに、故郷へ歸る決心をしましたから、この後、貴方の名譽を汚す事はないでせう、鞠子は鞠子で、何か思案を定めてるやうな事を云つてましたからね』

(藤原、顔を上げて)

藤原牧師『汝が故郷へ歸るんだつて？、そんな馬鹿な事をさせるものか、汝

は何處までも藤原覺一の妻だ、昨日迄の藤原牧師夫人としての汝は虚偽の生活をしてたかも知れん、私も然うだつた、併し今からは一箇の人間たるこの覺一の妻として、汝も眞の生活に入らなけりやならんのだ』

兼子『貴方が牧師上りの、平凡の人間なら、私は女郎上りの、平凡の人間ですもの、救はれて神様の子になれると思へばこそ、私は貴方と結婚もしたのですが、それが虚偽の事でしたら貴方と私と夫婦になつてゐるのは、將來も權衡が取れませんよ』

(藤原牧師、諭すやうに)

藤原牧師『汝はこれから神様なんて者を信用にせず、唯自分の足で立つて、私を助けて行つてくれれば善いんだ、私ももう天地間に他に依頼すべき者は無い、自分の足で立つて、汝を力にして歩いて行かう』

兼子「私が貴方の力になれませうか？ イヤ却て貴方の足に錘を括り付けるやうなもんでせう、金でお助けする事も、もう忌です、私は所持金の残つてる中、故郷へ歸ります、會堂の方の金も仕末が附き次第送つて下さいまし、それは貴方にお頼みして置きますよ」

(藤原少し勃として)

藤原牧師「私は何處までも、汝の金に眼を付けてると思ふんか？」

兼子「ぢやア私が何うして、貴方をお助けする事が出来るんですか？」

藤原牧師「助けやうといふ精神さへあれば助け得るんだ」

兼子「私のやうな高が婦人一人、助けるも助けられないも、そんな事は貴方の前途に少しも關係しないぢやアありませんか？」

藤原牧師「……」沈黙して手を額に當てゐる

兼子「それに、これから貴方は何をしてお心算でせう？ 醜業婦救済といふのも、神様の救ひに入れるといふ希望があつたればこそ、私も喜んで企てたのです、ぢやなつて考へて見ると、夢が醒めました、一旦女郎をしたものは矢ッ張、女郎です、私の根性の汚くつて、自分でも呆れる程勘定高くなつてるのも、矢張そのお庇蔭です、成る程、私は些とも救はれてはゐませんでした」

(藤原、顔を見て身慄する)

藤原牧師「汝は大膽になつた」

兼子「私は何んだか盲の眼が明いたやうに思ひます、夫婦なんていふのも、善い加減な名でせう、母子といふ仲さへ、終末には一人々々になるんですもの、鞠子が云つてる様に、人間は矢張、一人々々のものでせう、然

う思ふと何んだか恐くなつて、身柱寒くなりますが、併し成るやうにしか成らんのだから仕方がありません』

藤原牧師「昔は私が説教した、今は反對に汝から説教を聴かされる、成る程、私も今、これから何うせうといふ目算は無い、唯、何かしたい、所謂善事でも、悪事でも活きてる以上、何かしなけりやならんのだから、汝も暫らく私と一緒に踏み留まつてゐてくれ、夫婦といふ關係が虚偽なら虚偽でもよい、人間は皆獨なら獨でも構はないが、何か共同事業……共同事業をやる一社員としてだ、金には限らないから、發起者の一人、協同社員の一人としてだ』

兼子「目的も無いのに、共同事業だの、社會的事業だのつて、私には譯が分りませんわ』

藤原牧師「その中、譯が分つて來る、暗の中でも悶いて居れば何か握るんだ、前後も分らぬ暗闇に、ぢつとしてゐるのは何よりも怖いもんだ、生きながらの死だ』

兼子「そんなにして悶いてるよりも、死んだ方が優かも知れませんわ、私はまだ何も忌ですから、田舎に引込んで、したい三昧して、それから死ます』

藤原牧師「サアそれだ、私のいふのはつまり、その仕度三昧をしやうといふのだ、それも汝の考へてるやうな世間並の眞似ぢやア面白くない、この天地の創造者が人間をオモチャにして遊んでゐる、その向を張るやうな大袈裟な事を何か一つ爲出かさうといふ企なんだ』

(兼子、淋しく笑つて)

兼子『それでももう、新しい會堂と高い塔はお廢止なんでせうね、あんなオモチャは眞實に贅澤過ぎて、後腹が疾める許りですよ』

(藤原、苦笑し)

藤原牧師『天地の創造者はセントルマンぢやア無かつた、今度は何か、ゼントルマンらしく無いオモチャがありさうなものだ』

兼子『私のオモチャはお金です、もうこれさへあれば他に何にも要りませぬわ、貴方は一人で、何か貴方のオモチャを探したら善いでせう』

藤原牧師『イヤ、その金の欲しいのも、何かオモチャが買ひ度いからなんだ、二人で金を儲けて二人でオモチャを探した方が善いだらう、パラダイスを逐はれた時も、アダムとイヴは二人連れだつたよ』

(兼子、沈思して)

兼子『でもあの二人は、パラダイスに居る時から眞實の夫婦でしたらう』

藤原牧師『唯男子と女だつたのサ、今も世間に眞の夫婦といふものは無い、唯、男女の關係許りだ』

兼子『貴方はそれで世間が立つて行くと思ひますか？』

藤原牧師『昨日までは夫婦といふ事を信じた、併しその美しいヴェールを取つて見ると、唯、情慾の關係しか何んにも無かつたのだ、又、それで充分なのだ』

兼子『ぢやア人間と獸類との違は何處にあるんでせう？』

藤原牧師『人間は惡智慧の附いた獸で、獸は惡智慧の附かぬ人間なんだ、その惡智慧といふのが、ヴェールを發明したり、オモチャを工夫したりするんだ、もう私等にはヴェールは要らん、唯、オモチャが欲しい』

(兼子、考へに沈んでゐる)

(鞠子、扉を明けて)

鞠子『オモチャが澤山舞ひ込んでよ』と郵便十數通を持運んで来る『お早う、齒を

磨いてゐると、婦人救濟會は此方ですかつて、投げ込んで行つたの!』

藤原牧師『お早う……ヤア、随分澤山の手紙だね』と受取つて、一つ、一つ、表書

を見つゝ卓上に置く

兼子『皆、婦人救濟會の宛名ですね』と取つて眺めてゐる

(鞠子、走り寄つて、窓のカーテンを引上げながら)

鞠子『もう戸外は日がカン／＼さしてよ、暗いぢやありませんか?!』

(藤原、封を切りながら)

藤原牧師『ア、其處はその儘にして置いてくれ、あんまり朝日が射し込むと

さげないから』

(鞠子、構はず)

鞠子『だつて、油煙臭いんですもの、毒ですからね』と窓の戸まで明け放す

兼子『よく明けてくれたのね、矢ッ張、若い者でなけりや駄目です、好い空

氣が入つて、氣持がせい／＼するわ』

鞠子『今日は會堂が何んだか活きてゐる者のやうに見えるわ』と眺めてゐる

(藤原、眩しさうに)

藤原牧師『眼がヂカ／＼していかん』と少し脊を向き替へ『フム、あの廣告がも

うこんな利目があつたのか……私事、男子に欺されて苦界に陥り、

今日にては身の拔差ならず、誠に誠に辛き月日を送り居申候、何卒御仁

恵に依り、此の境遇よりお救ひ出し被下候はゞ、生の父母にも優る御高

恩と、難有、心底に刻み附け可申候……フム、これは自由廢業の手續を
してくれといふんだ』

(兼子、他の一通を眺め)

兼子『……これは娼妓上りで、世間の者が相手にしてくれぬから、今度は田
舎へ酌婦稼に行かうといふ婦人から來たのです、今日お訪ねするから、
他に何か正道の職業の世話をして貰へまいかといふのです、親と思ふか
らと、繰返し／＼書いてあります、可哀さうですね』

藤原牧師『フム……』と頷いて、他の一通を取り黙讀して、『……これは、淫賣十犯
で、昨日漸く出獄したと書いてある、繼親に苛められて、仕方が無いか
ら斯ういふ商賣をして、その日／＼を暮してるといふんだ』

(兼子、太息して)

兼子『廣い世間には随分いろんな辛い目に逢つてる人もあるもんですね……
私等を親と思ふといふ人が、こんなにあるのかと思ふと、何だか逢つて
見度いやうな氣がします』

(藤原、他の一通を讀んで)

藤原牧師『此れは唯、來た上で身上話をすると書いてある、差出人は神田區
内の女學生とあるが、何か仔細のありさうな事だ』

兼子『女學生の墮落したのが、一倍氣の毒でなりません、支那人の妾なんか
が、市内には随分あるさうですからね』

藤原牧師『一寸とした小冊子を蒔いた丈でも、こんなに澤山の申込だ、斯う
して見ると神の捨てた者を私等二人で拾つてやり度い』

(兼子、思入ったやうに)

兼子『然うですなえ、親を親とも思はないのである子もあるのに、見ず知らずの私等を親と思ふだの、姉と頼むだのと云はれて見ると……假令嘘にでもそんな事を云はれて見ると、私は又何だか出来ない迄も世話がして見度いやうな氣がします』

(兼子、振向いて笑つて)

鞠子『オモチャにするんでせう』

(藤原も笑つて)

藤原牧師『活きたオモチャの卸問屋を始めるんだ、鞠子も手傳はんか?』

鞠子『私のオモチャももう來さうなもんですわ、餘所の手傳なんか眞平よ』

兼子『鞠子は船をオモチャにして遊ばうといふんでせう、それも勝手ですわ』

(藤原、眼を睨り)

藤原牧師『エ、鞠子が……潮君と一緒に往かうといふ氣を出したのか?』

鞠子『老人じみた人は、老人じみた眞似をして遊ぶのが善いわ、若い者は若い者らしい事をして遊ぶのが面白くつてよ』

兼子『この子に何を云つても駄目です、吉岡さんの奥さんに行くより、海に入つて死ぬ方がいくら増か知れんていふんですから、もう本人の自由にさせませう、それよりか、私等はその新しい子供等に、兎に角逢つて見ませう、貴方は信一を亡し、私は鞠子を失ひました、二人の子供の代りに大勢の子供を儲けたら、差引勘定に損はありません』

藤原牧師『それやア信一は今更、取返しが付かぬから仕方ないが、鞠子まで失ふにも及ぶまい、吉岡へ無理に嫁けと云ひはせん、鞠子が一番の長

姉になつて、大勢の娘等に氣を附けてやつてくれちや何うだらう？」

兼子「信一に、塔の上へ上れと云つた人ですもの、そしたら皆の娘を引張つて、海の上へ行かうといふ位が落でせう、貴方は皆の者を出稼の醜業婦にする氣ですか？まさかそれが新しい救済でもありますまい」

鞠子「否え、お母さん、生じつか、人の奥さんにしたりなんかするよりは……吉岡さんのでもね、ホ、ホ、ホ、一旦泥水を呑んだ者は、矢張泥水で育てるのが眞の救済といふものよ、皆の者を海外へ出稼させるなんかは善い思ひ附ぢやなくつて？それなら私、賛成よ！」

(兼子、勃として)

兼子「汝が突飛な考へを持つて生れ附いたからつて、世間の者が皆、突飛な考へを持つてると思つたら間違よ、私は自分の娘等にそんな眞似はさせ

やしなす』

(鞠子、笑つて)

鞠子「だつて、マサカ、もう讚美歌を歌はせたり、祈禱の眞似をさせたりして、喜んでる事も出来ないでせう、救済と云つたつて、パンを得る途を教へてやる他にないぢやアありませんか？」

兼子「ミシン縫や、ハンカチーフの縁縫や、裁縫針仕事一式教へたら、それで喰つて行けぬ事はありません」

鞠子「(鞠子笑つて) 拙い針仕事より、巧い御客取の方が、本人の爲にも、世間の爲めにもなりやしなくつて？」

兼子「汝は勝手に汝の熱を吹くが善いサ、私等は私等の考へがあるよ」

藤原牧師「然うだ、私にも亦私の考へがある、併し鞠子が潮と一緒に、海へ

行かうといふのは私には不賛成だ』

鞠子『お父さん、鞠子にも又鞠子の考へがないと思つてゐるんですか？』

○戸口の鈴鳴る

兼子『ヤ、屹度潮さんでせうよ』と立つて迎へに行く

(藤原はしきりと手紙の封を破り乍ら)

藤原牧師『……フム……これは、妾をしてたのが病身になつて追ひ出されて、今木賃宿に轉がつてゐるといふのだ……ハ、尋ねて來るとあるな……鞠子』と振向いて『汝潮と一緒に、海の上へ行つて、それから何うする氣か？』

(鞠子、沈痛な聲で)

鞠子『何うすると云つて、それが私の運命だと思ひますから』と悄然となる

藤原牧師『汝の意志ぢやアないんだな？』

鞠子『私の意志は、私の運命の爲に碎かれましたわ……もう何んにも云つて下さりませすな』顔を反けて、涙を拭く

(藤原、額を抑へて)

藤原牧師『汝の運命……そして私の運命……』と太息する

○潮金平、兼子と共に入來る

兼子『貴方、潮さんが入らつしやいました』

(藤原、起上つて)

藤原牧師『君が潮君ですか？僕は藤原です、始めまして』と手を出す

(潮、握手して)

潮金平『始めまして、御見知り置下れ』

(鞠子、快活に)

鞠子「よく入らつしやつてね、私、待つてましたわ」

潮金平「然うですか、それは有難う」と微笑して點頭く

藤原牧師「サア、まア何卒御掛け下さる」

潮、脇掛椅子に倚る

藤原牧師「兼子へ御相談の事は僕が委細を聞きました、僕から御返答しま

す、兼子はお茶を持つて来い、鞠子も行つて手傳つてお菓子か何か……」

鞠子「お菓子!? ……それよりか、潮さんには何か菓物が……南洋から来た方ですから、バナ、か何か取つて来ませうか?」

(藤原、頷いて)

藤原牧師「オ、それも善からう」

(潮、空マツチをポケットに探りて)

潮金平「オ、火を一つ頂戴しませうか」

鞠子「然うでしたね」と駈入る

兼子も入つて行く

潮金平「兼子さんが一切、打明談をしたといふのなら、君に御相談せう、二

千圓程、黙つて僕にくれ給へ?!」

(藤原、沈着な口調で)

藤原牧師「昨日迄の藤原なら或は御周旋すると云つたかも知れませんが、今日の藤原はもう宗教信者でも無い、牧師でも無い、又所謂徳家でも無い、ありの儘の藤原です、一切外界にオーソリチーを認めない藤原です、君がオーソリチーを以て何を申込んで来られやうと、謝絶します」

(潮、驚愕の色)

潮金平「エッ、牧師でもない、道徳家でもない、ありの儘の藤原君!? 君は基督を捨てたといふのか?」

藤原牧師「基督許りぢやアない、神を捨てました、僕は自由人です! 神をも人も、亦社会をも怖れません、自己を審判く者は自己の外には無い、今日から僕は僕の此の兩足で大地を踏んで立つてゐるんです」

潮金平「君が神を捨てた?!……フム……僕のような超人間になつたといふのか? それは面白い、改めて君と握手しやう」と起ち上つて握手する

(鞠子、マッチを持来る)

鞠子「バイブ皿はなくなつてよ」

潮金平「難有……」と一服吹かし「一寸お嬢さん、貴方も一服あやんなさ、

貴方はいけるのでしたから」

鞠子「難有!」と、シガレットを啣へる、潮、マッチを擦付ける、鞠子、スバ〜と煙を吹かしながら出て行く

潮金平「フム……とう〜君も心の眼が明きましたか? 今も来ながら、あの、新しい會堂を見て、私は可笑くつてならなかつた、あの高い塔も一種滑稽な感じがして、輕業師の舞臺道具か、山雀の藝當位に思へて、片腹痛かつたが、ぢやア君も僕と同じ様に、愈基督教を見限つたんだね、イヤ、然らなくちやアならんだらう」

(藤原、悲痛の顔色で)

藤原牧師「僕にはあの會堂が新しく建てられたスフinksだ、天地間の大きな謎だ、君には唯滑稽な見世物としか思へぬか知れんが、僕にはあの

黒い影法師さへ残酷な鐵の鞭でこの胸を打ちに来るやうな氣がして、正面には見て居られぬ』と横を向く

潮金平 『イヤ、當分は誰も然うだらう、僕も深く君に同情するよ、僕だつて、元は加州で牧師をやつてゐたんだ、君は慥か同志社出身ぢやアなかつたか？』

藤原牧師 『然うだ、君も同志社に何か縁故があるのかね？』

(潮、苦笑して)

潮金平 『僕は同志社の第四回目の卒業生だ、潮と云つたら、在學時代にはこれでも信仰家の隊長だつたよ』

(藤原、驚きの色)

藤原牧師 『エッ、君が然うか……潮？潮？……ハ、ア』と膝を拍ち 『ぢやア聞

いた事がある、先輩に聞いた事がある、何んでもリヴァイヴアル運動を起した事があるとか、あの潮が君か？』

(潮、冷やかに笑つて)

潮金平 『然うよ……然ういふ事もあつた、學生が懦弱で、皆、信仰も何も無くなつた時、僕は神から啓示を蒙つた様な氣がして、夜中に起上つて愛宕山へ駆け上り、あの深い杉林の中で一日一夜、斷食して祈禱した事もある、今から考へると一種の狂氣サ』と煙を吹く

藤原牧師 『兎に角、そんなに熱心だつた君が何うして信仰を捨てたんだ、何か深い理由があるんぢやアないか？』

(潮、悲痛の色で)

潮金平 『己は神を愛した爲めに却て神に憎まれたんサ、イヤ、神なんて者が

實際在るのなら、己なんかには最先幸福を與へてくれる筈なんだが、お生憎様だ、まア己程不幸な目に逢つたものは無からうね」

藤原牧師「君もそれ程不幸な目に逢つて來たのか？ 話して聞かせ給へ」と身を乗り出す

潮金平「君なら同情して聞いてくれるだらう、愚痴をこぼすんだと笑つてくれ給ふな、第一、己は基督教を信じた爲めに、頑固な老父の不興を蒙つて、地方では相當の財産家の長男に生れながら、一文の金も譲つちやア貰へない、皆、異母の妹の野郎の名義になり、他所から養子を貰つて、己は自ら願つての廢嫡サ、その當時は神の爲めに、何事も捨てるんだと思つて、天晴れ善事をやつた氣でゐたが、今から思へば馬鹿の骨頂だつたよ」

藤原牧師「フム……第一に、財産を抛つたんだな」

潮金平「それから己は熱心に傳道をやつて、南は九州の果から北は北海道くんだり迄駆けずり廻つてゐたんだが、旭川では同じ基督教信者の大商人の一人娘に思はれて、婿になつてくれといふ申込を受けたんだ、洋行するなら費用は幾何でも出すから是非來てくれといふ事だつたが、其條件が第一、癩に障つて、苟も神の旨を傳ふる者を商品扱ひにするかと、キツパリ辭退つて了つた、聞けばその娘は後で肺病になつて、ブラ／＼してゐたといふ事だつたが、今から思へば己は愈大馬鹿だつた」

藤原牧師「そんな事もあつたのか？ 神に熱中して來て、人間の事に冷淡になる時代もあるもんだ」

潮金平「それから僕は兎に角、年來の志望だからアメリカへ渡つたんだ」と

シガレットを附けかへ「何うだ、君一服附けて聞き給はんか？」

(藤原、手を掉つて)

藤原牧師「イヤ、僕は吸はないんだ」

潮金平「吸へないんか？遠慮する事はないよ」とスバク吹かしながら「己はアメリカでは、加州の少し田舎で日本人教會の牧師をやつて、傍、神學校通ひをしてゐたんだ、その時、教會の隣家に住んでゐる白人の未亡人の一人娘と懇意になつて、僕は始めて、戀といふものを感じたんだよ」

藤原牧師「フォームン……それが君の初戀だつたのか？」

(潮、苦笑して)

潮金平「忌々しいが、まア初戀といふもんだらうね、併しそのお庇で、僕は婦人が蝮蛇の裔だといふ事を知つたんだ、思ひ出しても實に苦痛だ」と

胸を押へて俯向く

藤原牧師「戀が成就しなかつたのか？」

(潮、頭を掉つて)

潮金平「イヤ、然らぬやアない、二人は遂に結婚式を擧げて夫婦になつたんだ、お互に思ひ合つて、神も許し給うた眞正の夫婦だと思つたんだ」と
頭を押へて暫し無言

(藤原、促すやうに)

藤原牧師「それから何うした？」

潮金平「一年と経たない中に、女は己を嫌ひ始めた、いろく論したり、宥めたりしたが、一向冷淡で、愛情が醒め切つてゐる、結末には、姦通してるといふ噂が薄々己の耳に入つたんだ」と太息を吐く

藤原牧師「エッ、姦通……？」

(潮、聲色、慄へて)

潮金平「始めは己も半信半疑だった、イヤ、己の妻が……これ程神を信じ、
キリストの爲めに一生を捧げてる者の妻が、姦通するといふ事は不可能の事
のやうに思つて、何うも信ずる氣になれなかつた」

(藤原、沈痛な聲で)

藤原牧師「然うだ、僕は善因善果は信ぜなかつたが、善人に悪い報いが來や
うとも中心からは思へなかつた、人は信ずるが、神は欺くんのだ」

(潮、聲を慄はせ)

潮金平「ウム、己も神に欺かれた、……偶とした事から、其現場を見附けた
んだ、もう前後の思慮もなく、護身用のピストルで二人を打殺した、相

手がニグロなんだから君、驚くぢやないか」

藤原牧師「エッ……相手が黒人!?……それは又何うしたんだ？」

(潮、苦笑して泣呃くる如く)

潮金平「黒人は君情慾が最も發達してるんだ、始めは日本人、次は黒人、女
の好奇心から男子は情慾を充す器械に使はれたんさ、……己はもう基督
も何も無くなつて、自殺するのも馬鹿々々しくつて、加州の奥へ逃げ込
むと、君の今の細君、お兼さんに出逢せたのサ」

(藤原、長き息を吐き)

藤原牧師「フーン、然ういふ譯だつたか、君もヨブのやうに苦められたんだ
ね」

潮金平「今日のヨブは氣短になつた、昔程悠長で、辛棒強くはなくなつた

よ』

○兼子入来る

兼子「何うも湯が沸かないで、お待遠様、鞠子は自分で行つてまた歸りませ
ん、近隣の八百屋には見附からなかつたのでせう」牛乳器に添へて紅茶を出す

潮金平「今加州で逢つた話をしてるんです」

(兼子、思な顔して)

兼子「然うですか？あんまり悪口を仰やつては忌ですよ」

潮金平「そんな御心配は要りません、イヤ、藤原君がそれで貴方に愛想盡か
したら私が貴方を譲り受けやうと思つてるんですが、何うですか？」

兼子「私は品物扱にされちやア困ります……それでもまア思召丈は難有う
ございますが、私は海の上ではとても辛棒が出来ませんよ、願下にして

置きませう』

(潮、笑つて)

潮金平「矢ッ張、黒土にならなけりや氣が濟まんのですか？島國根性の者は
相手になりませんな」

兼子「鞠子なら、貴方のお伴がし度いとか云つたやうですよ、あれは、海が
好きださうです」

(潮、眼色を動かして)

潮金平「鞠子さんが、本氣でそんな事を云つてましたか？」

(藤原、遮り)

藤原牧師「兼子はまア暫らく彼方へ行つておいで……朝食でも濟まして來た
ら善いだらう」

衆子「ハイ……御邪魔をしまして、済みません」と下る、

(潮後を見送り)

潮金平「鞠子さんが一緒に来て呉ると云たんでせうか？」と考へ込む

藤原牧師「あれは子供だから口から出任せを云ふんでせう、信用になりはしないです……それよりか、君はアメリカで、よく殺人罪を免かれたもんだね」

潮金平「方々へ身を替はして巧く捕まらなかつたんだが、神を信仰してる時悪い事をしたら必ず罰を受けると説教したのが、嘘だといふ事が知れてから、氣を付けて見ると何んだか善い事をしてる奴が零落れて行く、悪事を働いてる者が却て榮える、天地の神の本體は悪魔に相違ないと鑑定を付けて、僕は斯うして悪魔の使徒になつたんだ、人間も變れば變るも

のサね」

藤原牧師「僕も昨日と今日とは別世界に住んでる人の様だ」と起ち上つて徜徉する、

潮金平「今度は君に伺ひ度いが、お兼さんと君と相愛したといふのは世間手前だらう、君は持參金に眼が暮れたんだらう」

(藤原、手を掉り猶も動き廻りながら)

藤原牧師「僕は中介者の米國の宣教師の言葉を信用した、その宣教師も無論欺かれてたんだが、兼子は伊太利の貴族の未亡人で、遺産を貰つて歸つたんだといふ事をスツカリ信用したんだ、イヤ、穿鑿するのは罪惡だとさへ思つて、神の命令と信じて娶つたのだ、その持參金も神の御旨を果す爲めだと思つたからだ」

潮金平「ハ、ハ、ハ、神の御旨といふのは、例の會堂の新築だらう、君は會堂を造る爲めに、愛の無い結婚をするといふ事を何んとも思はんかつたのか？」

(藤原、立留つて)

藤原牧師「結婚には世間の所謂戀愛が無くとも善い、夫婦は一體となつて、何か事業を仕遂げる爲めのものだ……僕は第一の結婚で、信一といふ脾弱な子供を造つたが、第二の結婚では、新しい、堅固な會堂を造らうと思つたのだ、今は何方も無意味になつた」と髪を掻き切る

潮金平「ぢやア結婚で事業をせうといふのが、牧師時代からの君の考か？」

(藤原、沈痛の語氣で)

藤原牧師「僕の第一の結婚は無論純粹の戀愛から成立たんだ、併し結婚後妻

は始終弱くて肺病を起し、生涯己の重い軛となつた、そして産れた子供も殆ど病氣許りし通しだつた」

潮金平「ぢや君も結婚前の甘い戀愛の夢が夫婦になつてから醒めたといふのか？」

藤原牧師「己は戀愛をあまり高く買ひ被つて、肉體の健康も、地位も財産もそんな物を眼中に置のは罪惡だとさへ思つたんだ、すると君、輕蔑してた者が結婚後に手酷しく己に復讐した、己は長らく病人の妻の看護人としての生涯を送つてゐたんだ」

潮金平「己は情慾を充す器械にされ、君は肺病人の看護に備はれたのか、似た境遇だつたな」

(藤原、再び椅子に倚り)

藤原牧師「第一の情許りの戀愛結婚に失敗した僕は、第二には智許りの、打算的の結婚をしたんだ、而して前にも後にも、結局は皆破産だつた」と額を抑へる

(潮も太息して)

潮金平「……それでも兼子さんにはまだ財産がある、破産といふ處には行なからう、僕もこの上、金を寄越せとも云へない、何處か餘處を捜さなければアなるまい」

(藤原 顔を上げ)

藤原牧師「餘處を捜すと云つて、心當りでもあるのか？」

(潮 笑つて)

潮金平「富豪の金庫へ強借と出かけるのサ、最後の手段が最上の手段だ、こ

れなら何も譯はないんだ」

(藤原 驚きの色)

藤原牧師「エ、君はそんな事までやるのか？」

潮金平「イヤ、その方は平氣だ、斯うして素面で、騙りの眞似なんか一番骨が折れるのサ」

藤原牧師「フーン……成る程、悪魔の使徒になり了せたものだ！」

潮金平「天地の大悪魔王は、もつと酷い悪事を働いてるぢやないかハ、……」

靴子入來る、バナ、を、手にしてゐる

靴子「少し遠方迄買ひに行つたの、大さう失禮してよ」

藤原牧師「何うも御苦勞だつたね」

潮金平 『私の爲めにそんなに心配して貰つちや恐縮しますね』

鞠子 『否、私が好きでした事ですよ、バナ、なんか見ると何だか南洋らしい空気の匂がするでせう、併し此は小笠原島から来たんですつて、まア、一つ召上つて！』

(潮、房をちぎりながら)

潮金平 『併し、これなんかオモチャのやうなものですよ、南洋の島々へ行くと、この五倍がけも、六倍がけもある大きなのが、實つてるです』

鞠子 『ホ、、、、ちやア私のオモチャはバナ、なんでしたかね』と藤原を見る、藤原も笑つてゐる

(潮、合點のゆかむ顔色で)

潮金平 『お嬢さんのオモチャですつて？』

鞠子 『否、？……あの、眞實は、私は船がオモチャに欲しいんです、貴方の乗つて行く船がですよ』

(潮、顔を見て)

潮金平 『船が？……破れた船がですか？』

鞠子 『破れた船なんか仕方が無くつてよ、貴方は新しい船が買へないんですか？乗つて行く船は無いんですか？』

潮金平 『そりやアありますとも……此家で金の話が付がなくなつても、何うにでもなりますよ、可哀さうに、魚が陸に跳ね上つたんだア違ひます、龜が甲羅を干しに來たんだと思つて、下さい、自分の乗つて行く船が無かつたら、何處かそこらで拾つて行きますよ』

鞠子 『然うでせう、それで安心しましたわ、ちやア私もその船に乗せて行つ

て下さる、善いでせう』と顔をのぞく

潮金平『お嬢さん、本気で然う仰るんですか？あの、お氣が向きましたか？』

藤原牧師『そんな空想は止したらよからう、眞實の海は詩や繪の中の海のやうに、美しい、愉快なものぢやアない、潮君もよく云つて聞かせてくれ給へ』と、メナ、の皮をむしる

鞠子『そりやア海許りぢやアないわ、眞實の世界は詩や繪の中にあるやうな美しい愉快なものぢやアないんだもの、私は行きます、海の上へ行きます、お父さん、私は信一さんの仇だから憎んで下さい、行けと云つて下さる』潮を見て『潮さん、貴方連れて行つて下さるんだわねえ、誰が止めても私は私ですからね！』

潮金平『イヤ、眞實にお嬢さんが行く氣なら、藤原君が何と云つても、又お

母さんが何う云はうが、私は喜んで連れて行きますよ、貴方は眞實に決心してゐるんですか？』

鞠子『私は自分の眞實に信じてゐる事しか云やアしませんわ』

(潮、頷いて)

潮金平『承知しました、ぢやア云ふまでもなく私の妻としてとせうね』

(鞠子、後退りして)

鞠子『否……私は人の妻になんかなる程なら、海へ行かうとは云ひませんわ、勿論貴方の乗つて行く船の女王としてとす』

潮金平『船の女王……私はその船の王ですが』

鞠子『ぢやア私はその船の女神の座を要求します、貴方も昨日然う云つたぢやアありませんか？私とその船の主になるんでなくちやア忌です』

潮金平「貴方に舵は取れんでせう、星の座は分らんでせう、海圖が會得出来んでせう？」

(235)

鞠子「それは船長、水夫共のする仕事でせう、私は中央の帆の蔭に坐つて、毎日碧い海を眺めて、考へたり、詩を書いたり、人間の事を忘れて、海の精靈になるんですわ、海の精靈と結婚するんですわ」

(潮、笑つて頷いて)

潮金平「ヤ、それは貴方の自由に任せませう、いかにも船の女神として、貴方を新しい船にお迎へします、今日から貴方は私等の女神！仲間の者も皆喜んで、祈禱を捧げる事です、私の第一の祈禱は握手です、何卒握手させて下さい」と起上る

(鞠子、笑つて握手する)

藤原牧師「何うしても行くんか？」 太息する

鞠子「お父さん、貴方もオモチャに飽きましたら、私の船に来て御祈禱なさいよ、新しい空気が青い浪とが、貴方に洗禮を授けますよ」

潮金平「これから藤原君は、何をオモチャにするんですか？」

(鞠子、笑つて)

鞠子「お父さん等は、醜業婦救済會がオモチャですつて！」

藤原牧師「醜業婦救済會？……ア、そんな公告が、教會の前に貼つてあつた、あれは矢ッ張り、行る氣なんだね？」

藤原牧師「何かせなけりやア生て居られんだらう……生存といふ事と、活動といふ事とは僕等には同じ意義ぢやアないか？」

潮金平「フム……醜業婦を救済すると云つて、又何んな手品をやるのか知ら

(237)

んが、白いものは白いもの、黒いものは黒いもので善いぢやアないか？
救済といふのは、白と黒とを混ぜ合せて、灰色にして安心してる事だ』

藤原牧師『私も昔の様な、そんな灰色の救済はやらん、野羊は野羊、羊は羊
つまりその本性を善く鑑別するのが差當り、私の新しい救済の意義だ、
少くとも救済に入るの第一歩だ』

鞠子『ぢやア私の云つた通り、その山羊の方を船に乗せて輸出したらお金が
儲かるぢやアありませんか？ね、潮さん、貴方それを買つて上げたら、
お父さんは金持になれるわ』

潮金平『フム、貴方はナカナカ商賣氣もある、私には、さすが女神の御宣託
だ、善い處に氣が附きました、藤原君、私は毎年、その山羊の方を仕入
れに船を寄せやうか？何うだ、君ももう、昔の様に、耶穌臭い、カビ臭

い事は云ふまい、己の様な悪魔の使徒と手を握つて、一商賣せんか？サ
ア、も一度、今度は商賣契約の爲の握手だ』

(藤原、起つて手を引込め)

藤原牧師『イヤ、然う輕卒に契約なんか結ばれない、まア、考へさせてく
れ』

潮金平『何時まで考へるんだ？』

藤原牧師『來年君等の來る時迄……それとも二三年、或は死ぬまで考へさせ
て貰はなげやならんかも知れん』と俯向く

潮金平『ハ、ア、そんなにまだ人間臭い事を云つてぢや、己等のやうな悪魔
にはなれさうもないぜ、己等は頭より、手の方が先へ出る、この頃はも
う手許しになつちやつた、君は頭一つで歩けると思つてるらしい、ハ、

、、何方も片輪者だらう』

鞠子『でもお父さんのやうな片輪者は、一生涯幸福といふものは感じられ
んでせう、手許りの人の方が幸福な片輪者だわ』

潮金平『女神のお告に間違ない、手許りの片輪者に、も一度握手させて下さ
い……アア、若い暖い血が身體に感じる、己は幸福な片輪者だ』

(二人、握手してゐる)

(兼子、入来る)

兼子『お話の形は附きましたか?』

潮金平『ア、一先づ纏は附きました、私はまだ金なんか要りません、その代
り、斯ういふ美しい女神を連れて行きます……イヤお伴をして行く事に
成りました』

(兼子、起つたまへ)

兼子『鞠子さんは愈行く事にしましたか?』

鞠子『ハイ……行きます』

兼子『お父さんは何と仰やつて?』 藤原を見る

鞠子『私はお母さんの子でないやうに、お父さんの子でもありませんわ、行
かうと自分で決心したから行くんです』

兼子『潮さん、何分にもよろしく願ひします、我儘者ですから愛相をお盡
かしなさらんやうに』

(潮、冷笑つて)

潮金平『イヤ、陸の上で我儘といふ事を、海の上では自由と云つてます、そ
んな御心配は一切、御無用です』

(兼子、考へて)

兼子『それにしても、あの、船の方は何うなさるお考へでせう?』と藤原を見

る

潮金平『イヤ、モウそんな御心配は要りません、藤原君にも話してあります

から』

(兼子、藤原に)

兼子『あの、ちよいと、お話がありますが!』

(藤原、起上つて)

藤原牧師『何事だ?……』

兼子『少し御相談したい事が』四邊を憚る風

藤原牧師『然うか?』

兼子『一寸次の室へ……潮さん、失禮しますよ、』二人、入つて行く

(兼子、立つて、歩き廻り)

鞠子『とうとう、お別れになつた、この壁も、窓も、机も……愈、これ限り

で見納めになつた』

(潮、シガレットを吹かしながら)

潮金平『直ぐに、僕と此處を出て行きますか?』

鞠子『直ぐに行きます、私もう手許りになるのですから』

(潮、笑つて)

潮金平『私等の女神には千本位手が無けりやいけないでせう』

鞠子『観音様の像にそんなのがありましたッけね、淺草に慥か!』

潮金平『いろんな陸の事を思ひ出しては海へ行つて辛棒が出来やせんよ』

鞠子「もう此方の陸の事なんか思ひ出さない様にします、唯新しい陸を見る
と云ふ希望しか持たないんですからね」

潮金平「早く支度をしてお置きななな」

(鞠子、沈思しつゝ歩き廻り乍ら)

鞠子「衣服さへ着替へたら、別に支度と云つて要らないんですわ、今朝、必
用のものは、皆、鞆に詰めて了つたんですから」

潮金平「早手廻しですね」

(鞠子、指を折つて)

鞠子「バイロンとシエレーと、ホイットマンと、それに、ウキリヤム、ブレ
ーキの詩集と、それから少し許りの着替、信一さんがオモチャにしてゐ
た幻燈と繪具箱位なもんですわ」

潮金平「お化粧道具は忘れちやいけませんよ」

鞠子「それも底の方に仕舞つてあるわ」と歩き廻る

(潮、笑つて)

潮金平「無論、然うでせうな」と煙を吹く

○鈴鳴る、お丸、植田と吉岡とを導いて入る

お丸「サア、何卒此方へ……あのお客さままでございます」云つて退場する

(植田老牧師、二人を見て)

植田老牧師「ヤ、お早う、お父さんは何うした、気分は善くなつたか、鞠子さ
ん？」

鞠子「ア、お父さんは一寸今、別の室よ」

吉岡工學士「鞠子さん、お早うございます」

(鞠子、空嘯いて)

鞠子『や早うござります』

(植田老 教師、潮金平をチヨイ〜睨んで)

植田老教師『あの人は何うした人だね』

鞠子『南洋から私を迎に来た船長なのよ』

植田老教師『エ、戯談云つちやアいけん、汝は人を茶化して許ゐる』

鞠子『私は何時も眞實の事を云つてるのに、貴方は勝手に、それを戯談にしてるんだわ』

吉岡工學士『何處で貴方、あの船長と知近になつたんですか？』と力んで問ふ

鞠子『此處で知近になつたのですよ！』

吉岡工學士『ちや 私より後にですな』と胸をソツと撫で下るす

鞠子『私は貴方と知近ぢやアありませんわ、唯顔を知つてる丈なのよ』

吉岡工學士『少くとも私の方では貴方を善く理解してゐます』と大眞面目でいふ

鞠子『理解なら、私の方がよく貴方を理解してると思ひますわ』

吉岡工學士『然うですか?!ちやア私を理解して、下さるんですか?』

鞠子『貴方は迷信家の、吝嗇家の、外見を飾る事にナカ〜熱心の方だと理解してゐます、知近ぢやアなくつてよ』

(吉岡工學士、顔を赧くして)

吉岡工學士『貴方は人を茶化しなざる癖がありますね』

植田老教師『何うも悪い癖ぢや』とコホ、コホ咳く

(鞠子、背を反けて一方へ動いて行く)

○ 兼子と藤原、二人、入来る

藤原牧師「ヤ、お早う……」

兼子「よく入らつしやいました」

植田老牧師「兼子さんはもう快いのか……それはよろしい(咳いて)藤原も昨夜は變な様子ぢやつたが、気分はもうサツパリしたか？」ザロ〜見る

吉岡工學士「夫人さんも然う起きてらつしやれ〜ば結構です、先生も何だか御逆上なすつてたとかいふ事でしたか？」

藤原牧師「ハイ、オア斯うして生さちや居ります」

植田老牧師「私は大そう氣遣かつたがオア生きて居りやア結構ぢやハ、ハ、」と笑ひ「何か、その、リザアイバルでも起りやアしないのか？」と藤原の顔を見る、藤原は黙つて笑つてゐる

兼子「何卒オア、お掛なさいまし」

(脇掛椅子へ腰をかけ)

植田老牧師「難有う……時に早速ぢやが、今朝吉岡さんが見えて何か建築用で電報がかゝつたので、急に九州の方へ旅行するといふ事で」(咳きつゝ、潮の方を見て小聲になり)「話しても構はんかい」

藤原牧師「些とも御遠慮は要りません」

植田老牧師「然うか(咳きつゝ)……それで、其前に是非、話丈纏めて貰ひ度いといふ御催促を受けたので、私も何んだか早く、纏まり丈は附けて置いた方が善いやうに思つて、又出掛けて來たんぢや、汝等から云つて、鞠子さんに考へ直して貰ふ事は出來ないか？」

吉岡工學士「實は少しく逗留が長引くかも知れませんが、途中、大阪で叔父にも逢はんけりやなりません、然うするといろ〜義理づくめの結婚

談なんか持上るかと思ひましてね』ザロ／＼鞠子を見る

(鞠子は、シガレットを取つて煙を吹かし始める)

衆子『ハイ、何うも本人が否といふものは仕方がございませんで』

(植田老教師、髯を撫でつゝ)

植田老教師『鞠子さんも眞實に、眞剣になつて考へたら、何んなに幸福な身の上になれるか、直ともう氣の附く事ぢやが……オヤ、煙草を吸つてゐる……これは怪しからん』と起き上つて進み寄る

(鞠子は、バツと軽く煙を吹きかける、植田老教師は咽て、咳き上つゝ)

鞠子『……これは何うも……女の子があんまり……生意氣ぢや……不埒ぢや、老年を馬鹿にする(咳きつゝ) 苟も牧師の娘たるものが、煙草を吸ふなんて何うも罪惡ぢやアないか? お止しなさい』と取上げにかゝる

(鞠子は早くも逃げて、煙を吹きつゝ)

鞠子『貴方等には何んでも罪惡ですわ、口を利くのも罪惡ぢやアなくつて?』

(吉岡工學士は茫然立つてゐる、潮はザロザロ眼を光らしてゐる)

(植田老教師太息を吐いて)

植田老教師『斯うして置いてはもう墮落する一方ぢや……、情ない親等ぢや……鞠子、煙草はお廢止よ、眞實にそんな者を吸ふ人間に碌なもの居らん』

(潮も煙を吹かしながらニヤリ／＼笑つて黙つて見る)

(衆子は耳語いて)

衆子『義父さんに貴方、打明けてお了ひなせ』

(藤原、頷いて)

藤原牧師「然うだ、何うせ隠して置けない事だから、信一の一條は兎に角、他の事は云つて了ふ」

兼子「今も打明けなさい、別室へ行つて……私は二人に今の事を話しますから」

藤原牧師「ウム、ぢやア然うせう……義父さん吉岡さんも一寸と、別室へ来て下さい、内密のお話がありますから」

植田老牧師「然うか……(咳きつ)話があるか？ぢやア行かう……鞠子さん、いかんよ、煙草なんか、眞實に今時の若い者が……」云ひく振り返り見がちに、歩いて行く

(藤原は二人を導いて入る)

(鞠子、肘掛椅子に倚りて)

鞠子「眞實に、あんな老爺さんは呼吸をしてるミイラだわ、あれで説教なんかしてゐるんだから私、可笑くて堪らない、他に何んにも能が無いから、神様が無くなつたら飯の食へない人ね」

(潮、笑つて)

潮金平「世の中はあれで持つた者ですよ、神様で食つて行く人もある、悪魔で食つて行く私の様な者もある、つまりは自分々の勝手ですよ」

兼子「老人はもう先が無いのだから、鞠子のやうに、あんなにかつかつたりなんかしちやアいけないよ、祖父様は矢張祖父様で通して上げるもんですよ」と椅子に倚る

鞠子「でもうるさくなるぢやアありませんか、あんな吉岡なんて人の處へ嫁

く程なら、寧ろ地獄へでも嫁入りした方が幾程優しだか知れやしないわ、行かないからと云つて断つても、断つても、私の幸福だの、將來の爲めだのと、お爲ごかしにしてくどく付き廻るなんて、眞實に呆れて了ふぢやありませんか、吉岡といふ人も譯の分らない人よ、一體あの人等のいふ幸福つて、何んでせう？女は世間並に人眞似をして、嫁に行つて、子を産んで、それからお媪さんになつたら、それを人生の幸福だと思つてるんでせうかねえ？」

(潮、笑つて)

潮金平「兎に角、あの男に取ては好いた女と結婚が出来れば、それが幸福に違ひないでせう」

鞠子「ぢやア女を不幸にして、男が幸福を得やうといふんですか？、まアそ

んなもんでせう、人を馬鹿にしてゐるわ」

兼子「もうお父さんの口から断つて貰へばそれで済む事だから、何んにも云はないが善いでせう……でも、汝のやうな我儘者をあんなに熱心に、やい／＼云つて、貰ひ度がつてゐて下さるのは、母親の身にとつては何んなに難有く思はれるか知れませんよ、あんなに身分もあり、財産もあり何處へ出しても立派な方なんだからね」

鞠子「それに信仰もありでせう」と又シガレットを煙らし始める

潮金平「建築用で出張するとか云ふんですね、技師さんですか？」

兼子「若い方ですけど、建築の方ではナカ／＼腕利で、大さう評判の高い方ですよ」

鞠子「あの會堂と高い塔とを建てたので、これから愈評判になる人でせう

ね』煙を吹く

(潮、振向いて窓越に見て?)

潮金平『あの會堂を?! ハ、ア、ぢやア鞠子さんが欲しさに特別入念に作り上げて、聳引出にする考へでやつたんでせう、ぢやア、あの赤煉瓦の一つ一つに、その執念も喰付いてる譯だね、愈以て山雀の藝當だ、ハ、ハ、ハ、』

兼子『考へて見ると可笑なもんですね、そりやア大體、私の恥を塗付けたのでせうけれど、他の信者だつて、聖人許りは居りまん、その方等の寄附金だつて、然う天から降つたものでもないんでせうからね』

(潮金平、頷いて)

潮金平『そりやア然ですとも、名目は立派でも、皆自分の罪を購ふ爲めに出

すものなんですよ、それでなくつても、何か神様の御利益を得やうといふ無慾の慾心からの献金だものね、然う思ふと世間一般の會堂なんでものも實は人間の惡魔心が建てるんだ、土臺石を掘起して見ると、イスカリオテのユダの名に依つてと、鑄り付けてあるかも知れん奴サね、ハ、ハ、ハ、』

兼子『あの、本願寺の毛綱だつて、皆罪障の深い婦人等の髮毛を切つて作へたのでせう? 私は京都へ寄つた時、あれを見たら、うねくして、生きた蛇のやうな氣がして、今に覺えてゐるんですよ』

鞠子『私もお母さんと一緒に見たのね、然う……私はあれを錯網に欲しいわ』

潮金平『ハ、鞠子さんは直と慾の爪を磨くんだね、イヤ、大に頼もしい』

兼子「オ、…私は一寸話があります」と少し改まつて「あの、今、藤原と相談したんですがね、貴方の御入用の二千圓のお金は、改めて私から鞠子の化粧料に、貴方へ差上げる事にしますから、何卒それで船を買つて下さい」

(鞠子、不平さうに)

鞠子「化粧料ですつて？お嫁に行くんぢやアなくつてよ」

兼子「ぢやア何んでも善い、鞠子の食費としても、取つて置いて下さい」

潮金平「貴方等が生活費に困らうから、まアその方は廢止して貰ひませう、この上然ら慾は乾くまう」

兼子「イヤ私等の方は又何うにでもなりますから、眞實に御遠慮なく、お取り下さい、こゝに手形を書きました」とさし出す

(潮、受取つて)

潮金平「然うですか!?…ぢやア男子らしく貰つて行きませう」

兼子「然うして下さい、それで船が買へるでせうから、何卒亂暴なんかして下さらんやうに願ひます」

(潮、笑つて鞠子を見て)

潮金平「母親つて云ふ者は、難有いもんだ」と一寸と戴いてポケットに入れる

鞠子「お母さんは自分の身上がもう大丈夫だと思ふからでせう」

(兼子、一寸睨む)

○扉の奥から叫ぶやうな聲

植田老牧師「もうその先は聞かん、聞かん、聞かんでもよい……こんな事があ
るべき筈か……」牛狂せるやうな、牛失神せるやうな顔色で植田老牧師が出て来る

後より、悄然たる吉岡工學士と俯向ける藤原とつく

(植田老牧師、頭を押へて)

植田老牧師「……實に何んとも云ひやうのない事ぢや……(咳いて)……神様の嚴罰が當つたんだよ、藤原……(咳きつ)……眞實に思ひ知るがよい……神様の嚴罰が當つたのぢや……」と兼子を睨んで立つ

吉岡工學士「眞實ですか……私は何んだか信じられん……」

植田老牧師「イヤ、しまひには斯うなるです、アヤフヤな信仰を持つて、神を偽り、基督に反いてる人間の末路は、皆斯うです(咳きつ)だから私もあの時結婚に反對した、伊太利人の未亡人なんか娘の後に入れるのは、家庭を紊亂する基だとかましく云つたのを聞かないから、こんな大事件が起つたんぢや」と咳きつ、又兼子を尻目に向け「見るも目の汚れになる」と

顔を反ける

吉岡工學士「私は何んと云つてよいか、判断が附さかねます」

藤原牧師「兎に角、事實は事實です、私は唯、ありの儘を打明けたのです、

この後の處分は貴方等の御考へ次第でせう」

植田老牧師「あの會堂が(咳く)あの新しい會堂が、罪惡といふ罪惡の塊りだと思ふと、私は神様の前に申譯はない(咳きつ)獻堂式をしたりして、實に、私も大なる罪人になつた氣がする……申譯はない(咳いて)……お兼、皆聞いたぞ、汝は何うしてこの大罪を贖ふ氣か？」睨んでゐる

(兼子、凄く笑つて)

兼子「私は罪を贖ふために會堂建築に金を出しました、それが却て私の罪になつたんでせう」

植田老牧師『そんな事を云つて、平氣でゐるのが氣が知れん、イヤ、不貞な、汚ららしい商賣なんかやる者はそんなに鐵面皮に出來てるんだらう、孫の信一があの高い塔から落ちて死んだのも皆汝の所爲ぢや……(暖いて)皆、汝のした事だよ、耻を知るが善いッ』

(藤原、宥めるやうに)

藤原牧師『今更、兼子を責めたつて仕方の無い事です、責任は皆私が被ります』

植田老牧師『汝は早速、退職するが善い』

藤原牧師『退職は愚か、私は今も申しましたやうに、基督敎を止めました、神を止しました』

(植田老牧師、勃として)

植田老牧師『不埒を吐すな、止められたんぢや、神様に止されたんぢやと云

へッ』

藤原牧師『私はこれを機會に、頭の中の舊い建物は土臺から壊しました、全く新しく築き上げる覺悟です』

植田老牧師『又、あのやうな汚れた新會堂と高い塔とを造るんぢやらう』

藤原牧師『何か知らんが活物は皆汚れてゐます、清いものは神のやうな死物です』

植田老牧師『エ、神が死物ぢや?!……貴様は氣が狂つたに相違ないッ?!』

(藤原笑つて)

藤原牧師『貴方が神様氣狂で、私が人間氣狂になつたのかも知れませんが、私は神は捨てました、然し人間は捨て兼ねます』

植田老牧師『そんな奴ぢやから神様の嚴罰が下つたんだ、(暖いて)この一家族

の者は、貴様の爲めに皆呪はれたんぢやぞッ』

(鞠子、フと起上つて近き來り、煙草を吹かしながら)

鞠子『私も呪はれたのでせう、お父さんがもう云ひましたか知らんが、私は私生兒……父知らずの子です……汚れた子です、ね、此丈云つたらもう祖父さんも愛相が盡きましたでせう、吉岡さんも私を嫁に欲しいとは云へないでせう』

植田老教師『エ……何んぢや？……汝までが然うか？』

吉岡工學士『エ、何んですつて？……藤原さんからはまだ聞きません、貴方が戯談云つてるんでせう？』

鞠子『こんな事にまで戯談が云へると思ひますか？ 信者は皆お人善ですねえ』

植田老教師『成る程、然う云へば女郎の子は女郎の子ぢや、する事、爲す事が皆人間並を外れてゐた(嘆きつ)：争はれんもんぢや……吉岡君、この話は無論お止めぢや、こゝらで止めてこそ貴方も助かつたといふもんですよ』

吉岡工學士『實際、鞠子さんが然うなんですすかねえ』と甚く失望の色

植田老教師『貴方も始めに私が反對した時、ウンと云つて服従して呉てたら善かつたんぢやが、若い者は何うも思慮が足らんで困る(嘆きつ) 建築にかけては巧者ぢやらうが、貴方も世間の事には眼端が利かぬ、無論、此の話は向ふから來度いと云つても斷つて了ふまですよ(嘆いて) 聞くも耳の汚になります』

吉岡工學士『然うですね、あんまり意外で何うも……』と頭を押へてゐる

鞠子「貴方等はそれでスツカリ、自分を白状したんだわ、自分が善いとか、素性が正しいとか、然ういふものがなければ、貴方等は戀したり、愛したりする事は出来ないのよ、私が妻に欲しいのではなくつて、私の影法師が妻にし度かつたんでせう、御安心なさい、もう貴方の方で中止めなかつても、私の方で此處には居ませんのよ、海へ行く事になつたのですからね……金平さん、女郎の子だつて、女神に差支ないんだわね？」

(潮、黙つて頷く)

吉岡工學士「エ、海へ……貴方が？」云ひく潮を見る

鞠子「海へ行つたら貴方等の様な、クリスチャンの顔を見ない丈でも氣が暢然しませう、潮さん、もう徐々行きませすか？」

植田老牧師「あの男子と一緒に往かうて云ふんか？」と藤原を見て「あれは誰ぢ

や……今汝何んとか云つたな？」

潮金平「悪魔だ！」と凄く笑ふ

(植田老牧師、睨んで)

植田老牧師「フ、ン……如何にも悪魔らしい、少女を誘拐して行く悪魔ぢやらう、藤原、汝はあの子を海の上へ遣る意か？」

藤原牧師「今更、止めたつて仕方がありません、兼子も異存ないんですから」

兼子「親は親で子は子ですもの、成るやうにしか成りませんわ」

(植田老牧師、忙しく白帯を捻り)

植田老牧師「あの、悪魔と名乗る男子は、兼子の昔馴染つて云ふんぢやらう、(嘆いて)ぢやアそれを娘の簪にする氣か、それで濟むと思ふんか？」

兼子「昔は昔で、今は今です、神様が助けてくれなけりやア、何うならうと

成行に任せる外、仕方がないぢやアありませんか？』

(植田老牧師、頭髪を掻き扱ひ)

植田老牧師『地獄ぢや……この家は地獄ぢや……神様が天火を降して此の家、一族……あの會堂も焼亡ぼして下さらんけりやア此處は清まらん、(咳きつ)此處の汚れは清まらん……神様！……神様！』と祈るが如き態度、よろめいて一隅に跪づく

(兼子、笑つて)

兼子『あの會堂を焼れたりなんかしちやア埋りませんわ、大切の金が費つてるんですもの、吉岡さん、貴方は執事さんですから何とかあの會堂の始末を附けて下さるでせうねえ？』

吉岡工學士『然うですね、今何うして善いか、私にも分りませんが、兎に角

基督教の會堂としては使用する事は出来ないでせう』

(藤原、笑つて)

藤原牧師『基督教の會堂として使用する事が出来なけりやア、僕等の方で使用する方が幾何もあります、イヤ、あれは天地間の新しいスフ井ングスです、スフ井ングスとして今後永久保存して、その屋根の下で、矢張永久、スフ井ングスの様な婦人等を育て、見ませう、建築に要した経費等の點に就いては、後日詳細御相談を遂げませう』

吉岡工學士『私は何うして善いか？ア皆の委員等に謀らないと何とも申せません』

兼子『だつて三分の二以上は私の金が出てるんですから、その金を返して下されば兎に角、然う委員さん等の自由勝手にはなりませんよ、それ丈

は堅くお断りして置きますから』

(植田老牧師、起ち上つて)

植田老牧師『あの會堂を何うする？……何かそんな事を云つたやうぢやつたな？』

吉岡工學士『いづれ皆の者と熟議した後でなくては、決定が附きません』

植田老牧師『そんな愚圖々々した考へを持つては仕方がない、これからでも人夫を備うて、早速、打頼しに取かゝるんぢや(咳いて)罪の紀念物なんか一日でも建て、置くと神の榮光が汚れる』

藤原牧師『ぢやア再びノアの洪水を起して、地上の一切の生物を滅ぼすより外に術はなくなるでせう』

(植田老牧師、咳いて)

植田老牧師『神の正義には替へられん……正義が立たなかつたら人類一切を滅亡しても構はないんぢや』

(藤原、笑つて)

藤原牧師『人類が一切滅亡した後の、正義といふ神様の顔が見度いもんですね』

(潮金平、すつくと起き上つて大欠伸し)

潮金平『ア、正義の基督者や、牧師の居る陸の上は尻こそばい、悪魔はもう海へ歸る時刻になつた、皆が濱で待ち草疲ひれてるだらう、ぢやア女神を連れて歸る事にする、鞠子さん、早く着替をなさい、行く事にしませう』

鞠子『ぢやア直と支度をして行ませう、ノアの洪水が幾何來ても、海の上へ

出てたら大丈夫よ』

兼子『まあそんなに周章で行かなくても善い、幾何何んだつて當分のお別れだもの、それとも一生の別れかも知れないから、告別の杯を一つして行くが善からう』

潮金平『ウム、お兼さんさすがによく氣が利いて來た、基督者を止めると人は皆斯ういふ氣の利いた人間になるものだ』

兼子『汝も大さうお世辭がよくなつたね』と入る

(植田老牧師、ザロく覗んで)

植田老牧師『人間は墮落すると際限が無くなる……藤原、娘の生てめた時は此の家に煙草の香や酒の匂はせなんだ(咳きつ)信一の讚美歌と、利子の祈禱と汝の説教とで神の家にいるやうぢやつたが、今日はどうとう悪魔

の酒盛が始まるのか?』

(鞠子、高聲に笑つて)

鞠子『ホ、ホ、お父さん、その代り、昔はこんな大きな笑ひ聲なんか聞えやしなかつたと仰いよ』

(藤原、默然……)

(植田老牧師、太息して)

植田老牧師『ア、世は末ぢや……人間は滅亡なけりや止まないんぢやらうね
吉岡君……?』

吉岡工學士『然うですね……私も何んだか譯が分らなくなりました』と頭を
押へる

植田老牧師『君まで他人に感染れちやいけないよ、磐石の如く堅き信仰の上

に立ち給へ、人は信ぜなくとも善いから神を信じ給へ、(咳いて)私は深く君の様な有爲の人の將來に望を屬してゐる』

鞠子『吉岡さんは植田の祖父さんの様な老人の善い相棒よ、若くて白髪が生えてるんだもの、分らなくなつたていふのは、何か錢勘定の暗算でもしてたんぢやアなくつて?』

(植田老牧師眼を瞋し)

植田老牧師『サタンよ、我後に退け! 汝なんか老人呼はりされて、馬鹿にされる程の老碌ぢやアないぞ、(咳きつ)要らん口を利く度に、女郎の子の腐つた腸が見える、日本では娘といふものは黙つて、嬌羞んでゐるもんぢや』

鞠子『女郎の子だから女郎の子らしくしたつて善いわ、貴方等の説教する

やうな神の子なら神の子らしくしたんでせう、私は他の日本の娘の様に黙つて嬌羞んで生きた人形のやうになつてゐる事は出来なくつてよ、そんな世間の習慣や、人間の規則に縛られなくつても善いから海の上に行くんですよ』

植田老牧師『フン、海の上へ行つて、サタンの子を産むのか?』

(鞠子、勃として)

鞠子『子なんか産みに行きやしないわ』

(潮、煙を吹かしながら)

潮金平『悪魔の眷族が殖えたら、神の國の城門が危くになりますかな、今から氣になりませう』

植田老牧師『私はサタンとは口は利かなら』

○兼子、銚子と玻璃杯を手に入れて入る

兼子「角の酒屋へ駆け付けさせましたの、さア、貴方も何卒一つ、告別ですから」

藤原牧師「ウム……我々の新しい聖晚餐か？」

(植田老牧師、苦り切つて)

植田老牧師「悪魔にも聖晚餐があるのぢやな？」

吉岡工學士「然うですな」と響き込んでゐる

藤原牧師「ぢやア、皆の健康を祝して」

(四人、聲を合せて)

「ブローツツト」カチリと杯鳴る

(潮、時計を眺め)

潮金平「鞠子さん、ぢやア、徐々出かけませう？」

(鞠子、頷いて)

鞠子「然うね、大急ぎで着替して來ませう」と駈入る

潮金平「ぢやア藤原君、來年又船を寄せます、その節、例の商賣の方の契約の返答を聞かう」

藤原牧師「何んとか返答をせう」

兼子「何卒、何彼に氣を付けてやつて下さい、あんな我儘な娘ですから、何分にも頼みますよ」

潮金平「船の女神ですもの、皆が信仰して、疎略にする所ぢやアありませ

んよ」

藤原牧師「何卒君が萬事保護してやつてくれ給へ、それは僕からも頼んで置

くよ』

潮金平『大丈夫だ、然うくどく云ふもんぢやアないよ』

○室内暫時沈黙、やがて鞠子は白い水兵服に着替へ、旅行鞆を手にして入來る

鞠子『さア、何時でも行けてよ』

兼子『鞠子さん、汝、何處へ行つても今迄のやうにあんまりな我儘を出してはいけませんよ、眞實に人に憎まれ口を利いたりして、皆から悪く思はれちやアいけないよ、お母さんを忘れておくれでないよ』と聲涙に曇る

鞠子『ハイ、私は今日、貴方を始めて眞のお母さんらしく思ひます、貴方が二千圓、潮さんに下さつたのも九分は母の情だと思ひます、一分は私を此家から早く外へ出さうといふ自我心だと勘付はしましたが、それで

もまア難有く思ひます』

兼子『母一人、子一人だもの……又、無事な顔を見せておくれ』

鞠子『それは分りません、唯、貴方と、お父さんの事は一生、忘れはしません……』藤原に、『お父さん……お母さんは私に母の情を見せてくれます

した、貴方も告別に、父として私の云ふ事を聽いて下さる』

藤原牧師『ア、何んでも云ふが善い、何んでも聽いて上げる』

鞠子『今日は一生の告別に、Give me a kiss at my lips!』

藤原牧師『Lips?!』

鞠子『Yes...not on the forehead...on my lips.』

(藤原、スット寄つて抱き、接吻する)

植田老牧師、顔を反り

植田老牧師『畜生ぢや……畜生ぢや……もう見てゐられない』と歩き廻る、

鞠子『お父さん、もうこれで私は満足して海の上へ行きます、海の上の女神になれます』

潮金平『ぢやア女神を連れて行きます、併し來年來る時には、存外、乳呑兒を抱いたお母さんになつてるかも知れません』と笑ふ

(鞠子、反抗的に)

鞠子『私は死ぬまで獨身よ』

潮金平『獨身でも、海の子を産むのなら善いだらう』

鞠子『海の子なら海に流しますわ』

(潮、笑つて)

潮金平『まア何んでも善い、サア行かう』立ち上る、

鞠子『行させよう』

衆子『氣を付けてお行きよ、新橋まで、堂守の老爺さんが行つて、荷物の世話をしてくれるやうに云ひ付けてあるんだからね』

藤原牧師『随分、健康に注意するがいよ、出来るなら、音信もしてくれ』

(鞠子、淋しく笑つて黙つてゐる)

潮金平『左様なら！』と藤原夫婦と握手、歩いて、植田老牧師の傍へ近寄り『お別れに悪魔と握手してくれませんか！』

植田老牧師『サタンよ、退け？』と喝破して手を背後に廻す

潮金平『ハ、ハ、ハ、悪魔の手の血の循環を知つて置いた方が、あ爲めだらうにね、……貴方は？』と吉岡工學士に向ふ

(吉岡工學士、手を出したり、引込めたり)

吉岡工學士『ハイ……あの……私は……』

(潮、強く握りしめ)

潮金平『この後も亦、新しい會堂を建て、精々金をお儲けなさい、これは悪魔が貴方の耳に囁いて置きます、左様なら！』

鞠子『左様なら！』と父母と握手し、他の二人に向ひ『左様なら！』と云ひつゝ、潮の手を把つて扉に入る

○動き廻り居たる植田老牧師

植田老牧師『實に見て居られん、見るに忍びん(咳きつゝ)神を失うた牧師の家の腐敗墮落は實に言語道斷ぢや……最愛の娘、利子の聳はこんなものになつた(咳いて)最愛の孫の信一迄、神様の罰を受けて塔から落た、ア、己はヨブぢや……併しヨブの様に一時でも神様を咎めたり、怨んだりはせ

ん……唯自分の信仰が足らん……信仰の足らんのを謹む外は無ゝ』

(藤原、近寄つて)

藤原牧師『お父さん、貴方は昔のヨブで、私は今のヨブでせう、貴方は神を信じてなけりや生てゐられません、私は神を信じないで、此から生て行かうと思ひます』

植田老牧師『汝にお父さんと云はれるのは、何んだか自分迄が墮落するやうに思はれる、娘を接吻したり、悪魔と酒を飲んだり、今のヨブは勝手な真似をするもんぢや(咳いて)私はそんな人と同じ世界に住んでゐるのが耻かし』

藤原牧師『正直に云へば、貴方と私とは同じ世界に住んでゐても、異つた空氣を呼吸して生きてゐるのでせう』

植田老牧師『然うぢや、汝は腐つた空気を吸つてゐるが、私は清い空気を吸つて生きてゐるんぢや』

藤原牧師『貴方の清いと思ふのは、山の上の稀薄な空気です、私は地上の濃い空気を呼吸してゐます』

(植田老牧師、白髯を撫して)

植田老牧師『然うぢや、私は高い山の絶頂へ上つて行くんぢや、天國に近い處へ上つて行きよるんぢや(咳いて)汝は地の上へ降りて行く、地獄の底の方へ落ちて行きよるんぢや、もう救ひやうは無』

藤原牧師『天國でも地獄でも、貴方は貴方の足の向いた方へお出なさい、私は私の思ふ通りに行きませう、貴方は貴方の舊い信仰を老人の杖にして突いて行くが善いでせう、私は若い者だから、自分の足丈依頼にして行

ける處まで行く考へです、もう議論はしますまい、神の名に依つてはなく、亡妻利子の名に依つて、又は死んだ信一の名に依つて握手しませ

ら』
(植田老牧師、首を掉つて)

植田老牧師『神の御名に依てとは云へまい(咳いて)私の信仰は永遠より永遠に互る神の貴い賜物ぢや、舊くなつても舊びはせん、汝等の様な亡んで行く人間と握手する必要は無』

藤原牧師『貴方は最愛の娘を失ひ、孫を失ひ、便るべき息子には先立たれて今一人法師の身ぢやアありませんか?』

(植田老牧師、白髯を撫して)

植田老牧師『神、我と共に在るのぢや、一人法師でも些とも心淋しくはな』

兼子「此からも折々入らしつて下さいませんでせうか？」

植田老牧師「神から放れて墮落した人間の顔なんか見るのも忌ぢや、以後、

縁は切る、左様なら！吉岡さん、さア行きませう！」

吉岡工學士「然う一酷に仰しやらないでも善いでせう、お考へ直しなすつては？」

植田老牧師「君もそんな事を云ふのか？もうこんな家に用事はないぢやアな
いか(咳いて)君が行かんけりや僕一人でも行く」

吉岡工學士「でもまア、然う怒つてお歸りなさらないでも善いでせう」

植田老牧師「エ、君のやうな不決斷な人間は取るに足らん、己は歸る」と、
つと入る

吉岡工學士「老人は何うも困りますな、まア左様なら！いづれ又……」と入る

○後には二人

藤原牧師「汝と私との天地になつた、これから眞實の新生涯を始めなけりや
ならん」

兼子「前の新生涯が嘘だつた様に、今度の新生涯が又嘘にならなけりや善
いんですが、何んだか不安心ですね」

藤原牧師「まア行ける處まで行くんだ、静としてるんが一番不安心だ」

兼子「鞠子は何うなるんでせうか？」

(藤原、苦悶の色)

藤原牧師「成るやうに成るんだらう」

兼子「然うですね、成るやうに成る……成るやうにしか成らん、然う思ふ
と、これより他に、安心する途はないんですね」

藤原牧師『それを一つの新しい誠めにするんだ』

○お丸入来る

お丸『あの五人程、婦人の方が訪ねて見えました、救濟會の事でも話がついたといふ事でごいいますか？』

兼子『五人程……何んな風の方だね？』

お丸『何んな風と申しまして……あの、皆、年齢の若い方で、顔の綺麗な人許りのやうです、女學生の人がその中に二三人も居りますやうです』

藤原牧師『然うか……それぢやア此處へ通つて貰ふか？』

兼子『でも貴方、まだ他にも後から来る人があるかも知れませんよ、此室ぢやア手狭ですから寧ろ會堂の方へ行つて貰つては何うでせう？』

藤原牧師『然う、十人も……その以上も、後から押掛けられても困るな……』

取り散らしては居るし、それぢやア然うするか？』

お丸『ぢやア會堂の方へと申しませうか？……(と、窓越しに、會堂の方を眺め)

アラ、彼方の教會の門口にも二三人、婦人の方が立つてゐられるやうでござりますよ』

(兼子も見て)

兼子『オヤ、成る程ね……ぢやア汝、然う云つて、皆さんを彼方の門の方へ御案内しといておくれ、堂守は今、鞠子等を新橋へ送つて行た留守だから、會堂の戸は此方から行つて、直開けて上るよ』

お丸『ハイ、畏まりました』と退場

兼子『兎に角、困つてる婦人の方が随分多いと見えますね、鞠子の代りに、眞實の娘が見附かるかも知れません、それを私は楽しみにさせよう』

藤原牧師『汝は白い羊を選ぶ役になれ』

兼子『貴方は何うなさるんですか？』

藤原牧師『私は差當り黒い山羊を選ぶ番だ』

兼子『灰色の救済は止めるといふんでせうね？』

藤原牧師『それ丈は出来る、併し私は商賣人になれるか何うか、自分が疑は

し』

兼子『まあ早く、皆に逢つて見やうぢやアありませんか、貴方も行つて會堂の戸口を開けてやらなけりやアなりませんよ、さア参りませう！』

藤原牧師『會堂の戸口？……新しい會堂の戸口？』と頭を押へて『あの中に入るのは何んだか怖い、何んだか怖い……活きた魔物の腹の中に吞込まれるやうだ、スフ井ンクスの中に入つて、私も永久スフ井ンクスのミイラ

になるのぢやアないか知ら？……皆も一緒に、スフ井ンクスの娘になるのぢやアないか知ら？』

兼子『貴方、今更そんな事を云つてないで、早く、戸口を明けてやらなけりや、皆が戸の前に迷つて、何時までも入れないぢやアありませんか？』

(藤原、沈思の後)

藤原牧師『汝、明けてやつてくれ、私は後から行く、私の力には明かないから汝行つて明けてやつてくれ』と、卓の抽出より鍵を取り出して、ガチャリと音させて、卓上に投出す

兼子『戸を明ける位に力は要ませんわ、貴方も早く後からお出なさいよ』と入る。

○藤原、後見送つて

藤原牧師『女は無造作にスフキングスの戸を開けるんだ』と睨と暫く窓から窺視してゐたが、『……ア、開けた……開けた……皆、スフキングスの腹の中に入つて了つた、又出て来るか、何うか分らん……己はあんなに單純に行ない、ア、何うすれば善いか、何うしたら善いか？』と歩き廻り『己は海にも行けない、あの會堂の中にも入れない、スフキングス！己自身もスフキングスだ……ア、此處にスフキングスがゐるのだらう』と後頭を拳にて打つ(幕)

牧師の家終

明治四拾三年五月七日印刷
 明治四拾三年五月十日發行

(定價金壹圓)

(許不行與斷無)



著者	中村吉藏
發行者	東京市京橋區 出雲町壹番地 野村鈴助
發行者	東京市神田區 表神保町四番地 中山三郎
印刷者	東京市京橋區 出雲町壹番地 野村鈴助
印刷所	東京市京橋區 日吉町十番地 新橋堂印刷部
發行所	東京市京橋區 出雲町壹番地 新橋堂書店
發行所	東京市神田區 表神保町四番地 春秋社書店

發賣元

東京市京橋區 出雲町壹番地

(新橋堂方)

名著刊行會

180-

